

646

646-7



1200501568267



646

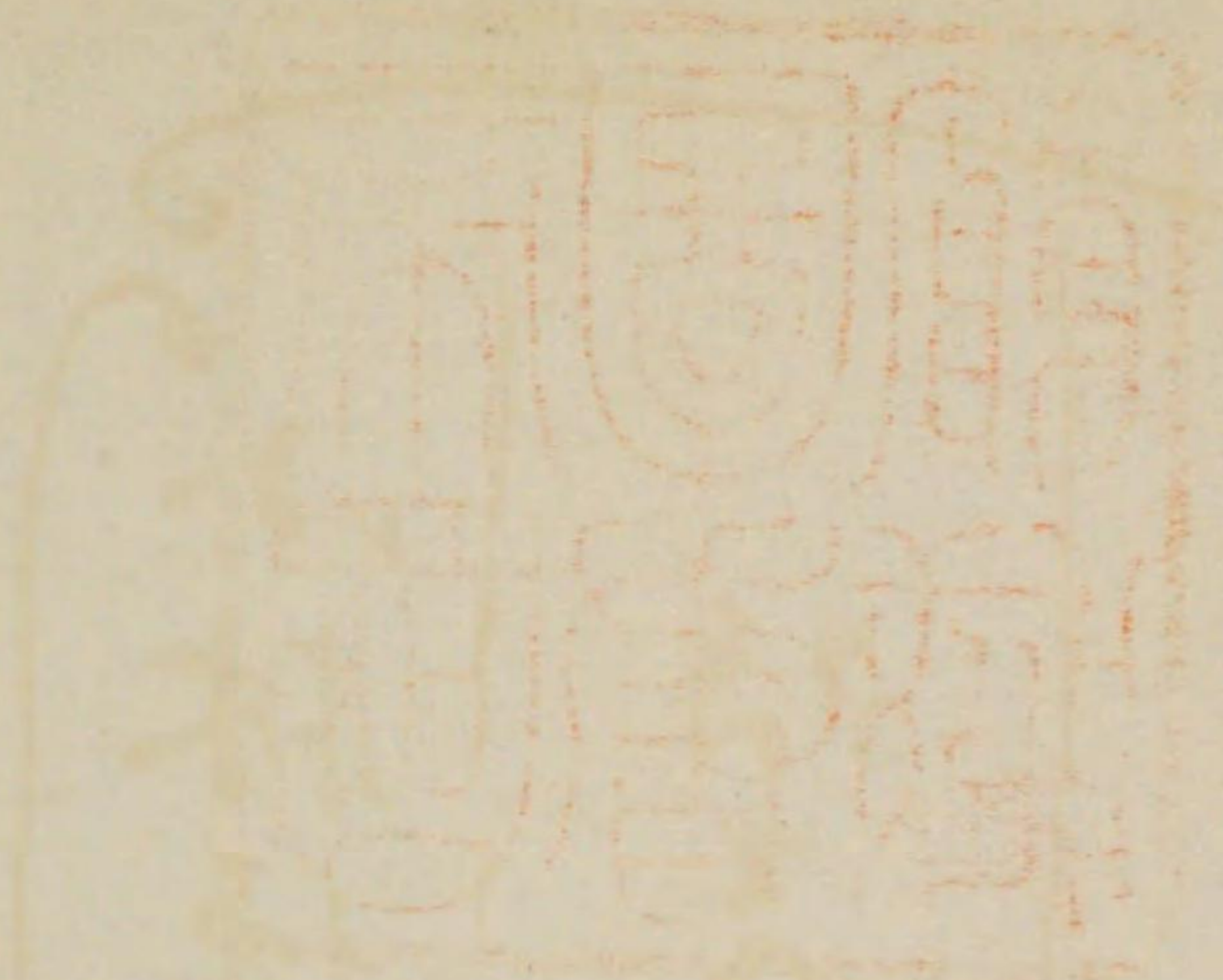
258



小林橘川著

陸軍  
曲直不圓

春秋社版





豊臣秀吉畫像

愛知縣中島郡大和村 臨濟宗 妙興寺所藏

本畫像は其筆者を詳にせずと雖も、慶長庚子(五年)季夏南化國師の替あるを見れば、當時の遺影たること疑を容れず。國師は秀吉の歸依僧にして、其命によりて妙興寺に住持たりし人なり。

馬上定<sub>ニ</sub>天下<sub>一</sub>。功如<sub>レ</sub>安<sub>ニ</sub>漢家<sub>一</sub>。一回任<sub>ニ</sub>關白<sub>一</sub>。九族列<sub>ニ</sub>清華<sub>一</sub>。豊國威靈。無<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>比。高<sub>ニ</sub>於泰<sub>一</sub>。重<sub>ニ</sub>於<sub>一</sub>。

咄。

慶長庚子季夏吉辰

前花園住山虛白山人謹賛 印

明會所藏

を發して四月二  
る小西行長は五  
未だ名護屋に達  
宛名おね禰は即ち  
の二女、永祿四  
て、端午の節句  
九月の節句の贈  
の爲に多く陥れ  
けるにより 聽  
に軍船をも揃へ  
べき旨を説き  
無は甲冑を着す  
嚴重に申付くる  
赴く由を申遣せ

今そてなし、とう  
く候、いり不<sub>レ</sub>申  
こちらいのみ  
おほしめし候。  
く久しくとゆわ  
はからにてうけ  
申あいた、こう  
り御さ候よし申  
間、やかてみや  
申て、やかてあ  
もしのむかいお

か ろ

慶長庚子季夏吉辰  
前花園住山虚白山人謹賛 印

豊臣秀吉畫像

愛知縣中島郡大和村 臨濟宗 妙興寺所藏

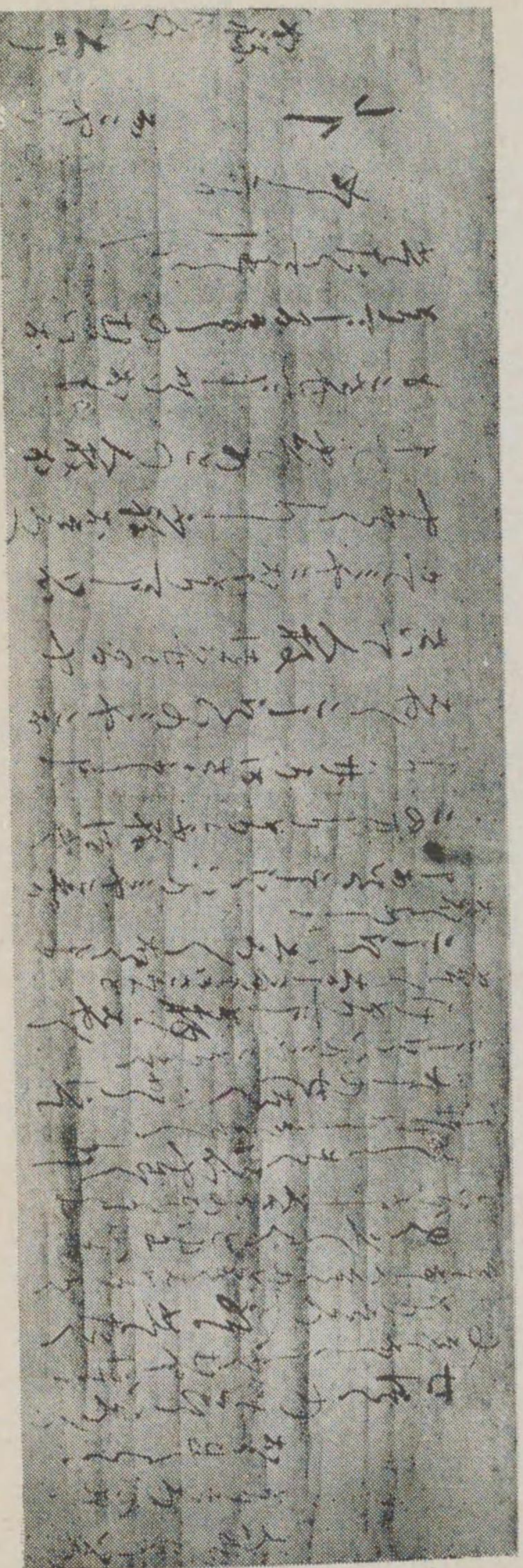
本畫像は其筆者を詳にせずと雖も、慶長庚子(五年)季夏南化國師の賛あるを見れば、當時の遺影たること疑を容れず。國師は秀吉の歸依僧にして、其命によりて妙興寺に住持たりし人なり。

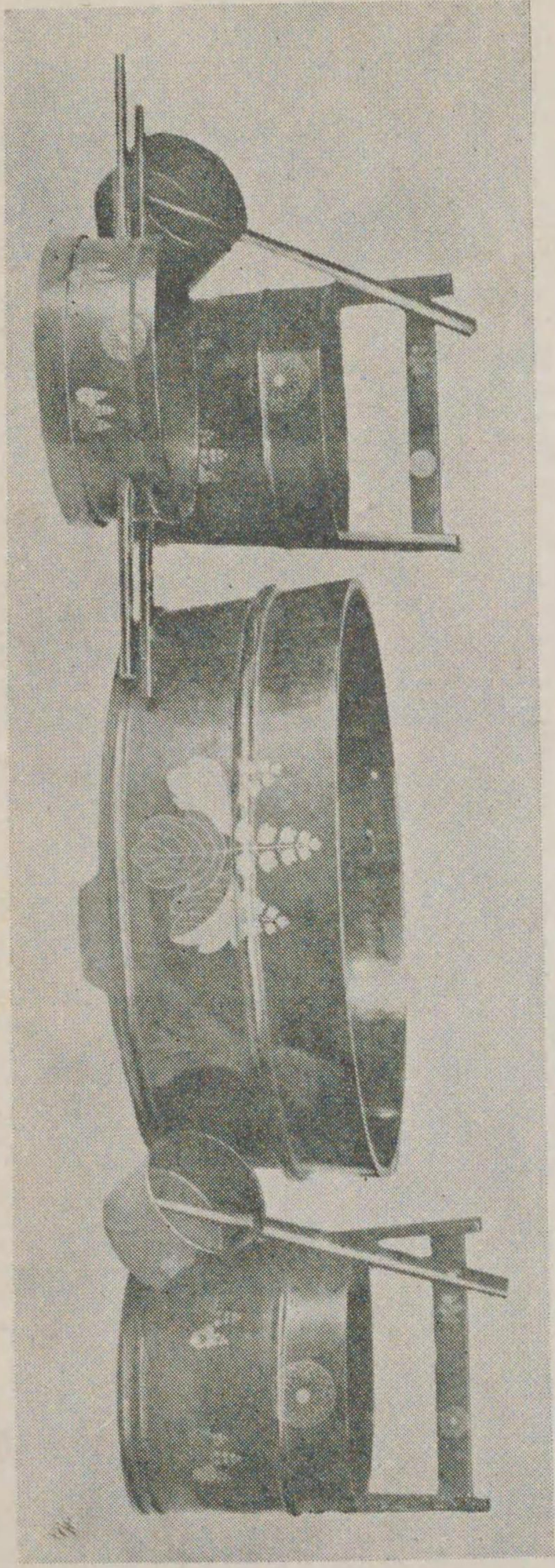
馬上定<sub>ニ</sub>天下<sub>一</sub>。功如<sub>レ</sub>安<sub>ニ</sub>漢家<sub>一</sub>。一回任<sub>ニ</sub>關白<sub>一</sub>。九族列<sub>ニ</sub>清華<sub>一</sub>。豊國威靈。無<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>比。高<sub>ニ</sub>於泰<sub>一</sub>。重<sub>ニ</sub>於舉<sub>一</sub>。

咄。

慶長庚子季夏吉辰

前花園佳山虛白山人謹賛 印





豊臣秀吉自筆書状

愛知縣名古屋市東區徳川町 尾張徳川黎明會所藏

豊臣秀吉は文祿元年朝鮮征伐に當り、其三月二十六日京都を發して四月二十五日肥前名護屋の行營に着せり。當時我征韓軍の先鋒たる小西行長は五月二日、加藤清正は翌三日共に京城に入りしが、其注進の未だ名護屋に達せざる以前、五月六日に北政所に宛てし秀吉の書状なり。宛名お禰は即ち北政所にして、杉原助左衛門後木下肥後守(定利入道道松の二女、永祿四年八月三日秀吉と結婚せり。此書状は北政所より秀吉に宛て、端午の節句の帷子を贈りしにより、秀吉は之に對して懇に禮を言ひ、九月の節句の贈物は明にて受取るべしとの抱負を述べ、朝鮮の諸城は我軍の爲に多く陥れられ、其都は我軍の占有せる港より二十里なるも、早や近けるにより、懸て都をも陥るゝことなるべく、此點は御安心ありたし、既に軍船をも揃へて援軍をも遣せしかば、間もなく明をも取りて御身を迎ふべき旨を説き其返し書には北政所の贈れる袖無、道服は其必要なく、袖無は甲冑を着する時には好けれども今は不用なり、尙大阪城の火の用心を嚴重に申付くることを命じ、必ず朝鮮の都を陥れて、自分も間もなく之に赴く由を申遣せるものなり。以て秀吉の意氣の壯なるを見るべし。

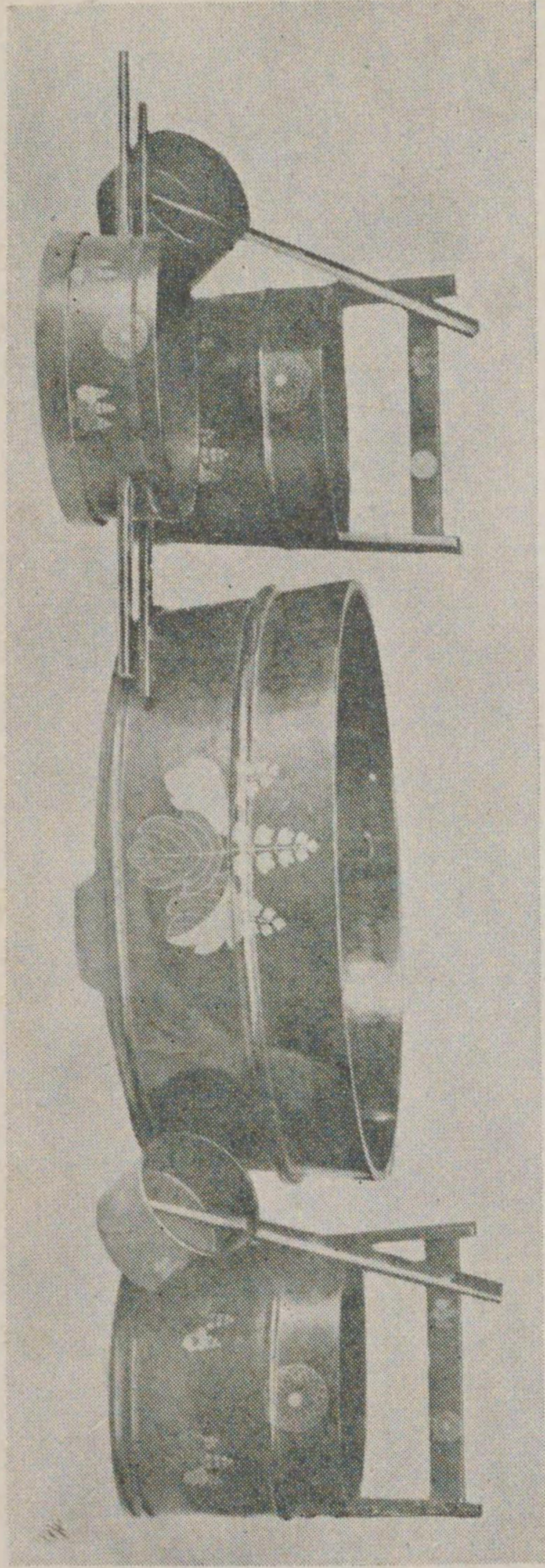
かへす／＼いろ／＼とりそろへ給候、おうれしく候。又そてなし、とうふくむやうにて候。そてなしはくそくのときはかりよく候、いり不申候。大きかのひのようしん申つけ候へく候。かならす／＼こうらいのみやことり候て、やかて／＼大かうさまも御さ候はんとおほしめし候。せつくのかたひらいろ／＼とりそろへ給候。めてたくゆく久しくとゆわい候てめし候ま、御心やすく候へく候。九月のせつくはからにてうけとり可申と存候。はや／＼こうらいしろ／＼おくとり申あいた、こうらいのみやこゑは、この方よりとり候ふねつきよりは廿り御さ候よし申候。はや／＼こうらいのみやこおさいて人數つかはせ候間、やかてみやこおもとり可申、御心やすく候へく候。ふねおそろへ申て、やかてあとの人數をもこさせ可申、からおもとり可申候間、そもしのむかいおめてたく可進之候。かしく。

五月六日

なこやより

大 か ろ

お 禰  
に 返 事



豊臣秀吉自筆書状

愛知縣名古屋市東區徳川町 尾張徳川 藪

豊臣秀吉は文祿元年朝鮮征伐に當り、其三月二十六日京都十五日肥前名護屋の行營に着せり。當時我征韓軍の先鋒た月二日、加藤清正は翌三日共に京城に入りしが、其注進のせざる以前、五月六日に北政所に宛てし秀吉の書状なり。北政所にして、杉原助左衛門後木下肥後守、定利入道道松年八月三日秀吉と結婚せり。此書状は北政所より秀吉に宛の帷子を贈りしにより、秀吉は之に對して懇に禮を言ひ、物は明にて受取るべしとの抱負を述べ、朝鮮の諸城は我軍られ、其都は我軍の占有せる港より二十里なるも、早や近て都をも陥るゝことなるべく、此點は御安心ありたし、既て援軍をも遣せしかば、間もなく明をも取りて御身を迎ふ其返し書には北政所の贈れる袖無、道服は其必要なく、袖る時には好けれども今は不用なり、尙大阪城の火の用心をことを命じ、必ず朝鮮の都を陥れて、自分も間もなく之にるものなり。以て秀吉の意氣の壯なるを見るべし。

かへす／＼いろ／＼とりそろへ給候、おうれしく候。おふくむやうにて候。そてなしはくそくのときはかりよ候。大きかのひのようしん申つけ候へく候。かならず／＼やことり候て、やかて／＼大かうさまも御き候はんとせつくのかたひらいろ／＼とりそろへ給候。めてたくゆい候てめし候ま、御心やすく候へく候。九月のせつくとり可申と存候。はや／＼こうらいしろ／＼おくとりらいのみやこゑは、この方よりとり候ふねつきよりは廿候。はや／＼こうらいのみやこおさいて人數つかはせ候こおもとり可申、御心やすく候へく候。ふねおそろへとの人數をもこさせ可申、からおもとり可申候間、そめてたく可進之候。かしこ。

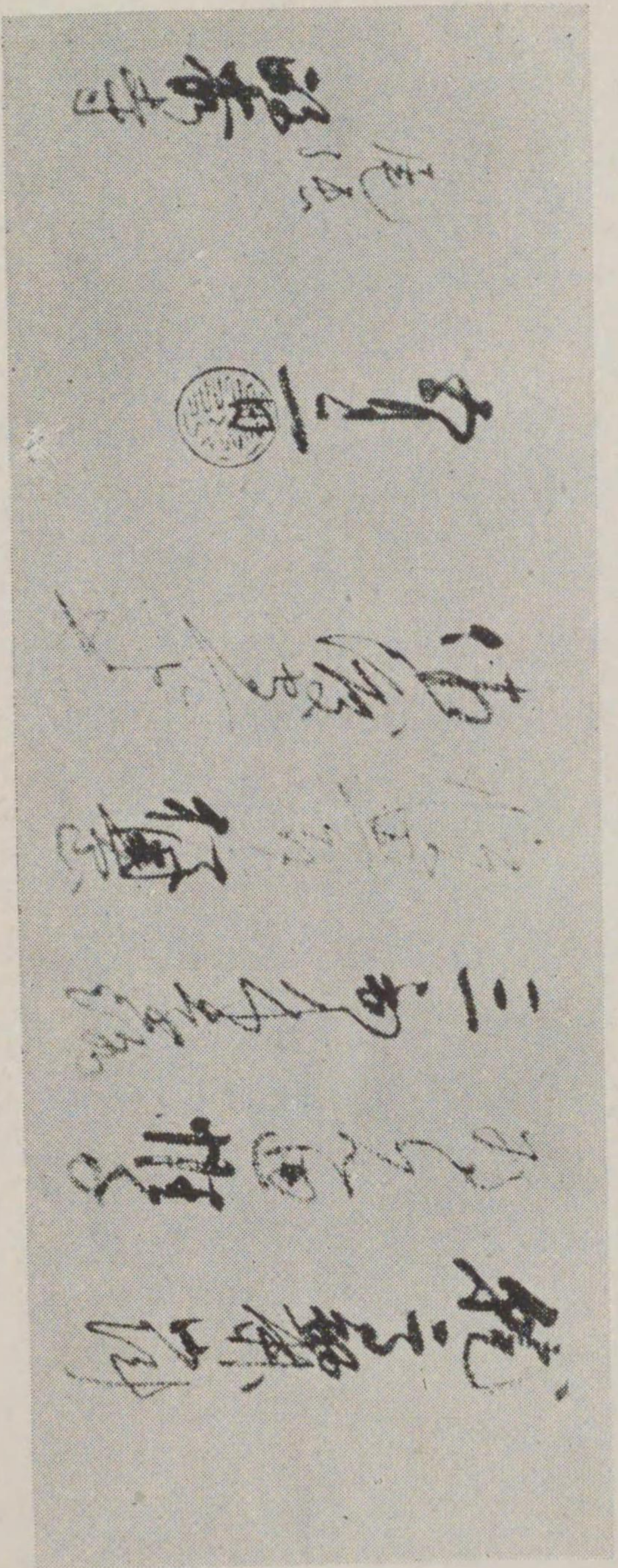
五月六日

なごやより

大

お 禰  
に 返事





豊臣秀吉

小牧陣使用品

愛知縣丹羽郡犬山町

子爵 成瀬正雄氏所藏

豊臣秀吉が天正十二年小牧陣の時使  
用せる物品中、現今成瀬子爵家に残  
れるもの、茲に示せる盥手桶、柄  
杓、水漉の外風呂桶、湯桶、其他具  
足櫃、膳、椀、食籠等あり。何れも  
黒塗に菊桐の蒔繪を施せるものにて、  
實に壯麗なり。

46-7

序

◇豊太閤が、尾州中村に生れてから、てうど四百年になる。彼の生れた中村が、上中村であるか下中村であるか、中村には、トニカクその邸宅の舊址として、豊公神社が祀まれてゐるが、それが、ほんとうの太閤の誕生地であつたかどうかは分らぬ。それほど太閤の素性はみすぼらしく誕生地の舊址はアイマイである。けれども吾々は日本人の心に、太閤ほど賑やかな、親しみを感ぜしめる人物はない、太閤は吾々日本人のあらゆる傳説、物語を通じて、もつと吾々に親しみぶかい人物になりきつてゐる。彼は尾州の太閤でもなければ、況んや中村の太閤でもない。全く日本の太閤であり、吾々の太閤である、太閤が水呑百姓のゴドモであり、氏素性をもたぬ平民の出身であるところに、國民大衆のしたしみが感ぜられる。

◇彼が、ドンなに衣冠束帯で、眉を描き、カネをつけ、ツケヒゲをして、好むで公卿生活を眞

豊臣秀吉朱印狀

愛知縣名古屋市中區矢場町

臨濟宗 政秀寺所藏

本文書は政秀寺より豊臣秀吉の朝鮮陣につき、見舞として帷子を獻上せるに對する秀吉の挨拶狀なり。秀吉の朱印は文字詳ならず、圓徑一寸餘なり。織田信長遭難の翌年たる天正十一年より之を用ひたるより見れば、信長の死灰未だ冷ならざるに、既に之に代る心ありしを見るべし。此印は糸印とて明より輸入せる生糸に附したる銅印なりともいふ。

就<sup>トシテ</sup>高麗御陣、爲<sup>トシテ</sup>見舞、帷子三到來、遠路  
悦思召候。猶奥山佐渡守可<sup>レ</sup>申候也。

五月二日

(朱印)

尾張 政 秀 寺

似て見ても、土百姓のワンパク小僧であつた昔を、読者はちやんと心得てゐる。だから、ドンナに太閤が太閤らしく、殿下の敬稱で呼ばれてゐても、位人臣を極めた地位に立つてゐても、民衆の眼に映する太閤は、眼光のするどい、猿に似た面貌をもつた、滑稽味のある吾々に親しい太閤のみが残つてゐる、太閤の人気ものたる點は、そこにある「いくら威張つたつて、お前のことは、チャンと知つてゐるぞ」民衆は、さうした眼と、さうした感じとで、太閤に親しむのである。

◇しかし、さうした大衆的な傳記物語の中にも、民衆を教訓するマジメな要素が、無限に、太閤の一生から汲みとられる、汲めば汲むほど、味ひのふかい教訓が滲み出て来る、寒中、草履を肌で温めて、信長のために、いつでも温かい草履を直すなどといふ、細かいところに氣のつくその心根には、實に草履の温かさ以上に、温かい人間的なものを感じさせられる。私は、それを思ふたびに、何かしら、目がしらの熱くなるのを感じる。

へ前田又左衛門との、貧乏時代の長屋生活には、朝夕、隣同士ゆきをしてゐた友交關係が、

ずつと一生を貫いて、少しも渝らなかつた。この二人の美しい友だち同士の生活を見ると、私たちは實に羨ましくなつてしまふ、太閤はさうした人情の至極した世界に、いつでも住んでゐたのである。

◇太閤の一生は、いつでも人情の機微を掴むで、それ一つで天下を自由、自在に動かして來たのだ、太閤ほど人間の表裏を機敏に洞察する力をもつた英雄はあるまい。彼の成功も、榮達も、一にかゝつてこの人情の洞察力にあつたといふも、あえて過言であるまい。太閤の傳記は、ひつきよう、彼の人情觀察史である。古今東西の、いかなる英雄、豪傑も、人間を知るにおいては、つるに太閤に及ぶものは、一人もなかつたと斷言してもよい。

◇さうした太閤にも、晩年の苦惱は見のがせまい。コドモゆへに、迷ひに迷ひ、惱みに惱むだ臨終の、アノ人間的な、大きな苦惱を見せつけられたとき、私は滂沱として涙の頬を下るのを禁じ得ない。私が、太閤に「落日の莊嚴」を感じたのは、その點である。

◇この、乏しい一書は、そこに焦點を置いた。そして英雄太閤の中に流れる人間太閤を讀まう

とつとめた。それが、この書で成功したとは、もとより考へてゐないけれども。

◇この書の世に出づるまでに何くれと面倒を見て頂いた畏友鈴木氏亨氏と、大宮伍三郎氏の友情と、あえて出版を引うけて下さつた春秋社とに對して、心からなる感謝をさぐぐ。

昭和十年六月

著者

はしがき



『英雄の霸業、すべて、ことごとく空し。』

豊太閤を偲ぶにつけて、私は何かしら、こうしたコトバを、つくづくと思ひ起すことを禁じ得ない。

豊太閤の一生は、まことに爛漫として、誇り咲く、春の花のように華やかで、賑やかであつた。

しかしその華やかさたるや、やがて直ぐにも落葩繽紛として、地に散りしく淋しさを伴ふ須叟の華やかさであつた。これを『淋しい華やかさ』といふべきか、『華やかな淋しさ』といふべきか、

とにかく底知れぬ一抹の寂寞感に裏づけられた華々しい一生であつた。



流離、混沌、輪廻の人的悲哀が、この英雄の一生には、影のごとく、くつきりとつき纏つて

あるのを見のがしてはならない、そこには人間のあくまで強い、朗らかな一面が堂々として、生活の表面に太い一線をなして貫いてゐる。しかし、人知れぬ地下の水脈には汲めども盡きぬ人間的な弱さ、はかなさ、善良さが滾々として流れてゐる。

◇

私は、豊太閤を一言にして形容し盡すべきコトバを、あれかこれかと久しくたづね求めて、容易にさがし當てることができなかつた。私は、この一ヶ月ばかり、豊太閤に關するあらゆる著述や、文献をあさるとともに、彼の遺しとゞめた足跡をたづねもとめて、この偉大な英雄を親しく私の全感覺を透して直接に觸れてみたいと念じた。わが英雄太閤を、四百年の歳月を隔て、ありし日のまゝに感ずるには、私自身を太閤の經驗した歴史的な一々の舞臺に置いて、その刹那刹那の心境を解きほぐしつゝ私の心の中で、それを再演して見るより外に方法がなかつた。

◇

私はまづ、山崎合戦の戦跡を訪ねて天王山の山頂を極めた。姫路に走つて、白鷺城頭の小天守

に、彼が築き住んだ古城に、追懷をほしいまゝにした。幾日にもかけて私は京畿の山河を跋涉して、彼の見たごとく見、彼の聞けるごとく聞き、彼の感じたごとく感じようとした。眞に豊太閤を知るにはさうすることが、私にとつてもつとも直接的な方法であると信じたからである。

◇

私は、歴史家ではないから、古文書や、史料を涉獵して、太閤の眞面目を知らうとするやうな、學問的な方法は考へおよばぬことである。私はまた小説家ではないから、空想をほしいまゝにして、架空の事實を自由自在に、描寫するやうな器用な藝當はおよびもつかないところである。しかしながら小説家でなくとも、歴史家でなくとも、豊太閤を直接に感じ得る道は、いくらでもあるはずだと信じてゐる。新聞記者としての私が新聞人として、いかに豊太閤を見るかといふ領域は、自由に私の眼前にひらかれてゐるのではあるまいか。私には何等新らしい材料はない。たゞ世間にありふれた太閤傳記を、断片的に通覽して、それを唯一の根據として「私の豊太閤觀」を述べて見たいと決心したのは、新聞人たる吾々にも、歴史人を評傳する道のあるべきを信じてゐる

るからである。本文は、さうした私のもつてゐる立場で、豊太閤を偲ぼうとするのである。

◇

一言にして、豊太閤を盡せば、『彼は落日の莊嚴』といった感じである。

『落日の莊嚴』これは、私の久しくたづね求めてゐた豊太閤の全面目、全人物を、躍如として浮び上らせるに足るべき實感をもつたところのコトバである。そして私はこの一言を發見することによつて、私の豊太閤論は、すでに全く完了したとすら信ずる。

## ある日の光景

二月十四日の午後五時過ぎ、ぼか／＼と、温かすぎる程、あた／＼かい浅春の一日は、や／＼西に傾きかけてゐた。

私の列車は、山崎驛を過ぎて、天王山下を西に、ひた走りに走つてゐる。竹藪の多い、麓の傾斜地に點綴する村々の田舎家には、もう西日がうす黄ぐるく照り映えてゐる。籬落のところ／＼には、白梅が、まばらな花をつけてゐるものもある。低く一脈の山崎山系が切れると、眼界は急に開けて、攝津平野が展開する、大阪はもう近い。

◇

やがて、私の列車は、急に、轟々たる、ヒステリカルな轍輪の音を、高くあげ始めた。列車は新神崎川の鐵橋に差しかゝつたのである。

その時である。

私は、フト、列車の走る方向と直角する、右手の窗外、はるかなる彼方の空に、堂々として偉大なる落日の光景を發見した。それはまた何といふスバラシイ光景であらうか。

新神崎川の河床は、生ひ茂れる蘆荻が、青々と、いづくまでも、緑の柔かい色に塗こめられてゐる、その中流をしらじらと、飴を流したように、銀蛇の流れが、ゆるやかに流れてゐる。さうした一望、何の遮ぎるものもない大河の彼方に、一個の巨大な落日が、輝ける光焰をあげて、燦

然として夕焼の空にかゝつてゐるではないか。

然るに驚くべし、その巨大な光焰は、やがて動き始めたのである。實に、私の列車と併行して、私の列車に速度を合せて、みる／＼、活潑に走り始めたのである。走るにつれて團々たる、まんない火の光りは、柔かい餅のごとく前後に膨れ、飴のごとく左右に引き伸ばされて、楕圓形となり、砲彈形となり、水雷形となつて、列車の走る方向に向つてひたすらに天空を翔けて行くではないか。その走るや、煙突を突つきり、高樓を飛び超え、電線を斷ち切つて、夕焼雲のたゞれた紅焰を、前後に棚曳かせつゝ堂々として突進する。それは壯觀といはんよりは、むしろ莊嚴、雄大の限りを極めたものであつた。

私は、この『落日の莊嚴』に、しみじみと心を撃たれつゝ、ヂツと汽車の窓ガラスに、額を押つけてゐた。

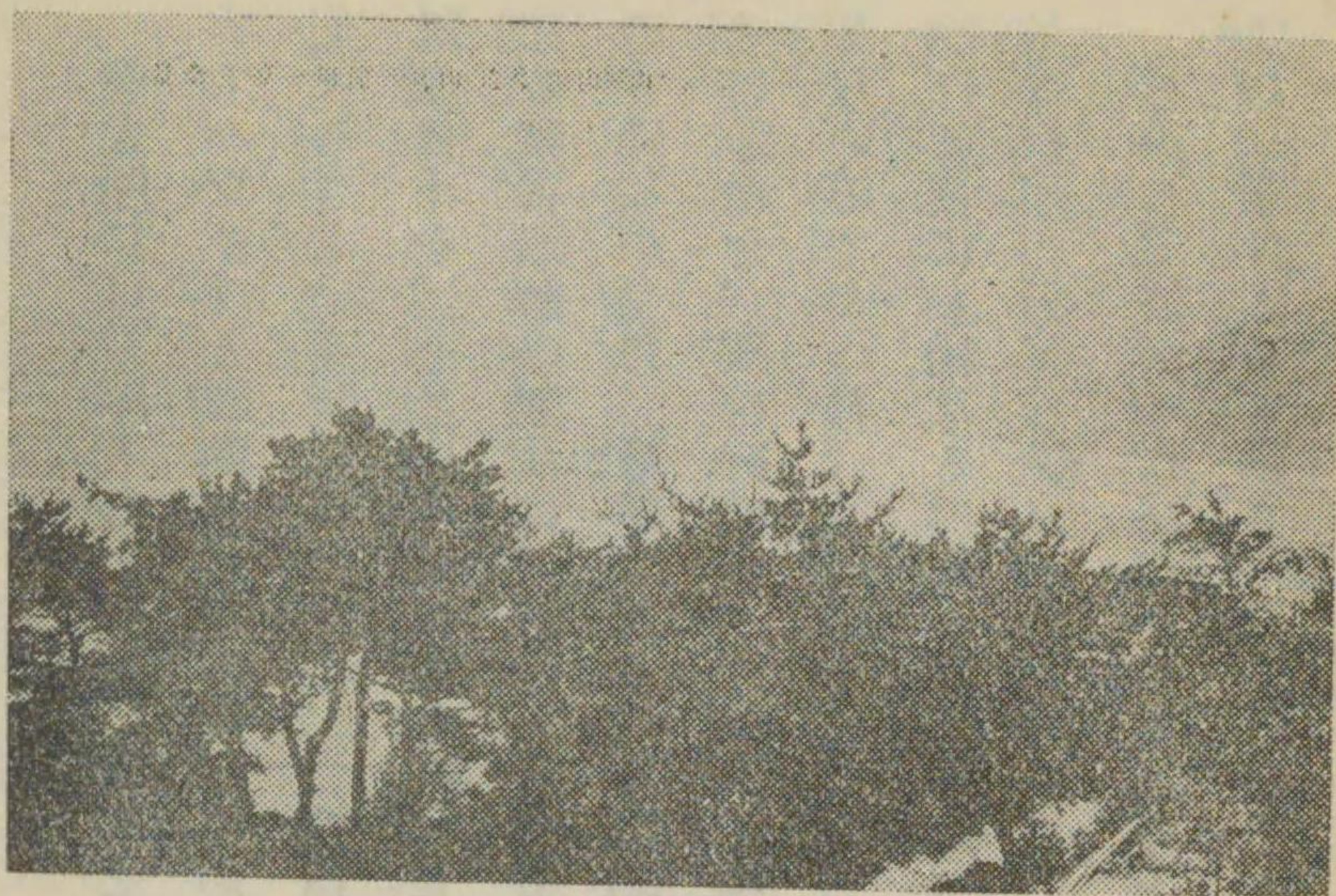
さうだ、吾が豊太閤の一生は、この落日のように莊嚴で、雄大で堂々たるものであつた、と。



豊太閤には、華々しい、若い青春といふものがない、彼の存在があゝの時代の群雄を壓して、始めてハッキリと認識されたのは、彼がすでに四十七歳の時であつた。彼には輝やき出づる旭日の若々しさといふ時代はなかつた。織田信長が、本能寺の變によつて、四十九歳を一期として、英雄の偉業を、一片の灰燼に歸し終つた時、まだ羽柴築前守秀吉であつた豊太閤の非凡にして偉大なる曠古無前の運命は、忽焉として彼の前に開けた。彼はこの運命を自から開かうとして開いたのではなかつた、豫期せざる時に豫期せざる運命が、偶然にも彼を訪づれたのに過ぎなかつた。その運命を、彼は突嗟にスバヤク、機會を外さずして、しかと一つかみに掴んでしまつたのに過ぎないのであつた。彼の脚下に、ころ／＼と、何ものかが轉つて來た。つと拾ひ取つて見ると、これは世にも稀なる、大きなダイヤモンドだつた。



しかし、彼が一たびかうして立ち上り、動き出した時は、彼の人生はもう夕暮に近かつた。彼はたゞ落日として動き、たゞ落日として輝き、あらん限りの變化ある運動によつてたゞ彼の落日



天玉山ヨリ淀川一帯ヲ望ム

を莊嚴にしたのである。

## 私は老人だ

『私は、老人だ、私はもう老い疲れてゐる。すでに故殿の亡くなつた上は、この世にあつて、何を希ひ求める志もない、どうか、先君の遺孤、三法師君のおもりとして、私をお側に置いて貰ひたい』

これが、山崎合戦に、信長父子の復讐をとげて、赫赫たる地位を獲得した秀吉が、織田家の後嗣會議において、柴田勝家に申出でたところの殊勝な願ひであつた。

もちろん、秀吉は覇氣満々、充實し切つた精力を傾けて、信長幕下の群雄を、一なめに嘗めてしまはうといふ、意氣に燃えてゐた時であつた。彼はたゞ織田家の宿將柴田勝家をあやなすための一時の出まかせとして、こんな殊勝な隠居じみたコトバを吐いたのに過ぎぬ。しかし秀吉が、もう人生初老の年齢に達してゐて『私は老人だ』と自からを謙遜しても、一向不似合とは思はれぬほどに、彼は年をとつてゐたのである。

彼が日本歴史のページに、不拔な第一足跡を遺した時は、もう人生の落日に近かつたのだ。

『落日の莊嚴』といふコトバは豊太閤の華やかな一生を形容するコトバとしては、何よりももつともふさはしい。

◇

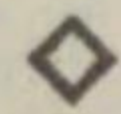
さて、私の大阪郊外において、ゆくりなくも発見した落日の光景は、列車が大阪驛に着くとともに急に方角が變つて、淀川河口の彼方に急回轉してしまつた。そこには、もう活潑な光焰の大飛躍は停止されて、たゞ海の彼方に沈み行く落日の寂しさのみがあつた。下半部を黒い積雲に蔽



はれて、僅かに赤々と光るところの上半部が、お盆にめしを盛りあげたような姿で輝やいてゐた。その輝やきも、次第にうすれて、津島神社の提灯まつりを見るように、夜の空に、提灯の光りがフラ／＼と迷つてゐるような、儂ない色にぼやけて行つた。

いつしか、私の汽車は、大阪を西に走りつゞけてゐる。そして莊嚴な落日は、もう全く海に落ちてあたりは蒼茫として、夕ぐれの風がうすら寒く窓に迫つてゐた。

豊太閣の一生を、靜かに思ひ浮べてゐた私は、彼が築き遣して行つた大阪都城の煤煙を潜りぬけながら、妙にセンチメンタルな感じで、彼の臨終と、豊家の没落とを悲しむ心で一杯になつた。



谷崎潤一郎、ものするところの小説『盲目物語』は、秀吉が信長の令妹小谷の方を、柴田勝家とともに争ふ戀愛葛藤を中心として描いたものである。そこには秘められた愛の若々しさが、彼の生活を支配したいきさつが、谷崎の麗筆をもつて、心ゆくまで語られてゐる。つよい愛戀をもつて貫く英雄の生活、それもまた豊太閣の一面であるには違ひない。二、三の断片的史料を根據

として、太閣の秘められた戀愛生活を一篇の『盲目物語』にまで創作した谷崎の着眼と、構想とのエラサは、歴史家の彼此の『せんさく』をはるかに超越したところがあつて、坐ろに感歎を禁じ得ない。しかしそれもこれも、私にとつてはたゞ一つの『落日の莊嚴』にしか過ぎないと思はれるのである。



歴史の必然を信じたのはマルクスであつたが、果して歴史が必然だらうか、歴史はたゞ、偶然なものでなからうか、豊太閣は英雄であつた、かし彼は英雄たらんとして英雄になつたのではなく、かの偉大な覇業も、功績も、ひつきようは、刹那々々の發展で、それは要するに氣まぐれな、偶然なものでなからうか。

たゞ、しかし豊太閣は、彼の一生において、たゞ一度の機會を捉へた。彼がもつとも充實し、緊張してゐたのは山崎合戦の一戦であつた。彼は一生一度の大ばくちをこれに賭けたのだつた。

## 運命の一戦

織田信長は、永祿三年五月十九日、桶狭間の合戦において、天下分け目の戦いを演じた。徳川家康は、懐長五年九月十五日、關ヶ原の合戦において、天下分け目の戦いを演じた。それと同一の意味において、太閤秀吉は、天正十年六月十三日、山崎の合戦において、彼が運命を決する天下分け目の戦いをやったのである。秀吉の運命は、全く此一戦によつて決定しただからおそろく彼の全生涯を通じて、山崎合戦ほど、充實、緊張したる戦いを演じたことはないであらう。

人生の運命は、いづどこで、どう轉回するか、全く測り知るべからざるものがある。もし明智光秀の本能寺襲撃の事がなかつたならば、秀吉の運命は、あゝした展開の道を取らなかつたであらう。そして日本歴史は、今日あるがごとき状態とは、よほど變つた徑路を辿つた事であらう。そして徳川三百年の歴史は、今のごとく敘述されないうで終つたかも知れないのである。だから、

歴史に必然はない。歴史はたゞ偶然から偶然への轉化にすぎない。

◇

豊太閤の歴史は、尾州中村の誕生から始まる、しかしながら、眞の豊太閤の歴史は、彼が中村に生れたことの問題に囚はるべきではない。彼の父が誰であり、彼の母が誰であるかのせんさくは、世間のいはゆる歴史家先生に委せて置いて十分である。また豊太閤の豪華なる生活を偲んで今日、醍醐の花見を再演したり、北野の大茶の湯をまねて見たりしても、それは要するにも、すきの遊戯に過ぎぬ。醍醐の花見も、北野の茶の湯も、秀吉といふ人物を中心にしてこそ、そこに意義があるのであるが、秀吉を抜きにしての、今人の花見や茶の湯の興行に、英雄の面目を髣髴させる何ものかがあるだらうか。

◇

しかし、さうした議論は、しばらくこゝでは遠慮しておかう。

たゞ、豊太閤の歴史的使命の出發點は、山崎合戦から始まる。それ以前の彼の歴史は、たゞの

前史に過ぎない。織田信長の開拓したる天下の覇業を、しつかりと繼承したのは、彼が天王山の一關を、確實に把握した刹那からである。太閤の歴史を読むものは、まづそこに着眼しなければならぬ。

◇  
天正十年六月二日、織田信長は逆臣明智光秀の爲に、京都の本能寺に憤死し、その子信忠は、二條城に自盡した、信長の天下統一の事業は、中途にして、ゆくりなくも挫折してしまつたのである、そして機會は、秀吉の前に轉がりこんで來た。秀吉は決然として立ち上つた、光秀はもとより彼の敵ではない。秀吉は一の逆賊光秀を敵として立ち上つたのではない。天下の覇業を自己の掌裡に把握すべく、一舉にして彼の運命を決するためには立ち上つたのである。そして、彼は「一ザーのごとく、アレキサンダーの如く、ナポレオンのごとく『吾來り、吾戦ひ、吾勝てり』」との概をもつて、ミゴトにこの難關を突破した。

彼は、無雜作に、きはめてカンタンに、天下分け目の戦ひを、決してしまつた、彼は立ち上るとともに、たゞ一撃の下に、敵手を地に叩きつけてしまつた、實にアツケない決戦であつた。しかし彼はあらゆる辛酸と、勞苦と、忍従とを獻げつくした前半生の歴史的生涯を、この一戦に賭けて戦つたのである、『凡てか、無か』、『ヲール、オア、ナッシング』、それが天王山の戦ひであつた。

彼は、機會を知つてゐた、戦ふべき時に戦ひ、取るべきを取つたたゞそれだけである。凡そ英雄の凡人と異るところは、たゞそれだけである。しかし彼が天下の覇權を掌握したのは、取らんと志して取つたのではなく、取らざるを得ずして、餘儀なく取つたのである。いひかふれば、彼は進んで天下を取つたのではなく、天下が彼に取られんことを望んで、彼の脚下にころげこんで來たまでである。

## ハダカ一貫

白鷺城をもつて知られてゐる姫路城の天守は、凡そ、城といふものゝ美しき、完全さを、もつとも原型に近い形で保存してゐる點では、吾國唯一のものである。

城の天守に接續して、小天守とよばれ、太閤丸とよばれる舊天守が、その西北方に連なつてゐる鬱々たる美林に隠されて、その太閤丸は外觀美として表はれてゐないが、こゝはかつてわが太閤秀吉が、四年間の中國征伐の足だまりとして、起居したところである。

天正十年六月八日午前十時、備中高松の城主清水宗治兄弟に腹を切らせ毛利と媾和して、急遽、夜を日について全軍をもつて姫路城に引きあげて來た、毛利軍が、誓書を破つて追撃して來るかどうかが懸念であつたが、遂に毛利は自重した、秀吉はホツと一息ついた。



三日の夜半十一時頃、本能寺兇變の報を受けとつて以來、足かけ六日間、全くの不眠不休で、緊張しつゞけた全身の疲勞が、彼を襲つた。

姫路城には、疲れた彼を迎へるべく、風呂がわいてゐた。

中國征伐の監軍として、信長からつけられてゐた堀久太郎秀政と一緒にあつたが、この時ばかりは秀吉は朋輩の堀久太郎にいつものように『まづ入りたまへ』とアイサツすることをしなかつた。城に秀吉の母が、逢ひたくて待つてゐた。

『母が對面したいと、度々の使者に及びたれば、おさきへ御免蒙る、貴殿は、信勝と一所に、アトからゆる／＼とお入りなりたい』

さう、云ひすてゝ入浴した。六日間のアセあぶらを、緩くりと洗ひ落したのである。この時の入浴の快味は、どんなであつたらうか。

梅雨期の、ふりつゞいた雨の後の、すが／＼しく晴れた青空が、まつさをに輝いてゐる、連日行軍の疲勞を、風呂の湯に洗ひ落してさつぱりした、晝とも夜ともつかぬ朦朧たる積日疲勞の雲

霧が、拭ふがごとく晴れた、爽やかな元氣が回復した。湯殿の窓から透かして見ゆる五月晴れの空を仰いで、秀吉は勃然として立ち上つた。

◇

素ハダカのまま、彼は風呂のあがり屋に腰かけた。

肩を流すために、小姓が、彼の傍にゐた、秀吉は小姓を顧みて、直ちに軍令を出した、軍令は早速老臣、物頭に觸れられた。

『明朝、進發

天主にて、一番貝を鳴らしたらば、飯をたけ

二番貝で人夫以下を出勤させよ

三番貝を、欄干橋で吹くとともに、總軍、印南野に勢揃ひすべし、自身、出馬、見聞におよぶべきにつき、早々支度せよ』

◇

更に金奉行、藏奉行を、湯殿のあがり屋に召よせた。

まづ、金奉行に向つて

『今、天主に、金銀はどれ程あるか』

『銀子七百五十貫、金は千枚まではなし、八百枚の餘はござりませう』

秀吉は肯いた。

『よし、金銀は跡に残してはならぬ、全部、蜂須賀彦右衛門の所へ持参し、知行割で、分配させよ』

◇

次に、秀吉は藏奉行に尋ねた。

『藏には、米は、どれほどあるか』

『八萬五千石ほどと覺えます』

『それでは、それを今日から年末までの祿米の勘定にして、それを五倍にして分配せよ、早く

せよ、みんな妻子は、扶持方をたのしみにしてゐるのだ。』

◇  
西國征伐の費用の手許に残れるもの、銀子十貫目、金子四百六十枚、それも秀吉は、出陣に當つて使者、飛脚などの、褒美に取らせるから、明日持參せよと命じた。

◇  
軍令は終つた。

金も、米も、一切を、將士に頒つて、ほんとうにハダカ一貫になつた。

彼は風呂を出て粥を食つた。

## 博奕は成り目

姫路城の創築以前までは、姫山を鷺山ともよんだ。丘を蔽ふ鬱々たる美林には、無数の白鷺が

群棲してゐた。今も、姫路城には、樹木を枯らすまでに五位鷺が栖んでゐる。この城を白鷺城とよぶのはそのためだ。

しかし天守、樓門、城廓のすべてを大觀して、壁の白堊と、屋根の漆喰とが、白鷺そのまゝの美しさと、清さとを感ぜしめる。秀吉は天正五年、播磨の領主に封ぜられ、天正八年四月、小寺官兵衛の居城を譲られて、こゝに入つた。九年、赤松家の置鹽城をとり毀して、その材料を運搬して、三層の天守閣を築造した。現在の太閤丸がそれである。

◇  
秀吉は、明日、この城を出たならば、再びこゝへ歸るつもりはなかつた。武運拙なく敗北すれば、それまでだ、もし大勝を博すれば彼は天下取りだ。金も、米も、城も、すべて、今の彼に必要はなかつた。すべてを擲つた。スッパダカになつた。

粥をたべてしまつてから、秀吉は人々のゐるところへ歸つて來た。堀久太郎等は、そこに最前より寛いで、雑談してゐた。

秀吉は座にすわつた、堀を顧みていつた。

『この秀吉は、こゝで籠城する用意はしない覺悟である。唯今、金奉行、藏奉行どもを召寄せ米金銀すべて分配させた。今度は、大ばくちを打つて、お目にかけよう』

◇

堀は當時、僅かに二十九歳であつた。慧敏の堀は首肯いた。

『世間の情勢からいつて、博奕はなり目になつて來ました、風も順風です、帆をおあげになつてよろしい』

秀吉の歌の代作などをする友古法橋も、合槌をうつた。

『物にたとふれば、今は櫻の花ざかりです、御花見のよい時期です』

小寺官兵衛孝高は、クセモノである。

『殿は御愁歎のようには見えるが、御心底を推量仕るに、お目出度いことである。バクチも遊ばされ、吉野の花見もなされるがよい。櫻の花は、寒の内には見たいと思つても、時節が參らね

ば見られぬ花である。友古の申す通り、今は花見時でござります』

秀吉は、たゞ、にこりと笑つた。いかにも吾意を得たりといふ氣もちである。

雑談を終ると、秀吉は席を立つて、室へ走りこんだ。そこには母が待つてゐた。彼はおふくろの前に轉げこむようにして、あいさつした。母と子と、むつまじい會見である。それが孝心ふかい英雄の人間的な美しい一面である。

◇

八日の日が暮れて、夜になつた、午後十時、鐘が鳴つた。

第一の貝が、天守閣から、吹き鳴らされた、人々は、食事を調べはじめた。

午前一時、第二の貝が鳴つた、軍兵は結束して出發した。

第三貝は、城外の欄干橋の上に高々と吹き鳴らされた。

初夏新緑の夜、月光は、ほのぼのと、繪絹を透して輝やいた、印南野には、球燈星のごとく亂れ飛び、篝火は赤々と天を焦がした。

秀吉は、印南野に出でて床几によつて、全軍の到着を監視した、まさに九日午前二時であつた。



秀吉は祐筆に命じて、着到帳をつけさせた、將卒は忽ち雲のごとく集まつた、祐筆はそれをもも漏らさず記帳した、秀吉は一冊、一冊それを點檢し、署名し、捺印して、祐筆に返した。

『他日必ず、點檢することがあらう、よく注意して保管せよ』

全軍、肅々として、五隊に分れて、進發した、運命を賭する一大決戦を望むで進發した。

十一日朝、尼ヶ崎に着き十二日山崎に着いた、天下分ケ目の天王山の合戦は、明日に迫つた。

## 精進落ち

秀吉は九日の早昧、姫路を出發した、十一日の午前八時にはもう尼ヶ崎に到着した、茨木の中

川清秀、高槻の高山長房は、秀房は秀吉の軍に合した。

『諸卒、相揃はずといへども、九日、姫路を立ち、晝夜の堺ひなく、人馬の息を休めず、尼ヶ崎に至る』と、秀吉の祐筆大村由己は敘述してゐる。實に彼は電光石火のごとき迅さをもつて山崎附近に殺到したのである。

尼ヶ崎に着いた秀吉は、あたりに禪寺でもないかと尋ねた、幸ひ附近に小庵があつた、彼はつかつかと小庵に入つて、わらじのまゝ小庵に腰をかけて、しばしの休養をとつた、養子織田信勝監軍堀久太郎は、やはり彼の左右にあつた、秀吉曰く、

「上様、御切腹の注進を聞いて以來、わしは精進潔齊してゐる、しかし、はや敵前近くになつて、合戦も近い、わしは年寄のことゆゑ、腹中の力もおちたやうに覺える、だから精進を斷つつもりだ、御奉行のためには、力をつけて、鎧もとり、太刀打をする覺悟である、信勝、久太郎等は、いづれも若いから、精進をつゞけられたい』  
さう、いつて、臺所衆に命じて魚鳥を料理させ、寺僧をよんで行水をし、頭を切つた。



◇ 主君の弔合戦であるとの強い、激しい意識の下に、秀吉は剃髪したのである、しかし精力をつけるためには、あへて精進を捨て、魚鳥を攝つたのである。しかし信勝、久太郎には、精進をつゞけしめ、僅かに前髪を切らしめた。彼の信長に對する愛惜の眞情は、實にかくのごとく濃やかである。

秀吉はまづ、盃を信勝に與へた、明智は親の敵で、また主の敵である、卿はまづ討死せよ、それを見届けてから、わしも討死する。

悲壯な決心である、この決心なくしては、山崎合戦の勝利は得られなかつたのである。

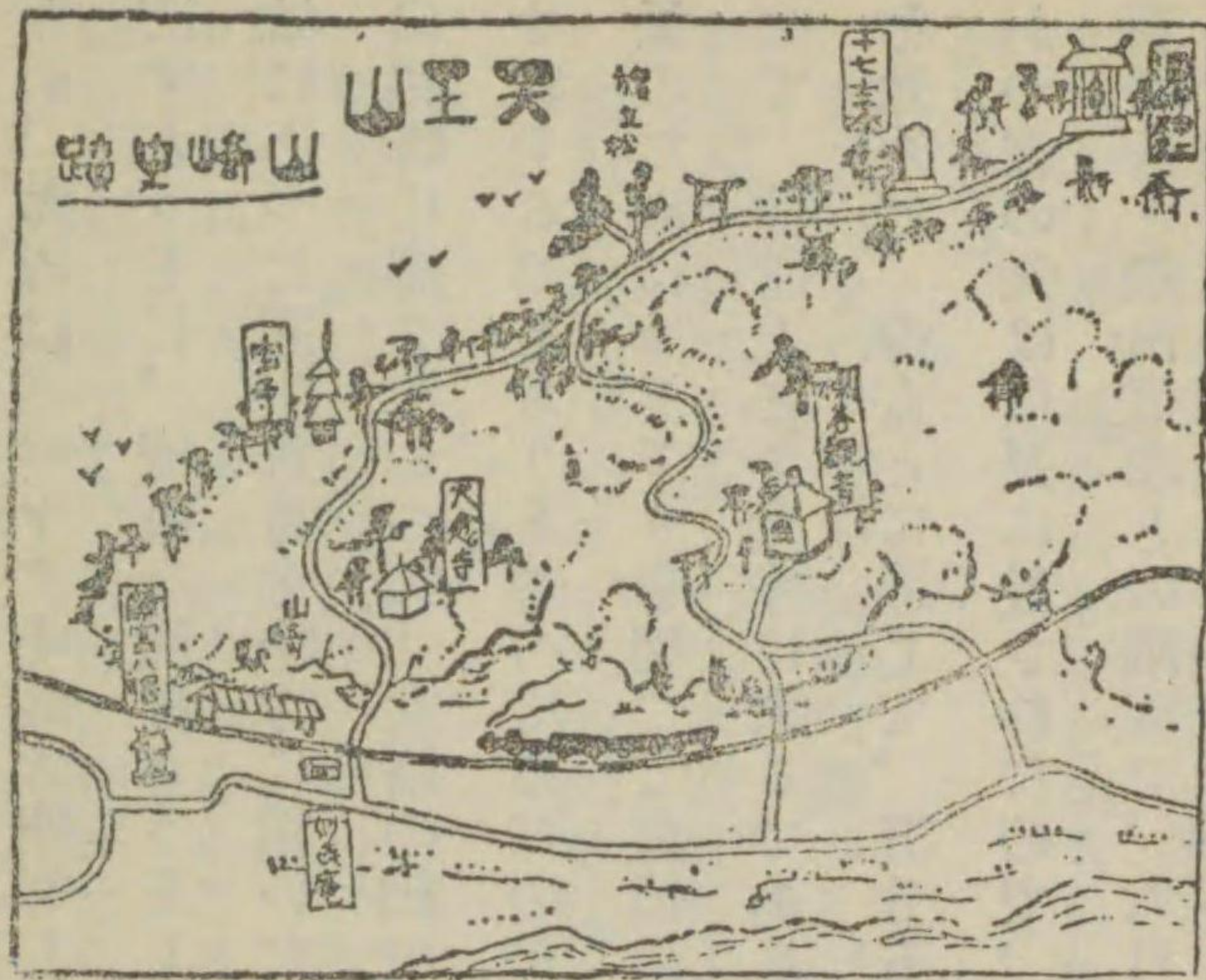
◇ 明智光秀は、信長父子を弑して天下を掌握した、しかし、いかに戰國亂世の時代とはいへ、彼の行動は天人ともに許さざるところであつた、彼はそのために衷心、深い悔恨に責められた、密使を毛利に送つて、秀吉を挾撃せんとの計畫を立てたが、その密使は秀吉のために捕へられた許

りか、秀吉はスバヤク毛利と媾和して軍を返した、徳川家康を京、堺の間に引きつけて信長を滅ぼすと、もに、家康を滅ぼさうとしたが、家康はいのちからく間道を三河に遁げ歸つた、安土城にあつた蒲生賢秀を味方に招いたが、彼は信長、秀忠の妻心一族を率ゐて、日野城に退いて彼の招降に應じなかつた。女婿の細川忠興こそは、光秀の姻戚關係であるから、必ず彼の幕下に馳せ參するであらうと考へてゐたのが、忠興はその妻女を離別して、遠く山間にこれを遠ざけ、信長のためにモトドリを切つて哀悼の意を表した、筒井順慶は光秀によつて大和の所領を完うしたので、情誼上必ず光秀に來るであらうとアテにしてゐたが、筒井軍は洞ヶ峠に大軍を留めて、欺を光秀と、秀吉とに通じて、五分五分に旗色を見てゐた。大阪にあつた織田信澄は光秀の女婿でかつ彼の父は信長に殺されたので、信長には深怨をいだいてゐたが、本能寺の凶變が起るや、丹羽長秀と織田信孝との兩軍で、六月五日信澄を殺してしまつた、かくして光秀の左右、肱股は、寂寞として、秋風うたゝ落寞の觀があつた。

光秀は、自責の念にかられて、洛中の寺社に、金銀を寄進し、本能寺の變に討死した人々には敵味方上下によらず、法名を授け、過去帳に認めて、よく弔ふべしとて砂金を寄附した、朝廷にも獻金した、洛中の地子も免除した、信長が十數年間苦心して貯へておいた安土城の財寶を、悉く京洛中の寺院、神社にバラまいて、罪滅ぼしをやつた。彼は彼の行動について自信がなく、かつ氣が小さかつた。

### 山崎の會戰

山崎驛外に聳ゆる低い松林の山は、天王山である停車場を出てすぐ背面に聳ゆる天王山へは、胸究の急勾配をもつた山路が通じてゐる、山腹に寶寺がある、秀



山崎合戰略圖

吉が本陣を進めて山崎合戰を指揮したところで、戦後、大阪城に移るまでは城を築いて京畿を扼する足だまりとしたところである。

寶寺の背面、さらに急峻な山路を登ると、ひろくと展望の打ち開けは箇所があり、老松の下に石ぶみが立つてゐる、『豊太閤旗立ての松』といふのである、さらに山嶺には明治維新の際、眞木和泉等十七烈士の屠腹したアトがあり酒解神社がある、近來、この山を極めるものは、山頂から楊谷觀音への山路を、ハイキング・コースとして選ぶ。



秀吉は、ナゼ戰場を山崎に選んだか、光秀はナゼ京都を出で、山崎で戦つたか、これは皇上の坐ます京都を、軍馬の巷に委ねないといふ遠慮からであつた、王城の地を兵馬争亂の渦中にまきこむことは、敵味方のいづれにとつても、もつとも遠慮すべきことであつた、京洛はまた市民の歡樂境であつた。その歡樂境の中心に兵馬を容れるものは、まづ市民の信任を失ふ、京都の動搖は、全日本の動搖であるからである。光秀はすでにその大軍をもつて本能寺を焼き、二條城を焼

いた、人心は極度に不安におびえてゐる、その人心を鎮定するためには、信長の全財産を掠奪して京洛の神社、佛閣に寄進した、それでもなほ足りなかつた、光秀は出で、山崎で戦はねばならなかつたのである、秀吉は山崎で決戦を演じなければならなかつたのである。

◆  
紀貫之の『土佐日記』に

十一日、雨いさゝか、ふりてやみぬ、かくてさしとるに、東の方に山のよこおれるを見る、人にとへば八幡の宮といふ、これを聞きて、よろこびて人々おがみたてまつる、山崎の橋見ゆ、うれしきこと限りなし、こゝに相應寺のほとりに、しばし舟をとめて、とかく定むることあり、この寺の岸のほとりに、柳多くあり、ある人、この柳の川の底にうつれるを見てよめる歌、

さゝれ波、よするあやをば、青柳の、かげの原しておるかとぞ見る

十三日、山崎にとまれり

十四日、雨ふる

◆  
王朝時代の山崎の風光を偲ぶに足る、紀貫之は、舟をもつて淀川をこゝまで漕上つて來たのである。木津川、淀川、桂川の三川がこゝに合流して、石清水八幡の山麓を流れる、その附近に淀があり、八幡があり、橋本があり、堤の此方に天王山下を、帯のごとく細く迫れる山崎街道が東西に通じてゐる。實に中國、西國へ通ずる咽喉の要衝である、京洛の覇を争ふものはまさに山崎においてせざるべからざる所以である。

◆  
山崎合戦は六月十三日午後四時頃開始された、世間の俗説では、十三日の拂曉、早爽、天王山の争奪戦をもつて開始されたようになってゐるが、事實は然らず、兩軍は早朝より、その先頭をもつて接觸し、午後に至るも満を持して放たず、この間に織田信孝は四千人を率ゐて大阪から來り會し、秀吉はこれを淀川に迎へ、相携へて午後四時、山崎に到着した、よつて秀吉は、漸く諸隊に向つて進撃の號令を下した。

秀吉方は總軍二萬六千五百人、光秀方は合計一萬六千人。

◇  
秀吉は、いつの場合にも、衆をもつて寡に勝つの戦法を執つた、彼は『衆寡敵せず』の眞理をもつともよく認識してゐた。山崎合戦においても、彼は信孝の軍勢四千人を、彼の麾下に、しつかりと握るまでは動かかなかつたのである。

### ○ 戦勝の秘訣

山崎合戦の戦記は、こゝに詳しく記述するを目的としない、しかしこの合戦は、兩軍死力を盡して戦つた。秀吉も決してラク／＼と戦つたのではない、中央の山崎街道を前進したのは高山長房、中川清秀の第一、第二隊の四千人であつた。池田信輝は四千人をもつて淀川右岸の細路より進撃した、羽柴秀長は天王山附近より前進した。高山も中川も苦戦した、秀吉は加藤光泰の一隊

を右翼の池田、堀秀政を中央なる高山、中川に加へて猛烈に突撃した。彼自からは豫備隊一萬人を提げて、前進する味方の鎗の石突の働かぬまでに、犇々と後方から詰めよせた、千生瓢箪の馬印は、味方の將卒の背後からひた／＼とつゞくやうに押し詰めた、一寸一分のスキなき程に取り詰めた、光秀は全軍、もとより死もの狂ひである、秀吉方は死骸をのり超え、のり超えて、眞向に前進した。

天王山方面の光秀軍まづ破れた。動搖は全軍におよんだ、午後七時ごろ、光秀は山崎の東方勝龍寺城に遁れ入つた。洞ヶ峠の筒井順慶軍は、峠を下りて明智軍に突貫した、明智の全軍はたそがれごろになつて全く潰滅し去つた。

◇  
しかしこの會戦は、すこぶる激戦であつた、明智軍の死者三千人、秀吉軍の死者三千三百餘人その死傷の數よりいへば秀吉方は、ずっと明智方より多かつた。秀吉がいかにかこの一戦に死力を盡したかがわかるであらう。秀吉は二萬六千五百人といふ大兵を集中して、壓倒的に明智方を押

し倒したのである。彼は後年、島津征伐においては三十萬の大軍を動員した、小田原征伐には二十四萬の大兵を動員した、家康との小牧山の合戦においても、雄大なる兵力を動かした、柴田勝家を賤ヶ岳に破つたときも、彼は大軍をもつとも迅速に集中して敵軍を撃破した、秀吉が戦勝の秘訣は、たゞ敵軍よりも優勢なる兵力を、もつとも有効に、機敏に集結して、敵軍を一舉に殲滅するの作戦をとることにあつた。

◇

光秀の敗戦は、彼が作戦を過つたところに出發する。彼は安土に明智秀満をとめて二千の精銳を割いた、その他佐和山、長濱、龜岡、阪本など、各地の守備にその兵力を分割した、これが彼の失敗であつた、光秀は近江、丹波の二國五十四萬石を領有する大大名であつた、當時の兵制は、五十石に一名の兵員を動員するの規定であつたから、五十四萬石では一萬八百人の手兵を動員し得たはずである、これは彼の直接麾下に動員しうる兵力であつた。それを中心として、麾下に參集する友軍、招降軍を合せて戦陣の布置を講ずるのであるが、彼の麾下の精銳を、かくのご

とく各地に分散せしめたことが、山崎合戦の敗北を招いた主因であるであらう。

◇

小瀬甫庵は、この戦蹟を評して、

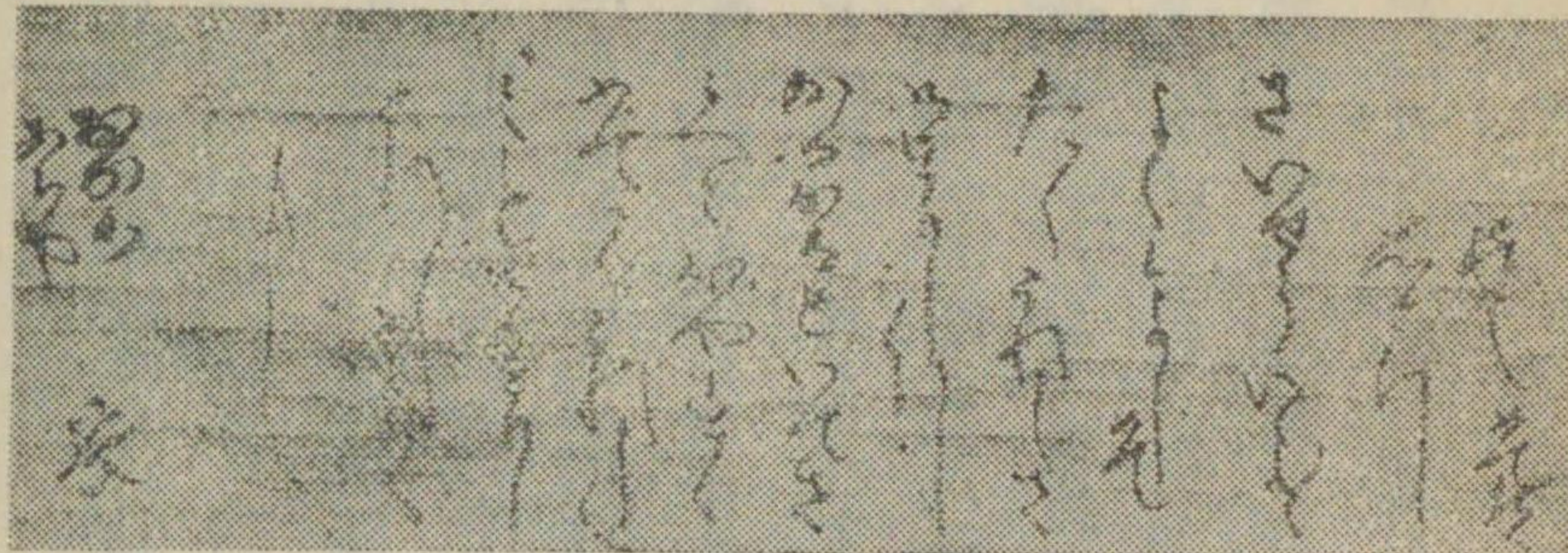
『齋藤内藏助が諫にまかせ、今日の合戦をやめ、阪本に入りて籠城し侍らば、事のほかむづかしくなるべし、また、明智左馬助二千餘騎を進退せし大將なるを、安土山に残し置くこと、至愚の長ぜるなり、日頃、たくはへおきし勢を、一手になし、心を一致に定め、苦戦せば、かほどに脆くは負くまじきな、勢を方々へ分つかはせし事、以ての外の淺知なり、光秀このごろ思ふところの圖よろづ違ひしことも多かりしは、天理に背きし故なるべし』

と喝破してゐる『至愚の長ぜるなり』といひ『以ての外の淺知なり』といひ『天理に背きし故なるべし』といふ、まことに至言といふのほかはない。

## ○戦争と外交

山崎の合戦を終つて、秀吉の地位は、飛躍的に昇進した、織田信長幕下の群雄を抜いて、斬然頭角をあらはしてきた、モウ天下の覇業は、彼の處理するまゝに、自由にならうとしてゐる。

徳川家康は、本能寺凶變の際、上方見物のため堺にあつた、二日その凶變を聞いて、とかく、とばつちりの自分の頭上に降りかゝることを覺悟し、京都知恩院に入つて自殺しやうとさへした、本多忠勝が極力諫止して、いのちからがら三河へにげ歸つた、身邊に手兵をもつてゐない家康の運命は、實に身を守るにすら不足してゐたのである。しかし家康は蒼皇として遁げ歸つただけで満足するもので



徳川家康自筆書狀

はなかつた。直ちに大兵を提げて光秀討伐のために進發し、十四日には熱田までやつて來たが、十九日、秀吉よりの使者が來て、光秀の誅に伏したのを聞き、岡崎へ引返した。

もし、秀吉が毛利軍に引かゝつてゐて、彼が急に軍をかへして、光秀を討伐することができなければ、家康が光秀を討つて、天下は信長から直ちに家康の手に落ちたであらう。そして秀吉はつひに歴史の暗に葬られてしまつたかも知れない。

所詮、アノ時代において信長の遺業をつぐものは秀吉か、家康かであつた、家康が一步おくれのため、天下は秀吉の手に落ちた、歴史の不思議なる運命である、歴史の偶然である。

光秀の事變を起した當時、光秀がどれだけの兵威を京畿にもつてゐたかは、容易に外間からは想像されなかつた。事後の研究によつて、彼の勢力が存外微弱であつたことが知れるけれども、事變直後の光秀軍の打算は、秀吉にも、家康にも的確につかめてゐたとは思はれない、だから家

康は十四日には、すでに熱田まで進發しながら、京都の情勢が不安でうかつに進軍できないで、數日を熱田に過ごした、その間に秀吉は、モハヤ光秀を誅つてしまつたのである。

◇  
秀吉は、この點家康にくらべて勇氣があり、果斷であつた、もし家康に秀吉ほどの勇氣と、果斷があつたならば、七日岡崎へ歸つて直ちに大軍を召集して京都へ引返し、十一、二日ごろは江州に進軍し、安土城附近で光秀と決戦することができたであらう、しかし光秀は長濱にも、佐和山にも部下の將士を配置し、勿論、安土城にも、一方の武將をして守備に任せしめてゐたのであるから、家康といへども、秀吉のやうにテギワよく光秀を討つことはできなかつたであらう。

◇  
秀吉は、光秀軍の情勢如何にかかはらず、死生を賭して、かの決戦を敢行した。もし一敗地に塗みれたならば、母をも妻をも殺して姫路城をも焼きすつべきことを留守隊長に命じて置いた、家康にはソコまでの決心がなく、勇氣がなく、またそれまでにして信長のために盡すべき義務を

も感じてゐなかつた。

しかし、秀吉の場合はさうでなかつた、彼は、主君信長の復讐のためには、すべてを放擲し、難易を超越して、これを決行すべき義務があつた。彼は生命を賭して山崎へ來た、そしてミゴトに敵を粉碎した。

◇  
かうして死生をかけての合戦においても、秀吉は彼が得意の外交的調略を縦横に發揮すること忘れなかつた。島左近を懐柔して、筒井順慶軍を中立せしめ、山崎合戦の最終には、つひに洞ヶ峠を下つて秀吉軍に合せしめたのはその一例である。山崎の城主松田太良左衛門を明智方からひそかに引抜かうと策動したごときもその一例である、秀吉にあつては、戦争と外交とは同一であつた。

## 勝家秀吉の對峙

柴田勝家は、信長幕下の宿將として、その主座に位するの人物であつた。信長の死んだ時、勝家は五十三歳、秀吉は四十七歳、家康は四十一歳であつた、そして光秀は、もつとも長老の五十歳であつた。すなはち勝家は年輩において、地位において、家柄および閱歴において、織田家の首席たるに十分であつた。

しかし勝家と秀吉とは、性格的に合はなかつた、二人は早晚衝突すべき運命にあつた、勝家は信長の三男信孝と結んで、秀吉を押へやうとした、秀吉は信忠の遺児三法師を儲君に押し、それに成功した、清洲會議の結果はそれであつた。

◇  
秀吉はやがて勝家と雌雄を決すべき時機を待つた、しかし彼は進んで勝家に、さう仕向けてい

つたのではなく、勝家の方から、秀吉を除かうとすることに夢中になつたのである。この意味で秀吉はいつでも運命の従順者である、みづから運命を開拓しやうとして焦慮したアトが少しもない、かへつて運命が秀吉の前に進んでその手を差しのべたのである。

◇  
山崎合戦後、信長幕下の諸將は自然に秀吉に歸伏した。天下を定むるの大業は、秀吉ごとき器量人を措いてほかにはないとの見きはめが、自然に秀吉の信望を高め、威勢を高めた、勝家は心中ますます面白くない、勝家は信孝と結び伊勢長島の瀧川一益と通じて、秀吉を壓迫した、清洲會議では、辭を設けて、秀吉を切腹させやうとすら謀つた、秀吉は唯々として自分の江州長濱をも勝家に譲つた。ただ、切腹だけは嫌々をして逃げ歸つた。

◇  
勝家は北國に歸つた、雪に埋もれた北陸の北ノ庄（今の福井）は彼の本據であつた。前田利家は府中（今の武生）にゐた、領土の関係から利家は勝家の幕下に直屬してゐたが、秀吉とは爾汝



の關係にあつた、秀吉夫婦の結婚を媒酌したのは利家であつた、利家と秀吉とは昔は長屋の軒を並べて、隣同士で親密に往復した。秀吉の成功を押し上げ、それを背後から幫助した友人は實に前田利家と、丹羽長秀との二人であつた、秀吉はこの二人を、例の秀吉一流の人たらしの手管をもつてうまくたらしこんだ。

◇

半歳は、小康のうちにして、天正十年十二月になつた、秀吉は勝家が北陸の雪にとちこめられて出動不可能なるに乗じて、江州長濱に柴田勝豊を攻めて之を降し、十八日美濃に入り、二十一日大垣に入り、信孝の岐阜に迫つた。信孝は驚いて秀吉に降つた、秀吉はこれを許して、三法師およびその人質を安土に移して、二十九日寶寺に凱旋した。秀雄は清洲から安土に移つて三法師の後見を勤めた。

◇

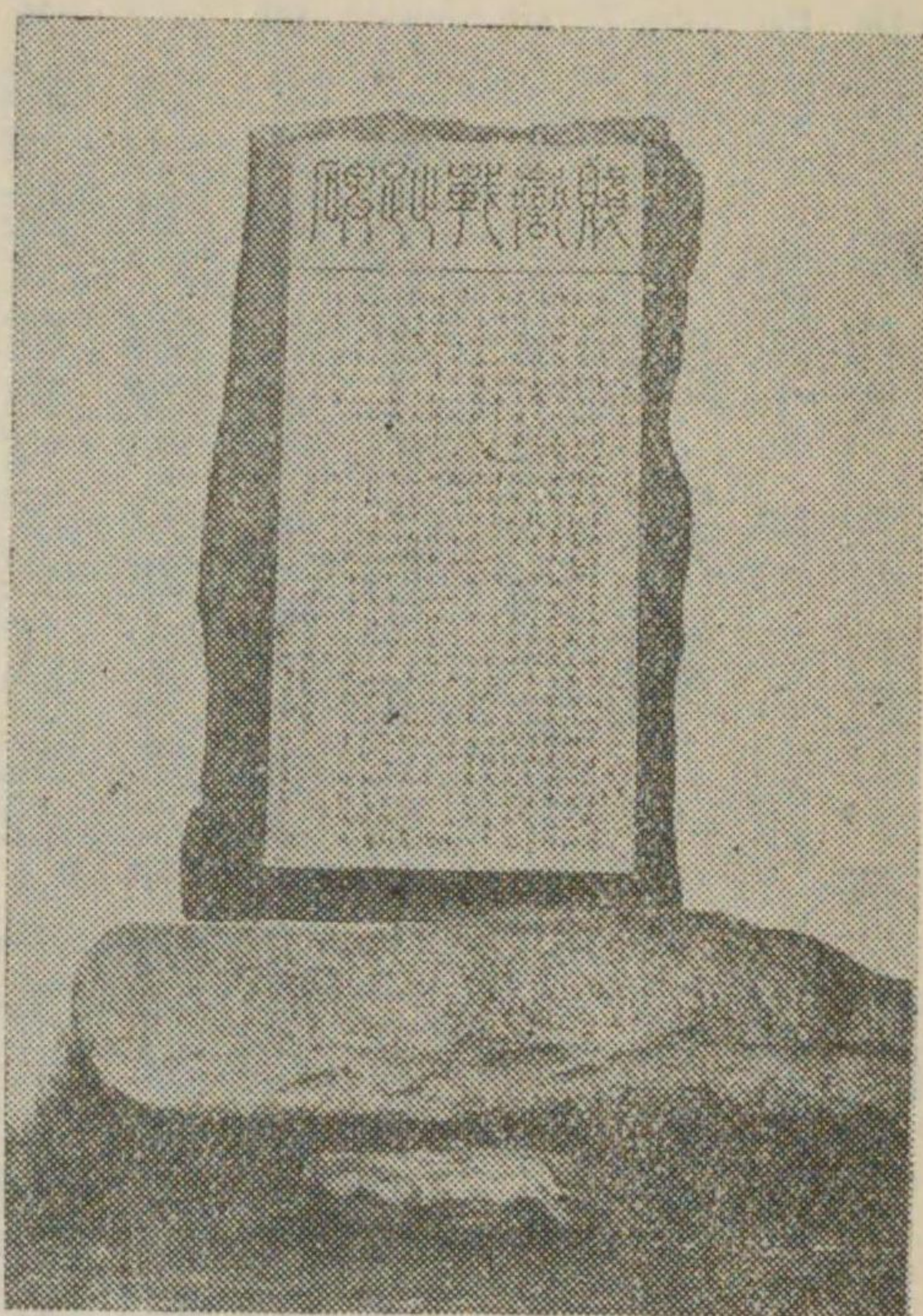
あくれば天正十一年二月、總軍七萬五千を率ゐて、三道から伊勢の瀧川一益をうつた。三月三

日龜山城は開城し、國府城は降り、秀吉は關、峰兩城に攻撃を集中した。これは北國の勝家をおびきだすための手段であつた、果して勝家は積雪の融くるを待つてゐることはできなかつた。役夫をして沿道の雪を拂はしめて、熊の穴をいづるがごとく江州へ進發した。三月二日先發隊は福井を發足して、五日には江州柳ヶ瀬附近に入り、七日天神山の砦に迫らしめた。そして三月四日首將勝家は前田利家以下二萬餘人を率ゐて福井を發し、九日近江に入つた。

秀吉は、勝家が全軍を率ゐて出動してくるのを、ひそかに期待した。三月十七日、秀吉は兵を伊勢より回して柳ヶ瀬方面に進め、銃を放つて戦ひを勝家に挑んだが、勝家は自重して應じなかつた、兩軍はかくして賤ヶ岳に對峙して、彼我容易に動かさず、持久戦に入つた。

## 勝家動く

播州三木の住人、大村由巳は、秀吉の祐筆である。彼は、賤ヶ岳合戦を終つた直後、その記憶の



賤ヶ岳戦跡碑

なほ生々しい天正十一年十一月、筆を執つて『柴田退治記』の一卷を書いてゐる蓋し筆まめの男である。この書によつて賤ヶ岳合戦の大要およびその前後のいきさつは略明瞭である、但しもとより秀吉方の記録であつて、多少の割引きを要す死人に口なし、勝家には自己を辯護すべき何等の記録を留めてゐない。

柴田退治記によれば、天正十年の冬から、十一年の春へかけては例年に超ゆる雪であつたらしい。

『頃日の雪は、例年に超過せり、寒威よく綿を透し、風力、まさに酒を氷らさんとす、往く者

は整臥し、來るものは凍殺し、かつて人馬の通ふを絶つ』

と、いつてゐる。米原以北、福井へかけての江越國境の雪の甚だしき模様を傳へてゐるのである勝家はこの積雪にこめられて脾肉の嘆に堪へなかつた、その間に秀吉は、岐阜を攻め、伊勢に侵入した、秀吉の岐阜を攻める時は、江濃國境は風雪が深く、激しかった。『柴田退治記』には、

『大風を凌ぎ、深雪をわけて、岐阜に至る』と敘してゐる。

雪の春が明けて、天正十一年が來た、柴田勝家は、雪をかきわけて柳ヶ瀬へ來た、秀吉は伊勢に瀧川一益を攻略しつゝあつたが、三月十七日、軍を回して同じく柳ヶ瀬に來た。しかし兩軍は各々満を持して容易に動かなかつた、『豊鑑』によれば、

『こゝは山深うして道細く谷に續きぬれば、敵も味方も、たやすく、かけ合ひすべき様にもあらず、陣を堅くして互に日を過ごしけり』

と、敘してゐる、すなはち、持久戦に入つたのである。

秀吉は、前年の十月から、柳ヶ瀬附近において、勝家の北國勢を扼せんがために、ひそかに山河の險要を視察し大小の城塞を築いてあらかじめ、夫々備ふるところがあつた。

秀吉は、北國街道の隘路を扼して、こゝに決戦の戦略を立てたのであるが、この一戦を有利に展開するためには、細川忠興をその封地丹後に馳せ歸らしめ、國中の船を集めて海上から越前へ作戦せしめた。勝家の本據越前の海岸を攪亂せんがためである。さらに友人丹羽長秀をして琵琶湖上の海津口に、一萬人を配置して湖上から賤ヶ岳を掩護せしめるの作戦を立てた。實に秀吉の作戦は、緩急自在に、勝家を誘ふて、しらすく鼠をますおとしにかけるやうに仕向けた。すなはち、賤ヶ岳の合戦においては、秀吉はモハヤ、山崎合戦におけるやう乾坤一擲のいのちがけの戦争をする必要を感じなかつた。勝家は決して光秀よりも弱い敵ではなかつたが、秀吉の地位がこの半歳間に、すつと向上して、大勢上はるかに勝家の上にあつたからである。



戦ひの持久戦に入ると見るや、秀吉は地勢を按じて、城砦を構築して、北國勢を扼止せしめて三月二十七日長濱へ引きあげた。それより二十日間、靜かに形勢の推移を注意しつゝあつたが、容易に現状に變化はなかつた。そこで四月十七日、二萬の兵を率ゐて、織田信孝を攻むべく美濃に入つた。信孝は一旦、秀吉に降つたが、柴田勝家の出て来るを見て、岐阜にあつて瀧川と策應し兵をあげて所在に火を放ち、秀吉の側面を脅かした、秀吉はこれをうたんがために兵を美濃に入れたのである。

### 山路將監の内通

賤ヶ岳は、餘呉湖の西にあり、餘呉湖または伊香湖ともよべりと見え、源賴朝のうたに

あひみてし後は、いかこのうみよりも、ふかしや人を思ふこゝろは

と、歌つてゐる。源賴綱は、金葉集に、餘呉湖とゝもに已高山の雪を詠じてゐる。

衣手に、餘吳の浦風さへく、て己高山は雪ふりにけり

己高山は、一名小高見山につくる、湖畔、古橋村にあり、大湖の展望をほしいまゝにするが、爲尹百首の中に、

こたかみや山の嵐を追手にて、志賀の湊へいづるうな人と、けだし、實景である。



賤ヶ岳の合戦は、餘吳湖を中心にして、その周囲の重疊たる山峽の隘路において行はれた。餘吳湖は南北十八丁、東西十一丁、湖心深きところ三十五尋と稱す、湖水に鮒あり、源五郎鮒と稱す、喉の穴甚だ細く、わづかに縷を通すのみで、水より外に、ものを食べずといふが、こは『近江輿地志略』にいふところで、必ずしも近世的な、科學的な説明ではない。

餘吳湖の水、東南に流れて餘吳川となり、柳ヶ瀬川と合して、大岩山などの麓を流れ、南流して琵琶湖に入る。

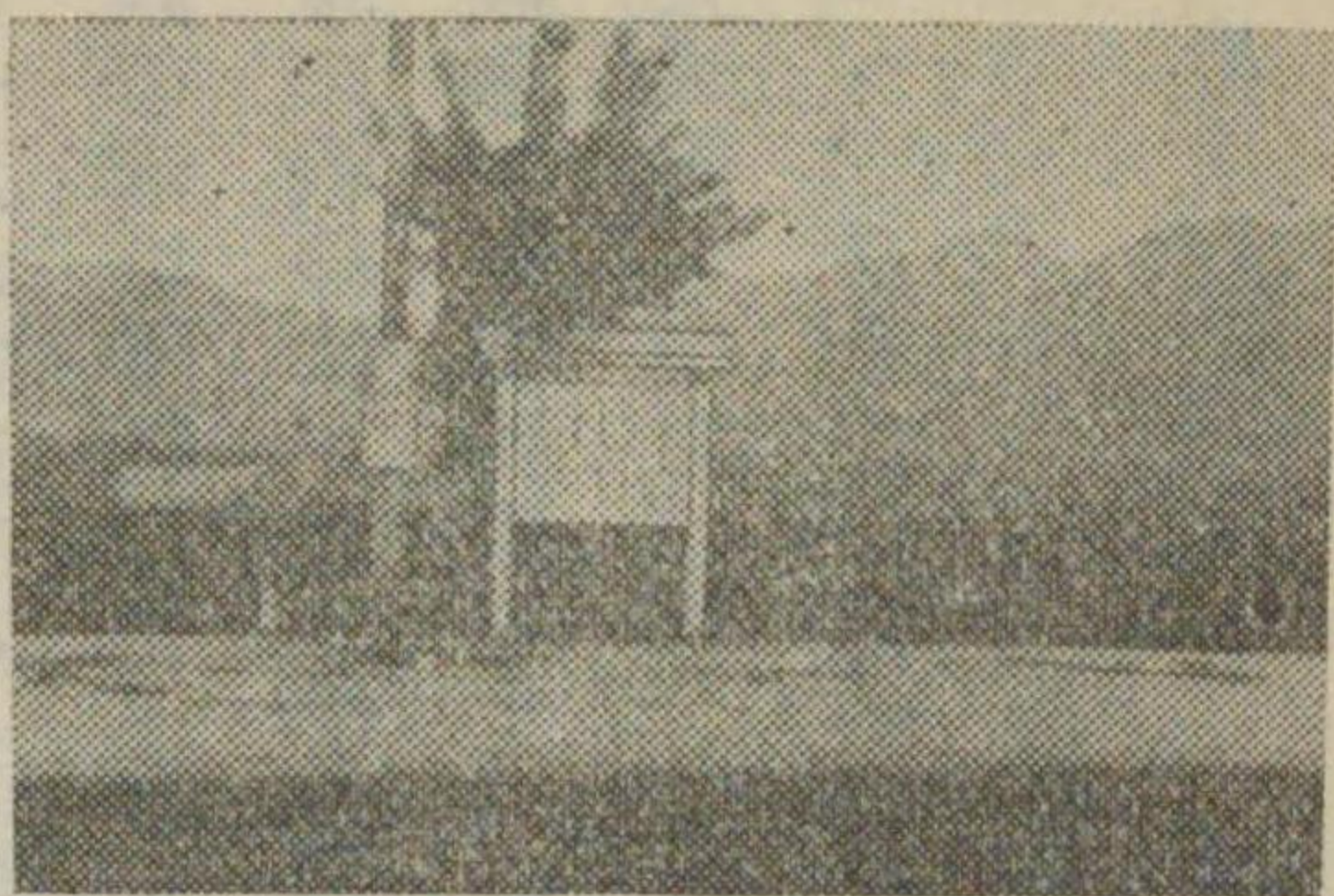


大體において、勝家軍は餘吳湖の北方に陣し、秀吉軍は、餘吳湖の南方に陣した。周圍一里餘の湖を隔て、相對した、たゞ秀吉軍の第一線堀久太郎の五千人は、餘吳湖の東北、北國街道の東にあたる東野山まで進出し、小川祐忠千人をもつて、中之郷の北にあり、山路正國、木下半右衛門五百人は堂木山に、木村重茲、大金藤八郎五百人は神明山に屯し、東野山から堂木山に至るまで、壕をうがち堤を築き、柵を構へて北國勢を一步も近づけしめない要心をした。

秀吉軍の第一線は、北國街道を南北の一線において嚴重に扼した、これとその底邊において直角に、餘吳湖の南方において、東西線を引いて第二線を固めた。この第二線の先頭が中川清秀の大岩山であり、その南方岩崎山に高山右近の壘があつた。大岩山と岩崎山との西南よりに賤ヶ岳があり、桑山重晴の一千人が立て籠つた、いはゞ餘吳湖の南方、賤ヶ岳の第二線は秀吉軍にとりてはあまり重要視されないうで、手薄の防備であつた。勝家方の佐久間玄蕃は、この手薄の防備につけこんで、餘吳湖を大迂回して、突如、第二線に切りこんで來たのである。

之は、堂木山に陣せる山路將監正國が主人柴田勝豊が病を京都に養ひつゝ、間もなく死んでしまつた後をうけて、秀吉方のために城砦を守つてゐたのであるが、勝家方から越前の丸岡四萬石同大野郡にて合計十二萬石の好餌をもつて誘惑されたので、大に心を動かし、勝家方に内通し、つひに走つて柴田軍に投じた。そして秀吉軍の布陣の状態を、すつかり敵に洩らしたゝめである。秀吉が四月十七日、軍を率ゐて美濃地に侵入したことも、山路の報告によつて分つた、中川清秀の大岩山、高山右近の岩崎山の、守備の不完全なことも分つた。佐久間玄蕃盛政は、血氣にはやる若武者で、當時僅かに三十歳の青年である。彼は、強ひて勝家に乞ふて、一舉にして敵軍を殲滅せんとするの策を立てた、機會は逸すべからず、盛政は逸りにはやつた、未だ戦はざるに意氣すでに敵を呑むの慨があつた。

勝家は、溢々、佐久間盛政の主張を容れた、しかし、大岩山の中川の堡壘を攻陥したならば、



木本驛ヨリ賤ヶ嶽ヲ望ム

直ちに軍を回して歸陣すべきを命じた。盛政は、そんな忠告には耳を傾けるのヒマがなかつた、たゞ勇みに勇んだ、四月十五日の深夜、進軍の準備全く終り、二十日午前一時、宿營を發した、山路將監はその道案内役を勤めた。

## 血まつり

柴田勝家にとつては、大岩山襲撃は、實に奇道中の奇であり、一步、過てば、全軍、ふくろ叩きになるの危険があつた。いかなる場合にも敵の陣營深く突入することは、敵に退路を遮断されることであり、好んで敵の包圍攻撃をうけることであつた。それは勝家には十分分つてゐた、しかし佐久間盛政は、目前の成功のみがちらついて、前後の分別がつかなくなつた。彼はたゞ進むことを知つて、退くことを知らざる猪武者であつた。

佐久間玄蕃の攻撃隊は、集福寺坂から、鹽津谷に出た、足海嶺を越えて、餘吳湖畔に出た、餘吳湖の西岸に、やがてその南岸に沿ふて、ぐるりと大迂回しつゝ前進した。柴田勝家は、佐久間の前進を見送つて、北國街道を狐塚まで南下した、秀吉軍の第一線東野山の堀久太郎の堡壘を牽制せんがためである。柴田勝政は三千人を率ゐて、佐久間盛政に續いた。そして餘吳湖の西南、飯の浦坂附近に留まつて、佐久間隊を掩護するとともに、秀吉軍全陣營を監視した、即ち、柴田軍の戦線は、北は椿坂から、餘吳湖の西邊をめぐつて、南方賤ヶ岳に至るまで、五六里の長細い線をもつて展開した。總軍勢二萬二千人を、こんなに細長く展開せしめたことは、實に思ひ切つた大膽だつた。そしてまた思ひ切つた危険千萬な戦ひだつた、勝家は、終始、その危険を懸念しつゝ、ひそかに盛政の急速なる成功と、急速なる回陣とを期待した。

佐久間の攻撃隊は、不破勝光、徳山則秀の四千人を先鋒として、盛政自からは本隊四千人をも

つて一氣に突進した。すなはち攻撃軍は總勢八千人の大兵であつた、しかるに彼等の攻撃目標たる大岩山の中川清秀は一千人、岩崎山の高山右近は一千人、賤ヶ岳の桑山重晴は一千人にすぎない、これを佐久間の大軍をもつて各個撃破すれば、勝敗はもとより明々白々である、けだし佐久間盛政ならずとも、この場合、必勝の自信に燃え立つであらう。況んや弱冠にして勇名高き盛政においてをやである。

これを秀吉のプランから見れば、こは鼠をマスオトシにかけるための好餌にすぎない。中川清秀には氣の毒であるが、彼は鼠のマスオトシに仕掛けられた油揚げでありテン普拉であつた。高山も桑山も、同様、敵軍を誘ひ出すためのオトリであり、油揚げであり、テン普拉であつた、このテン普拉に引かゝつたのが驍勇ならびなき佐久間盛政だつた、しかしこれは戦争の結果を見て、さう結論し得るのであるが、秀吉が最初から、中川清秀をテン普拉として、犠牲にするようなソナ残忍な考へを毛頭抱いてゐたとは思はれぬ、だがいかなる戦争も犠牲を要求する、そして誰が、

その犠牲に供せられるかは、始めから分つてゐない、だから中川清秀は、突如、敵軍が脚下に現はれるまでは、ソナなことはユメにも知らず、安心し切つて、まだ乾き切らぬ城砦を守つてゐたのである。

◇

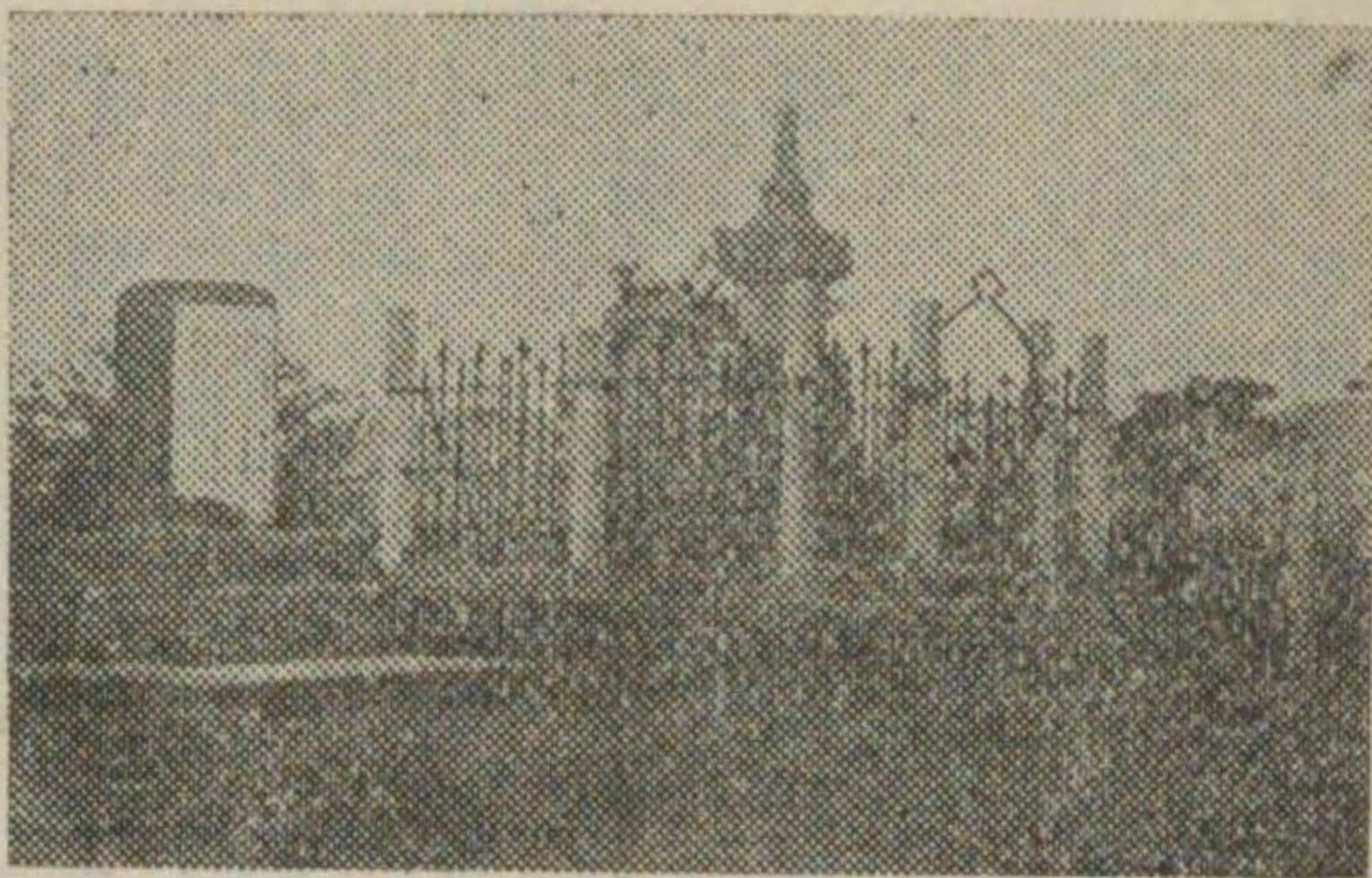
餘吾湖の南岸には、秀吉軍の雑兵二人が、馬を湖岸で洗つてゐた、馬もハダカである、人もハダカである、晩春四月の爽昧、湖は乳白の如く、まだ静かに眠つてゐる。

静かな湖上のさゝなみを動かして、氣もちよく人も馬も、水を浴びてゐる、フト氣がつくとあたりが騒がしい、人馬の音である、旗差物が湖邊に現れた。

スワ、敵だ。

一散に走せ歸らうとするのを、佐久間軍の先頭はかけよつて、切つて捨てた、戦陣の血まつりだ。

『幸先がよい』



大岩山ノ中川清秀ノ墓

モウ、大岩山の砦に、犇々とつめよせた。

## 清秀戦死

中川瀬兵衛清秀の奮戦と、その最期は實に勇猛で、花々しかつた。今も彼が戦死した大岩山には、墓石高サ一丈餘、家士の墓六尺、二基の墓石が、當時を語るがごとく立つてゐる。この墓記は、

中川清秀五世の孫、中川佐渡守久恒が、一百年の遠諱に際して建立したもので、天和二年四月二十日、木之本淨信寺住職雄山和尚の誌すところである。もちろん、中川家に傳ふる家記にもとづいて誌されたもので、清秀の面目を、まのあたり髣髴させるものがある。墓記は、漢文であるが、その主要點をカナマジリ文に書き直してみると、こんな風である。

◇ 高山右近は、側砦にありといへども、清秀と力を併せず、かつ一戦にもおよばずして敗走す、ゆるぎに敵軍は勢ひに乗じて競ひすゝみ、之を拉ふ、清秀、門を開いて出で、戦ふ、故に敵は退いて三町餘を奔る。敗軍七たび亡ぐるを追ひ、北ぐるを逐ふて搏殺するもの幾百人なるを知らず、清秀また三創を被むる、故に家臣は諫めて自裁せんといふ、清秀いはく、汝知らずや、今日の戦ひにおいて、たとひ首を僕卒に授くといへども、我、何ぞこれを辱とせんや、かつて聞く、一人たりといへども敵を滅ぼすをもつて勇士となすとし、敢て肯んぜず、家臣、引いてその袂をとらむ、清秀、奮つて復還らずして敵を追ふ、凡そ敵陣に突入すること九回、しかも衆寡不遇、そのつひに城に歸るに勝へざるを見て自殺す、享年四十二。

◇ 高山右近の岩崎山は、戦はずして陥落した。高山は砦をすて、餘吳川を東に渡つて羽柴秀長の陣する田上山へ入つたのである。賤ヶ岳にこもれる柴山からは、中川に對して、ヤハリ砦を捨

て、こちらへ來いとすゝめた。しかし中川は友軍の勸告を斥けて決然として、もつとも不完全な砦壘を死守したのである。

◇ 『眞書太閤記』は、諸家の太閤記を参考として種々の雜説をとりいれ、おもしろおかしく記述したもので、タイして信用はできないが、それでも大タイの筋は通つてゐる、この日、中川清秀の扮装をのべて、

『好むところの紺糸おどし、同じ毛の十王頭の兜をとつて猪首に着なし、大身の槍の刃廣なるを小侍にかつがせ、旗おしたて、馬ひかせ、その身は床几にかゝりて立ちたりけり』  
と、いつてゐる。いかにも武者ぶり凛々しい光景である。

◇ 中川清秀は奮戦した、佐久間盛政は正面よりこれを攻撃し、先鋒徳山則秀は、背面から中川の砦なる廠舎に火を放つた。兩軍相距る僅に一町であつたが、清秀はこれを撃退すること約三町に



およんだ。しかし廠舎に放つた火は、みる／＼猛煙天を焦した。かくて早曉から開始された合戦は、つひに午前九時頃におよんで中川軍の全滅となり、清秀は戦死し、十時ごろには全く大岩山は陥落した、附近の城壘からは、つひに援兵を出すものなく、孤立無援にして中川勢は全滅したのである。

◇  
すでに大岩山は陥り、岩崎山は開城した、佐久間盛政は直ちに賤ヶ岳の要塞に柴山を攻撃すべきであつたが、しかも彼は、この大將に心ゆるみて、悠々として敵陣を左右にして休息をとつた昨夜、山路をたどり来て、朝來、戦ひつかれたる佐久間軍は、もう、賤ヶ岳の要塞にかけ向ふ勇氣がなかつた、さりとて軍を引いて勝家の本陣に引きかへすこともしなかつた。廻れば五、六里すぐに行けば一里にも足らぬ行軍であつたが、彼は軍を回さずして、悠々として餘吳湖の南岸に休息した。これが盛政の失敗だつた。

### 秀吉引返へす

佐久間盛政が、敵壘ふかく突入しながらも、悠々として休息してゐるのには、多少の理由はあつた。それは盛政の猛烈果敢な攻撃に、秀吉軍の各城砦は、いづれも風を望んで動揺した。賤ヶ岳の桑山修理のごときも極度に盛政の來襲を恐れた。ひそかに欸を通すがごとく見せかけて、二十日の晝間をぐづ／＼と敵の鋭鋒を避けるに汲々とした。夜になつて柴山は賤ヶ岳の城砦をすて、木の本に向つて退却した、それと入れちがひにてうど丹羽長秀は賤ヶ岳に援兵を入れて、桑山をよび戻した、桑山はノコ／＼と歸つて來た。器量のわるい話であるが、彼はとうてい佐久間勢に抵抗する勇氣を持たなかつたのである。丹羽長秀が賤ヶ岳に入ると、もに、田上山の羽柴秀長からも藤堂高虎を送つて賤ヶ岳の城砦を守らしめた、士氣は漸く恢復した。

◇

翻つて、秀吉は大垣城にあつて、二十日は岐阜の信孝を攻めるの方略であつたが、とうど數日來の豪雨で、川どめを食つて前進することが出来なかつた。この出水による川どめのため、秀吉は大垣城にやむなく手を拱いて滞在してゐた。この滞在が、彼のためにはもつつけの仕合せになつた。

おそらく佐久間の大岩山攻撃の第一報は、二十日の午後二時すぎには、早くも大垣に報ぜられたであらう。秀吉は劍を抜いて立ち上がり、をどり上つて、二十回ばかりも太刀をふりく、打ち拜むで喜んだ。

『ヤア、來た、大勝利だ、大勝利だ』

待ち設けた機會が來たのだ、秀吉は直ちに屈竟の卒五十人を先發して、長濱に走らせた。その内の二十人は、沿道の村々に松明の準備を命じ、沿道の人民をかりあつめ彼等をして松明をふり照らして行軍を照し、迎へ、送り、勵ますべく命じた。



また、これらの先發隊は、沿道の各村に觸れて、各戸に一升づゝの飯を炊かせ、それを握り飯にして、行軍を犒ひ、かつ江州路に入つては、それらの糧食を木ノ本まで持參するよう命じた。

糧秣のためには谷戸に藁をきつて馬盥に入れ、鹽と水とをかき交せて、軍馬に提供せしめた、士卒のためには湯茶と飲料水の用意をとゝのへしめた。

『うんと、褒美を取らせるぞ、十倍にしてとらせるぞ。』

『早くせよ。』

かくて午後四時すぎには、二萬の全軍は勇躍して大垣を出發し、まつしぐらに江州を差して走り出した。秀吉はこれに先登した、駿足を利して、走れるだけ走り、駈けるだけ駈けさせた、實に疾風迅雷、耳を蔽ふにいとまなき敏速さをもつて江州にとつて返した。



大垣、垂井、關ヶ原を越えて江州である、柏原からは、伊吹の山麓をかけた、春照から北國街道に入つた。そして一路木ノ本へ、この間、大垣から木ノ本まで實に十三里。

秀吉は午後九時、ハヤ、木ノ本の本陣に到着してゐた。大垣より十三里の道程を、五時間にして踏破したのである、實におそるべき大強行軍であつた。

顧みれば北國街道は、點々として松明の光りが、無數に夜空の暗を焦して輝く、秀吉の大軍はその火光のトンネルを潜つて、息せき切つて進軍しつゝある。

### 盛政動かす

一方では、勝家は氣が氣でなかつた、佐久間玄蕃は、あゝいふ無法者である、大岩山の中川の砦さへ陥したら、すぐ引揚ぐべきであらう。あの儘にしては大變である、秀吉は猿のやうな男である、スバヤク引返して來たならば大變だ、是非すぐ引揚げるやうと、再三、再四の使者を出した。佐久間の老臣たちも、これに應じて、一緒になつて佐久間を説き、かつ諫めた、しかし、佐久間はあくまで自説をとつて動かない。

『勝家も、老ぼれたことをいはずに、明日は上洛する用意をされるがよい、賤ヶ岳の砦は、モウ開渡すであらう、その外にも内通するものがある、秀吉がたとへ駈つけて來ても、明日のことだらう、駈けつけて來ても、人馬は疲れてゐる、軍の用には立つまい』  
さういつて動かない。

勝家は驚いた、むしろ身を悶えて怒つた。

『玄蕃といふ奴は、この勝家に皺腹を切らせる男だ、圖方もない玄蕃だ、是非引取れ、さもなければ、勝家自身で迎ひに行かう』

ともいつた、しかし玄蕃は、つひに返事もせず打ちやつておいた、かくして日は暮れた。

玄蕃盛政は、成功の序に、賤ヶ岳の城砦を桑山から奪ひとりたかつた。そのために日の暮れるのを待つてゐたのである。日が暮れたならば、桑山は開城する筈になつてゐたらしい。要するに

秀吉方は秀吉が大垣からかけつけて来るまで、敵を引きつけて置く必要があつた、玄蕃はそのトリックにかゝつたとも思はれる。

日がくれると、秀吉方の陣營は何となく活氣づいて来た、そして秀吉は早くも木ノ本の本陣に到着した、急使は『秀吉歸る』との情報を味方の各城塞へ通じた、秀吉方の陣營は、意氣とみに揚つた。

◇

玄蕃盛政は、フト、氣がつくと敵陣が何となくあはたゞしい、木ノ本の街の方に當つて、人馬の煙りが立つてゐる、物見を走らせて見ると、北國街道には、火光が點々として、潮のごとく人馬が利頭する、秀吉が歸つて来たのだといふことが分る。盛政は驚いた、明日でなければと、今の今まで安心しきつてゐたのに、秀吉はモハヤ引き返して来たのである。

さらに、盛政は驚いた、在々村々から、山から、野から、各城塞にいたるまで厩圍一面に、いつのまにやら炬火の光りが晝をあざむくように、すさまじい光りで燃え揚つてゐるのだ。敵は何

萬か、何十萬か、夥しい炬火が、赤々と江北一帯の山野を火の海にしてしまつた。

さらに、盛政は驚いた。その炬火の海のひろがりとともに、遠く近く、周圍の城砦から鯨波の聲がどつと、怒濤のごとくに爆發した、山から谿へ、谿から山へ、野をこめ、里をこめて、餘韻は嬾々として、余呉湖の波の彼方へ、一しきり、また一しきり、よどみをうつて鯨波の聲が響く。

◇

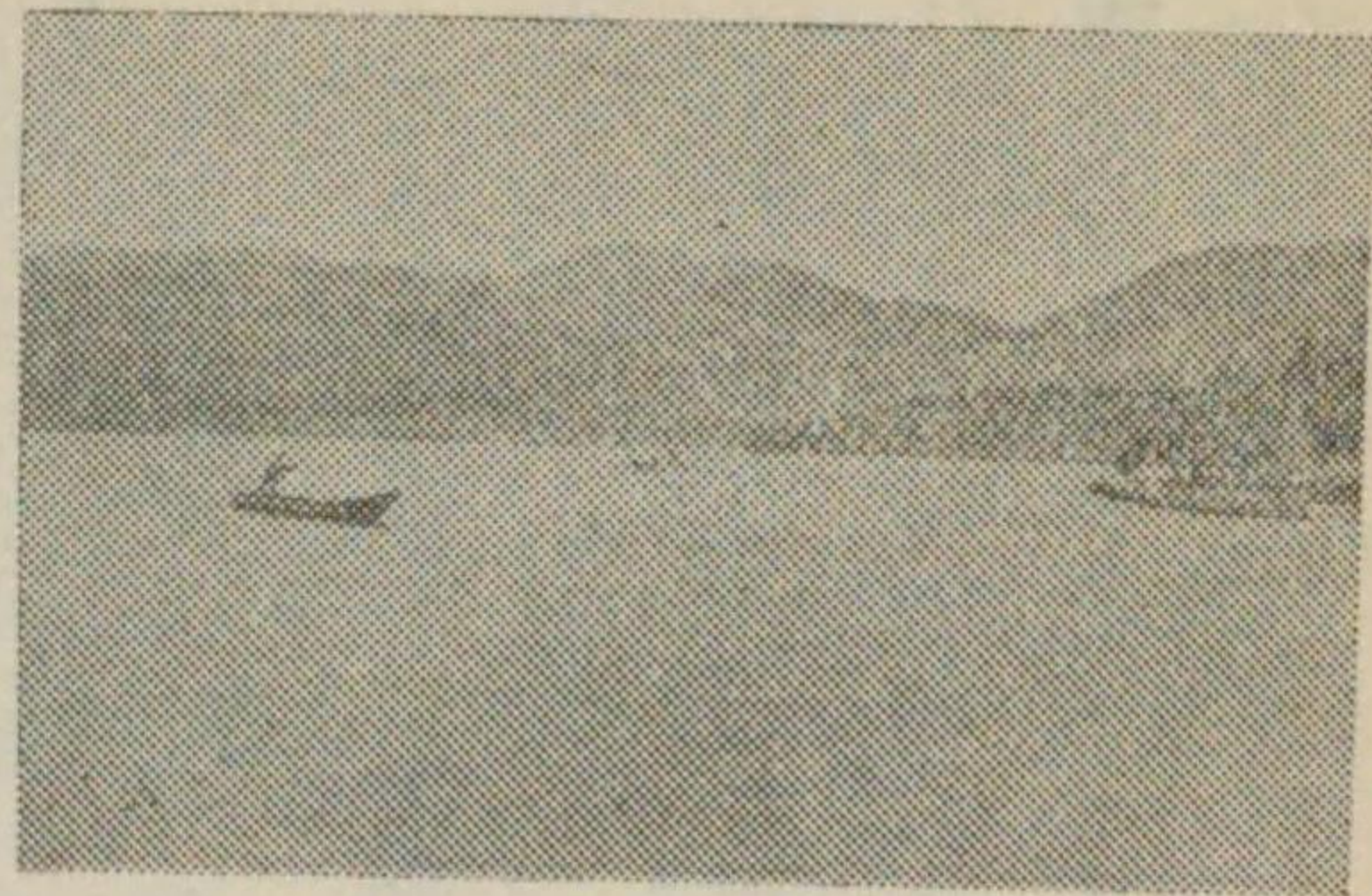
サスガの盛政も、茫然とした、彼は『しまつた』と心の底で後悔した。これは大變なことになつたものだとも思つた。サスガの盛政も朝來の勇氣はどこへやら消え失せて、狼狽周章、爲すところを知らずといつた氣もちである。彼は尾野路山に野營し、彼の部下は清水谷から鉢ヶ峰にかけて、さらに庭戸濱にも、大岩山にも野營してゐた、鉢ヶ峰に野營してゐる一隊は、北國街道を密集して進軍し来る秀吉軍を見てまづキモを潰した。

盛政は全く銳意を挫かれた、そこで急にこそ／＼と退却に決した、廿日の夜十一時よりその退

却運動は開始された、しかしもう遅かった。

## 秀吉の進撃

佐久間盛政の退却は、二十日の午後十一時ごろから開始されて二十一日午前三時過ぎにおよんだ。八千の大軍を動かすのは、容易でなかつた、秀吉がこれを追撃したのは二十一日の午前二時ごろであつた。盛政の退却軍と、秀吉の追撃軍とは、一時間餘にわたつて接觸した、もちろん、秀吉の追撃軍は、まだ麾下の兵二千餘に過ぎなかつた。秀吉は田神山を下り、黒田村を経、観音坂を上り、佐久間軍を追撃して茶白山に進み、午前四時には猿ヶ馬場にあつて、戦況をみた、餘呉湖は、まだ暁の暗の底に眠つてゐた。



余呉湖ノ内側ヨリ賤ヶ岳ヲ望ム

二十日の夜の月は、ほのかに山の端にかゝつてゐた。午前三時ごろ、秀吉の麾下には、すでに六七千の將士が來り加はつて、盛政はかつ戦ひ、かつ退いた、盛政の弟柴田勝政は、かねてから飯浦坂の東方高地に陣してゐたが、廿一日の午前七時頃、その西北高地にまで退却した盛政から、退却を促して來たので、それに合すべく背進中、秀吉勢の銃射をうけた、秀吉はさらにスバヤク麾下の將士を放つて、勇敢に突撃せしめた、まさに午前八時すぎである。賤ヶ岳の七本槍といふのは、この戦ひである。

餘呉湖の西南において展開された秀吉の進撃によつて、佐久間盛政は全軍潰滅し去り、柴田勝政は戦死した。盛政は湖畔をさまよふて鹽津にのがれ、迂回して居城加州尾山の方面へ遁竄したこの退却軍の方面、茂山には前田利家父子が駐在してゐたが、彼我の接戦におよばずして、前田軍は、サツサと兵を引き揚げて足田、今庄から府中へ還つてしまつた。勝家のために力戦することなく、秀吉のために好意的中立を保つた、けだし秀吉、利家は親交の間柄であり、かつ利家の

息女は秀吉の養女であつて、二人は姻戚關係であつたためでもあらう。

利家が引揚げてしまふと、その戦線はガラアキにあいて、直ちに北國街道狐塚の勝家の本隊まで、無人の野になつてしまふ。秀吉の大軍は、午前九時までに、佐久間軍を片づけ、その餘勢を驅つて、全軍は北國街道に刹到し、勝家の本隊に肉迫した。これが柳ヶ瀬の合戦である。しかし勝家の本營は前夜まで七千の精銳を擁してゐたのが、昨夜來の形勢非なるを見て、我さきにと逃亡するもの多く、今や剩すところ僅かに三千に過ぎない。それまで東野山の砦に籠つてゐた堀秀政は、時分はよしと、五千を率ゐて城を出で、勝家に追つた。

サスガの勝家も、二十一日午前九時、若干の士卒とともに越前へ逃げ落ちた、毛受勝介が、勝家の旗、差物をかりうけ、勝家の身代りになつて奮戦して討死したのはこの時である。かくて二十一日の正午には、勝家の全軍は總崩れに崩れた。

毛受勝介の首を點檢した秀吉は、それが勝家でないことを知り、勝家の身代りとして討死したことを知ると、即座に追撃軍を走せて、勝家を追はせた、秀吉みづからも將士を率ゐて勝家を追撃した。二十二日は府中に前田利家を訪ね、臺所の前を通つて、氣輕に利家の奥方にお目にかゝりたいと申入れた、夫人がこれを出迎へると、播州の娘は息災ですよと、まづ夫人を喜ばせ、わらじのまゝ、今度のいくさは又左衛門（利家）が勝たせてくれたのだ、忝けないと、掌を合せて感謝した。蓋し、秀吉の人たらしである。それから立つたまゝで、冷めしを出させて食ひ、利家をつれて北ノ莊に追撃した、利家の夫人は長子利長をも添へて、秀吉に従軍せしめた、けだし賢夫人である。

落日莊嚴

花井直松

百戰百勝輝武功 餘威遠歷大明中

請看一世豪華跡 落日莊嚴豐太閣

## 勝家の自盡

柴田勝家の没落は、一篇の人生悲劇である、彼はなりあがりもの、秀吉の下風に立つことを、あくまで潔しとしなかつた。彼には信長幕下の首席であるといふホコリが、あくまで彼の心理を離れなかつた。もし彼が秀吉の麾下に、馬を繋がねばならぬのなら、むしろ死んだ方がまだと考へてゐた、そして遂に賤ヶ岳の一戦によつて没落し、北ノ庄へにげ歸つた。そして四月廿四日には北ノ庄城に火をつけて、みづから自焚した、天下の美人であつた信長の妹、浅井夫人とともに自盡したのである。勝家にとつては、それが免れ難い最後の運命であつた、彼はこの運命の前に、従容として死をえらんだのだ。



勝家は、自分の運命に最後が來たと感ずるや、サスガに些さかの動搖も、狼狽をも示さなかつ

た。二十三日の夜は、秀吉の軍勢が、北ノ庄城を包圍する中であつて、天守樓上で靜かに酒宴を開き、徹宵、歌舞音曲の催しをした。そしてあらん限りの珍味佳肴をととのへて、籠城の將士とともに、最後のわかれを惜んだ、これは勝家のごとき膽略のすわつた勇士にして始めて爲しうるところである。



記者は、かつて姫路の白鷺城に上つて、その天守樓上を見て廻つたとき、天守の下の一隅に、行詰りになつた一つ城櫓の構築されてゐるのを見た、そこには「腹切丸」といふ説明の木札が貼りつけられてゐた。これは城が重圍をうけて最後の落城期に入るや、城主はこゝに來て、切腹する場所となつてゐるのである。腹切丸の庭には井戸があつて、城主が切腹するや、その首を打ち落して、こゝの井戸水で首を洗ふのだといふ説明であつた。おそらく勝家の北ノ庄城の天守にもこの腹切丸があつたであらう『腹切丸』といふ特殊の名稱と、特殊の建築をもつた當時の築城精神には、實に日本武士の精神が籠められてゐるのを感じる。そはとにかく、勝家は年來、股肱と

たのむところの近臣八十餘人とともに、曉かけて酒宴を催し、一族一家、勝家から次第々々に酒盃をのみ廻した。

◇

勝家の夫人小谷方は、小谷落城以來、十一年間孤閨を守つてゐたが、去年の九月、漸くにして勝家に嫁いで来たものである。小谷方には三人の娘たちがあつた、それは連子として勝家に養はれてゐた。いよく落城に當つて三人の子供を、秀吉に託した。今は全く思ひのこすところがないので、勝家夫妻は自盡した、腹切丸で切腹したのか、天守樓上で自殺したのか、それは分らない。

さらぬだに打ちぬるほども夏の夜の、夢路をさそふ時鳥かな

これは小谷方の辭世である、勝家はこれに和した。

夏の夜の夢路はかなき跡の名を、雲井にあげよ山ほととぎす

夫妻、相唱和し、群臣八十餘名とともに、一片の煙と化した。かくて四月二十四日の午後四時

ごろ城は全く陥落した。

◇

秀吉は、足羽川を超えて、足羽山上から、攻撃軍を監視し、全軍をして天守樓下に討入らしめたが、炎々たる火の手の天守樓上にもえ上るのを見て、勝家の自盡を知りモハヤその首を點検するの必要なしと稱して、直ちに前田利家等を率ゐて、越中に入った。秀吉の軍を行るや、實にかくのごとく迅速である。

◇

この一戦によつて、秀吉は全く信長幕下の諸將を彼の麾下に完全に納めた。山崎の合戦において『落日の莊嚴』の第一轉を示した秀吉は、賤ヶ岳、柳ヶ瀬、北ノ庄の合戦によつて『落日の莊嚴』は、今一段、華やかに、活潑に動き出したのである。



## 尾三の歴史的意義

秀吉は、去年六月、山崎合戦を終つてより未だ一年ならざるに、天正十一年の四月、信長麾下の全勢力を統一して、完全に彼の掌中に握つた。

さらに翌天正十二年の三月におよんで、小牧山において、徳川家康と雌雄を争ふことゝなつた。これは秀吉にとつては早晩來るべきものが來たのだ。しかも小牧山の秀吉對家康の合戦は、秀吉にとつては、意外な競争者を彼の脚下に發見するの結果となつた。いふところの『落日の莊嚴』は、赫々たる金色の光りに輝やきながらも、彼の前途には、この時早くも一抹の悲哀を永久にとどめた點において、見のがすべからざる運命の戦ひであつた。

◇  
運命は、實に偶然である。古往今昔、秀吉のごとき人物は、到るところに散在してゐたであら

う。唯、秀吉のごとく、織田信長といふ器量人を主人に有つといふ機會が、誰にも與へられなかつたゞけである。さらに信長、秀吉のアノ時代のやうな、戰國末葉の渦亂のうづまきを鎮定するがごとき爽快な時代に生れ合はすことが出来なかつただけである。もし信長や秀吉が、遠く中央を離れて、九州に生れてゐたならば、決してあれだけの成功を見なかつたであらう。あるひは信玄、謙信のごとく邊鄙な甲越地方に生れてゐたならば、彼等のごとき天下統一の事業は成就しなかつたであらう。信長も、秀吉も、家康も、所詮は尾三平野に生れたといふことが、アノ時代に對して、もつとも有力な發言權を握るの結果を、彼等に與へたものに外ならない。

◇  
尾三平野は、京都に近く、かつその平野は氣候にめぐまれ、天然にめぐまれ、物資にめぐまれてゐる。この自然の恩寵を利用して、彼等は天下の覇權を掌握することができたのである。この意味で、英雄はつねに時代の産物であるとともに、また英雄はつねに地理的な環境の産物であるといつてよい。尾三の平野は、今も地理的には日本の中部を占め、もつとも豊饒なる天然自然の

物資にめぐまれ、その住民は勤儉で、かつ勤勉である。天下を制するの力は今もなほ完全に、尾三の平野に約束されてゐるのである。たゞ、信長のごとき、秀吉のごとき、將たまた家康のごとき英雄的人物が、再び尾三の平野から出で來らんことを待つのみである。

◇ わが尾三の平野が、地理的條件において、自然の環境において、つねに天下に號令するに足るの條件と、準備とを備へてゐることはすでに以上に説くところのごとくである。吾々は必ずしも四百年前に生誕したる豊公の偉業を、歴史的に回顧し、讚美するだけをもつて満足するものではない。第二の信長、第二の秀吉、第二の家康はいつでもわが尾三から將來輩出するであらうことを信ずる。これは歴史のあらゆる偶然性を超越したる一つの必然なのである。たゞ何人が信長たり、何人が秀吉、家康たるかの個々人の輩出が偶然だといふばかりである。

◇ かうした意味から、歴史の過去性が、またその未來性を規定する。私たちが歴史を學ぶの

意義はそこにあらねばならぬ。ことに私たちが郷土史を學ぶの意義はそこにあらねばならぬ。私たちは焼けば灰となり、埋めば骨となるところの英雄豪傑の枯骨をのみ禮讚するのではない。人類の無限に發展すべき途上における一つの行路標として、古英雄を偲ぶべきであると思ふ。

◇ 少しく理窟に走りすぎた、それでは秀吉對家康のこの二大英雄の角逐場たる小牧山の合戦を概観しよう。

## 犬山城をとる

小牧山の對陣に、秀吉と家康との二人の英雄が、がつしりと四つに組んだ横綱同士の取組であつた。この二人の取組は、最初の立あがりには、秀吉方の池田勝入齋が、スバヤク犬山城を略取し

たことから始まつた。池田が犬山城をとつたのは、三月十三日の夜であつた。これは平手で、一つ、徳川方の横つ面を叩いたような手であつた。しかし池田には進んで小牧山をとるの餘裕も、餘力もなかつた。も一步、出足を早くして、徳川方を叩きつけるためには、小牧山を占領して置く必要があつたが、池田の手に有つてゐる小勢では、恐ろしくて徳川方に、それだけの手を出せなかつたのである。

◇

池田勝入齋は大垣城にあつて美濃一圓を監視してゐたが、十三日鵜沼を渡つて犬山城を略取した。犬山城はもと池田の築城したところで、町民もこれを徳としてゐたので、ひそかに入城を手助けし、十四日は池田の入城を祝ふために町民は酒肴を運び入れて、城内はほがらかな戦捷氣分に寛いでゐた。

美濃金山の森武藏守長可は、池田の聲である、郡上の城主遠藤但馬守とともに、秀吉方に馳せ参じ、岳父池田勝入と相應じて秀吉の監軍尾藤利定とともに、十五日、兵三千を率ゐて金山を出

發、十六日、羽黒に出陣し、附近の村落に火を放つた。森武藏の目的は、おそらく小牧山を占領して、これに據らうとしたのであらう。しかるに池田勝入父子が、當日來り會しなかつたために進んで小牧山を占據することをせず、そのまゝ留まつて、羽黒村の八幡林に陣を布いた。

◇

當時信雄は清洲城にあつた。家康はすでに十三日、清洲に來て、信雄と會見して、一切の打合せをした。清洲から小牧へは僅かに一里半の道程である、信雄、家康の聯合軍は、伊勢へむけて出征の途中から、急に軍を回して續々尾北の方面に集中した。十六日には徳川勢の先隊は小牧山の西南方落合郷に集結した。

◇

徳川方は池田も、森も、劣勢なる孤軍であることに目をつけ、いまだ秀吉の大軍の殺到せざるに先だつて、これを痛撃するの必要を感じた。十六日の深夜、酒井忠次、奥平信昌、大須賀景高、榊原康政、本多康重、深溝松平家忠、形原松平家信、櫻井松平家廣、丹羽氏次等五千餘人は、清

洲を出發して、樂田、羽黒、九郎丸邊へ、ひたひたと押しよせ、十七日の拂曉、森長可の八幡林の陣所近くへ表はれた。

◇

『繪本太閤記』は、石田玉山の撰述せる通俗小説で、事變の表裏を描寫するにおいて、もつとも妙を極めたものであるが、何故か、小牧山の對陣、長久手合戦については、一行の記述をも試みてゐない。豊太閤の偉業を録して、廣く世に流布することは、徳川幕府の喜ばなかつたところで、石田玉山の繪本太閤記も、事の苟くも徳川氏に關するものは、恐懼してあへて觸れなかつたものである。それにもかゝはらず、全篇が完成をつぐるや、忽ち忌諱にふれて、その印板は沒收され、燒棄されてしまつた。大切な小牧合戦の記事が、彼の太閤記から、全く抹殺されてゐてすら、この始末である。徳川時代においては、いかに太閤記を正しく書くことの困難であつたかはこの一事にても想像されるであらう。

◇

『三河後風土記』は、徳川方の記録で、まづ無難に徳川家康の事蹟を敘述してゐる。之は將軍家齊が圖書頭成島司直に命じて、從來の傳寫本を校訂せしめたもので、大體、正史に近いものとなつてゐる。いはゞ徳川氏官許の『家康傳』ともいふべきものであらう。小牧對戦の大様は、ほぼこれによるが、もとより徳川ビイキの記述たるは免れぬ。

## 八幡林の戦

尾張國東春日井郡長久手村大字岩作に、安昌寺といふ一禪寺がある。天正征伐記、長久手由來記、長久手物語、湫峽記の書寫本を藏するが、就中『天正征伐記』は、もつとも詳細に、かつ、比較的史實に近いものと思はれるが、まだ一般には、傳寫されてゐない。

東春、小牧町には津田應助氏あり、小牧合戦に關する稀觀の傳寫本、實に六十餘種を集めて研究し『小牧合戦』のみにても、優に一千ページの大著をなすの資料を有つてゐる。かうした特殊

の研究家や、特殊の秘藏本や、その他古文書が、ひろく世に表はれて、英雄の面目が、正しく世人に理解されるに至らんことを希望に堪へない。

◇

事の序であるが、豊太閤の『葬儀行列次第』といふものが、近頃、續々諸所から發見される。さきに仙臺方面で、その發見されたことが新聞紙に表れると、同様の所藏者が、各地から相次いで表はれることも、喜ばしいことである。元來『聚落の行幸』でも『北野の大茶會』でもその他、秀吉が前田利家、徳川家康などの茶亭に招かれて、饗應に與かつた時の『能』や、進物、料理の献立などの次第書は、すでに印刻されて世の中に立派に遺されてゐるのに、ひとり太閤の葬儀行列の次第のみが世間に秘藏の形で、傳承されてゐるのは、どういふ譯であらうか。豊公の死を傷み、惜む、自然の人情が、ひそかに、かうした葬儀行列の次第をそれからそれへと傳寫して家寶として傳へて來たのかも知れない。これはまた太閤に關する事蹟の、世に傳へられることを極度に忌み恐れた徳川時代の、感情的政策に對する民衆の、ひそかなる反感のアラワレといふべき

きものかも知れない。

◇

とにかく、話を、三月十七日の八幡林における森武藏守長可の苦戦に返さう。

『三河後風土記』によれば、酒井左衛門尉忠次は、森攻撃の主唱者であつた。彼云はく、

『かの、武藏とか申す男は、勇猛のはまれあつて、上方にては鬼武藏とアザナつき、その身も随分武勇にはこると聞きおよんだり、一戦して押付を見、三河武士の手並の程を示すべし、上方者の膽をとりくぢき申すべし』

なるほど、負けぬ氣の酒井忠次のいひさうなことである。家康も直ちに賛成した。

『これは、よく仕つるものぢや、一當、あてゝ見よ』

そこで酒井は、軍の先頭を承まはつた。

◇

十七日の曉の夢まだ覺ぬ森武藏の軍勢は、徳川勢のヒタ／＼と陣所近くへ押しよせて來たのに

驚いた。即ち、森は羽黒村南方、東西へ流るゝ小川あり、その川を前にし、羽黒村を後にし、八幡林の鳥居の前に、陣を立てた。徳川勢は、すでにその小川の岸にとりついてゐる。戦闘の火蓋は、まづ徳川方から切られた。始めは鐵砲を放ち、矢軍をして、しばらく機會の移るを見た。この時、森の陣中から、軍使鍋田内藏助が、緋緘の具足に、赤幌をかけ、淺黄の羽織着たる歩兵七八人を、馬廻りに従へて、大膽不敵にも、兩陣の中間を乗り廻わした。これを見た徳川勢は一齊に癢に觸へた、奥平九八郎信昌は、士卒に命じた。

『あれを、うて』

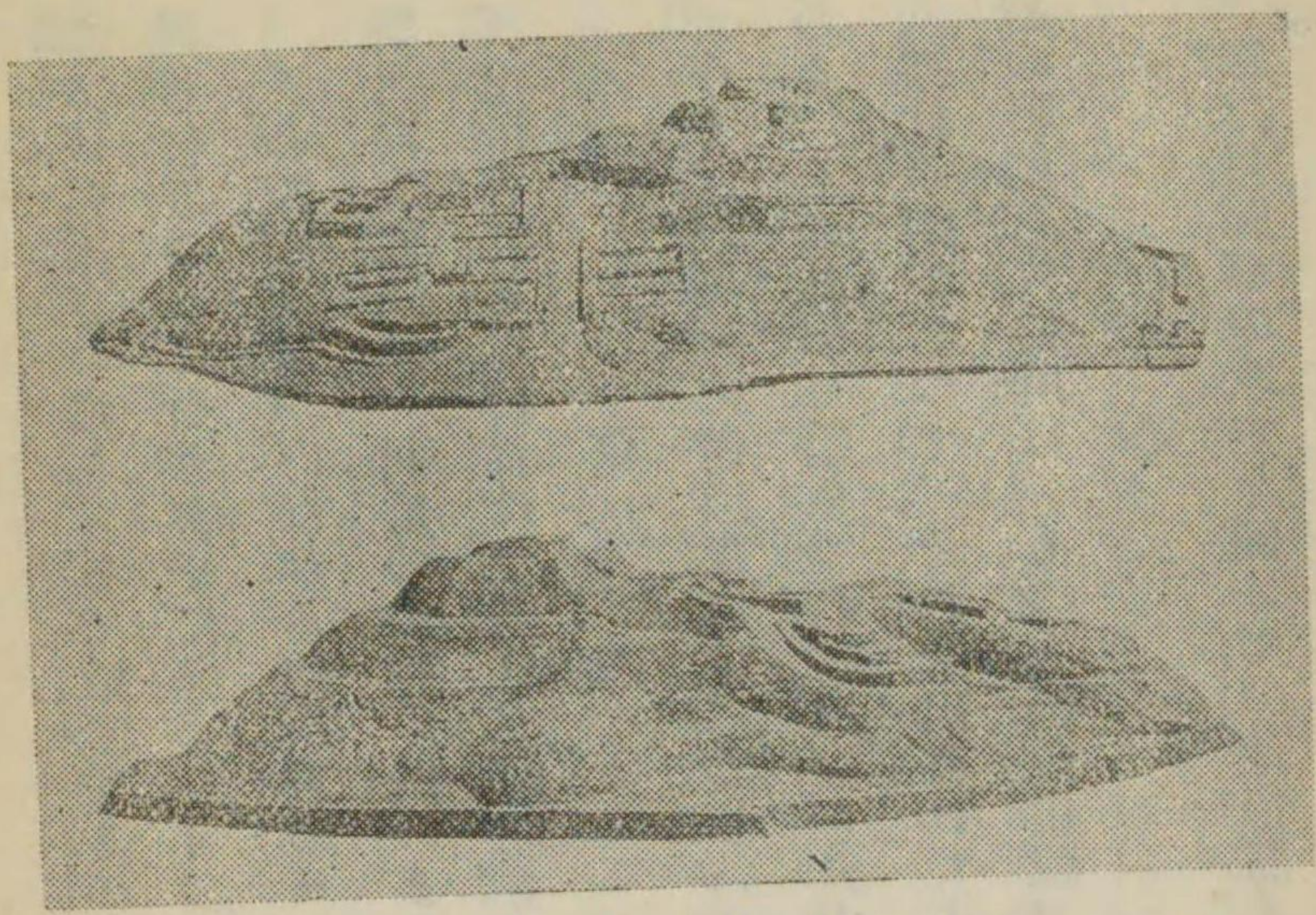
鐵砲の手練をほこる三人の士卒は、やにわに川の中へザブ／＼と乗り入り、向ふ岸にとりついて、覗みを定めた、ずどんと一發、煙を立て、種ヶ島は發射された。續いて、一發、また一發煙は紫の細い筋をひいて、空を切つた。

鍋田の赤幌が、馬上で揺いだ。緋おどしの具足が、馬上に突つ伏しになつたと思ふと、大木の倒れるように、どつしりと、地響をうつつて馬から落ちた。まさしくやられたのである。

奥平九八郎は、『それつ』と差圖をみると、彼の士卒は、二十人許り、一齊に川を渡つて、遮二無二突進した。

### 野呂助右衛門戰死

小川を隔てゝ對陣しつゝ機會をまつてゐた徳川方の奥平昌信は、手勢一千名、まづ河を渡り敵陣に入した。酒井、松平、丹羽の諸勢も一齊に河を渡つた。榊原と大須賀の前面には大沼があつたので沼をめぐつて横合ひから打つてかゝつた。酒井の旗奉行川井次郎大夫は、旗を森、尾藤兩軍の後方に廻すと



小牧山型上方南方下面北方也

森方は包圍されたりと見て敗走するのを、さらに酒井の兵二千餘は、左方に大旋回して、退路を押し包みさうにつめ寄せた。

この攻撃法は、いはゆる徳川方のロクロしぼりにかけて、散々に揉み潰した。森軍一方の勇士野呂助右衛門は、羽黒の山麓の橋のまん中に立ちはだかつて、追撃兵を迎へ戦つて遂に若冠奥平又七郎のために打たれ、子息三郎助も、父に殉つて討死をとげた。

◆  
今も、羽黒村の街道裏には、美しい八幡林の松林が、こんもりと黒く、羽黒山の麓まで續いてゐる。その林の一端を、名古屋から犬山行の名岐電鐵の機動車が通じてゐる。林の中には小さい八幡社の祠があつて、それを出盡れたところに、野呂助右衛門戦死の石碑が建てられてゐる。野呂の戦死した場所は、もつと奥の山麓であつたが、近年こゝへ墓碑を移して來たものである。

◆  
森、尾藤等の敗走を聞いて、池田勝入は、犬山の段の下まで兵を進め、追撃し來る徳川勢と一

戦を交へんとしたが、家老片桐半右衛門に諫められ、段の上まで引き返して、追撃軍を待った、しかし徳川勢もウカツに進まうとしない。兩軍互に睨み合つたが、やがて徳川勢は引揚げ、池田も齒がみをしながらも、遂に合戦に及ばず、かくて十七日は暮れた。

◆  
翌十八日、徳川方は榊原康政に命じて、小牧山を占領して、城塞を築かしめた。池田も森もつひに小牧山略取におくれをとつたのである。

榊原は、十八日から小牧山の防備にかゝつたが、二十一日には完成し、城砦は榊原みづから、これを守つた。信雄、家康は清洲へ引あげたのである。

◆  
八幡林の敗報は、大阪にある秀吉の下に達した。これはまさに立ち上らうとする秀吉の出鼻を家康によつて打ち挫かれたことになる。秀吉は憤然とせざるを得ない。てうどこの時、秀吉は大阪城で、悠々たる春の日を、のどかに、従者を相手に碁を圍んでゐたが、手に握つてゐた碁石を

ばら／＼と盤の上に投げ捨てるとともに、そのまゝ、すつくと立ち上つた。そして明け放された庭園の飛石の上へ飛び出して『えいや、えいや』と四股を踏んだ。全身に力瘤を入れて、踏ん張り、かつ踏ん張つた。これは肩のしこりを、全身運動によつて揉みつぶすための運動のみではなかつた。誰一人、天下に恐るゝものもなき彼の覇業と、威勢の前に、一步も屈しないで、楯ついてゐる一大勁敵を發見したときの、勇壯なる武者振ひであつた。

◇ 秀吉は出發前に、すでに四國、中國、近畿の手當をそれ／＼に講じて置いた。世間は今度の動亂に可なり不安を感じてゐた。だが、秀吉は『こゝ十四、五日のうちに、世上の物狂ひも、酒の酔のさめたるごとくに、筑前覺悟をもつて、しづめ申すべく候』といふ自信をもつてゐた。その自信の鼻先へ、尾北の敗報が來た。彼は、一大武者ぶるひを感じざるを得なかつたのである。

◇ 四股をふんで、『えいや、えいや』と、全身の元氣を喚び起すとともに、そのまゝ、馬を喚んで

出發した。かねて動員したる十二萬五千の大軍は、沿道に彼を迎へて、彼とともに進軍した。三月二十一日である。

## 小牧の對陣

『榊原小平太康政申しけるは、當城（清洲）に近き小牧山、東西二百八十六間、南北百四十間高サ二十二間、西北に沼あり、東は野なり、國中一圓に見渡し候し地なり、敵に取しかれては悪しかりなん、早々、味方の砦を補理し然るべしと申す、忠次始め皆、同意せり』  
と、參河後風土記はいつてゐる。かくて小牧山の築壘は、榊原康政によつて行はれ、二十二日に竣工、二十三日にはその附近に蟹清水、北外山、宇田津などの數壘を築き、また小幡の舊城を修繕して、こゝには本多廣孝父子を居らしめた。小幡城は家康の本據岡崎への連絡のためである。さらに西春日井郡比良の舊城をも修繕した。これは清洲との連絡のためである。



これによつて見るに、信雄、家康の聯合軍は清洲を本據として、その先端を小牧山にまで突き出し、家康の岡崎城を最後の後方に備へ、その間に比良、小幡、岩崎の諸城邑を連ねて首尾兩端相應するの作戰を樹てたもので、これは秀吉にとつて容易ならぬ布陣であつた。

二十六日、秀吉は岐阜を發し、鶉沼に出で木曾川に船橋を架けて、二十七日正午頃、犬山城に入つた。しかし彼は犬山城に入るの前日までは、心中、ひそかに岐阜から清洲へ押懸けるつもりであつた。そは三月二十六日附にて、秀吉から常陸國太田の城主佐竹義重に與へた手紙に、それが見えてゐる『明二十七日、秀吉河を越し、清洲近邊まで押よすべく候、自然家康とり出だすに  
おいては、一戦をとげ討果すべきこと、案の内に候』といつてゐるにても明らかである。

しかし秀吉は、清洲に向はずして、犬山城に入つた。犬山城に入ると、彼はその日の午後、直ちに諸將を率ゐて、大物見に出掛けた。羽黒を経て二宮山にのぼり、徳川軍の陣營を展望した。

さらに山を下つて小松寺、久保一色、岩崎、青塚、小口等を巡視した。敵前近く、頤をあげ、手をゆびさし、親しく位置を指點して諸砦の防備をととのへしめた。即ち北は岩崎から二重堀に至る間に二十餘町の土堤を築いた。厚さ一間二尺、高サ二間三尺の土壘で、それには出入のために所々に門を設けた。その土壘につゞいて二重堀を掘つた。二重堀は自然の泥地を利用して、小牧山を前にして、蜿蜒として孤線を描いて東南につゞいた。これが二十七日の夜から、二十九日に至つて完成した。

家康は、秀吉來るの報を得て、二十八日清洲から小牧山へ移つた。二十九日には織田信雄も小牧山に來た。

秀吉も犬山城から、樂田に本陣を構へた。兩軍の主將は、こゝに儼然として相對陣するの姿勢をとつた。

秀吉の樂田城は、今、樂田尋常高等小學校となつてゐる。段丘を爲した城壘の面影が、學校敷

地の周囲の柴生に残つてゐる。

◇

秀吉は二重堀には日根野備中守弘就、弟彌次右衛門に二千餘人を添へて守らしめた。岩崎山の砦は稻葉一鐵、その子右京亮貞通、嫡孫彦六興道等四千人、小松寺の砦は羽柴秀次八千餘人、青塚は森武藏守長可三千人、内窪山は蜂須賀頼隆、金森五郎八長近三千人、外窪山には丹羽長秀、田中には堀秀政、細川忠興、長谷川秀一、蒲生氏郷、加藤光泰、小口には筒井定次、伊東祐時等その兵數合せて八萬餘に上るといはれる。

◇

これに對する徳川方の軍勢は、戰場に用ひうるもの、辛うじて二萬三千餘、秀吉方に對して三分一にも足りない。

### 三河侵入策

秀吉と家康とが、小山に對陣を始めたのは、三月二十九頃からであつた、陽曆に直せば、もろゝ晩春の頃である。八幡林のほとりには、堇の花や、タンポポの花が咲いてゐたであらうし、小牧山には櫻の花が、残んの色に咲き残つてゐたであらう。日根野備中守の守備してゐた二重堀の村落には、竹藪がこんもりと茂つて、藪蔭には、紅い椿が、ぼたり／＼と、地に散りしいてゐたであらう。

◇

四月四日の夕方から、池田勝入が、犬山城から樂田にある秀吉の本陣へやつて來た。池田は先日來聲の森武藏や、遠藤但馬が、徳川方に一戦をいどんで、脆くも敗退したのに業を煮やしてゐた、將兵百六十人、士卒八百餘名を、八幡林の戦ひで犠牲にしたことが残念でならなかつた。

火ともし頃の春の夕べ、ソツと秀吉に面會して一つの秘策と思はれるものを獻策した。それは小牧山を見ると、徳川方の各將士の旗、さし物が、翩翩と風にひるがへつてゐる、おそらく徳川方は自家の全軍をあげて小牧山に籠つてゐるのであらう、だから岡崎の本城はからつぽになつてゐる違ひない、ソツと岡崎を襲撃して、三河の在々村々を焼討ちするならば、徳川軍は驚いて岡崎へ引き返して來るであらう。それをきつかけに、家康を掩撃したならば、成功疑ひなしといふのである。

この池田の提案は、ちよつと面白い策ではあるが、相手がクセモノの家康であるから、一つまぢがふと、大變なことになると思つた。秀吉は危険がつて容易に『よし』とはいはない、それに秀吉方ではすでに二重堀を掘り、長い土堤をめぐらして、持久戦の覺悟をきめてゐるのであり、ヂリ／＼と徳川方を壓迫するのをもつて、正攻法だと考へてゐる、池田は押して自分の獻策を主張した。

『お許し下さるならば、私たちで責任をもつて實行の衝に當ります』  
とも云つた。

池田はかねてから、東春日井郡篠木、柏井の兩郷二十餘村に亘つて、村民を工作して置いたので、三河へ討入るには、そこを足溜りとするつもりだともいつて、秀吉を説いた。熱心に説いた。

秀吉は

『とにかく、今晚一晚、よく考へて見よう、返事は明日のことにする』  
さう、いつて池田を犬山へ歸した。

五日の朝は、早くから池田は、樂田へ來た、昨夜の返事を聞くためであつた。秀吉は、池田を自分の室へよび入れると、云つた。

『一つ、君の主張通り、やつて見よう、但し君と森武藏とでやれ君等の一族でやるだけで心配

なら羽柴秀次を、イクサの手習ひにつけてやらう、外に、堀久太郎を、イクサ目付けとして遣はさう』

池田は喜んで退出した、さつそく犬山へ歸つて出師の準備をした。

◇

この三河入りのことを『小牧山の中入り』とよばれてゐる。敵の空國になつたところへつけこむのを、上方では中入りとよんでゐるのである、秀吉はこの中入りを可なり危険がり、冒険がつたものである、ウカツにやれば、とうど賤ヶ岳で佐久間玄蕃盛政が陥つたような失敗をくりかへすかも知れない。そこで秀吉は、呉々も、池田に注意した。

『君は、たゞ三河へ行つて、在々村々を放火して徳川軍を脅かせばよいのだ、岡崎城を乗りとるのが目的ではない、だから用事がすんだら、すぐ引返さねばならぬ。途中でグヅグヅして、敵に引つかゝらない様に氣をつけるがよい。』

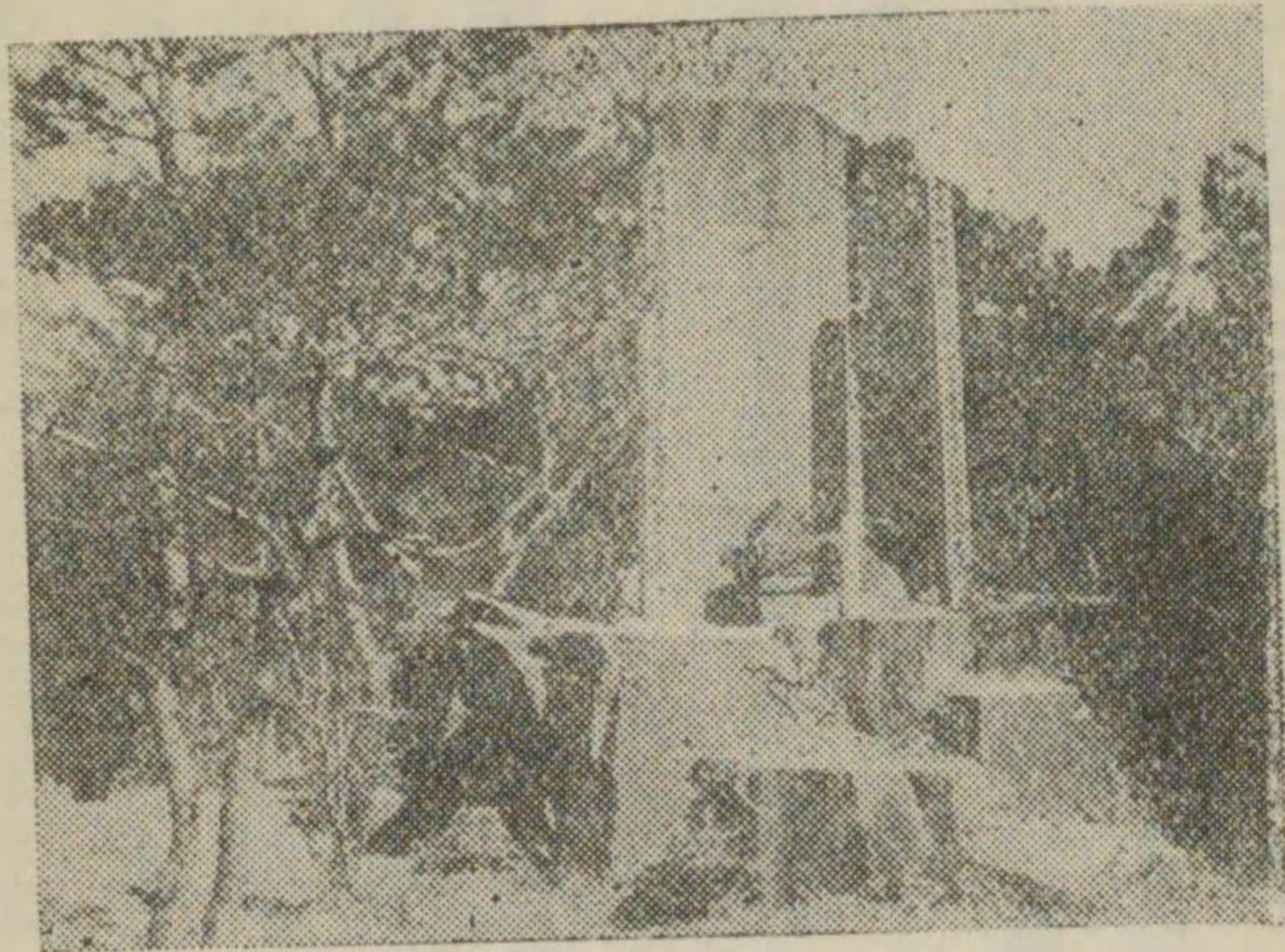
◇

これは柴田勝家が、賤ヶ岳の合戦前に、部下の佐久間盛政に與へた訓令と同じ意味の訓令であつた。

果して池田勝入は、この中入りにおいて失敗した、これが長久手合戦である。

### 岩崎城の抵抗

東春日井郡大草村には、一揆の大將で、森川權右衛門といふのがあつた。その勢三千、鐵砲六百挺をもつて、西尾道榮屋敷に立てこもつてゐる、池田勝入はかねてから、部下の日置才藏をして、森川を説かしめ、森川も彼の味方に參るべき由を應諾した。



岩崎城戦跡死記者記念碑

四月六日、池田勝入は兵六千を率ゐて、第一隊として先頭に立つた。森長可は三千を率ゐて第二隊に、堀久太郎秀政は、これまた三千を率ゐて第三隊につゞき、羽柴秀次は第四隊として兵八千を率ゐて、最後部を前進することに部署を定めた。

晝のうちは、徳川方の耳目を欺くために、若干の兵を出して、戦ひを挑ましめた、そして四月六日の夜、新月をたよりにひそかに小牧を出發した。

池田、森の全軍を合せて二萬の大兵である、全軍の意氣は、大に揚つて、眼中ほとんど三河を壓倒し去つたようなつもりである。たしかに勇氣に傲りすぎたきらひは十分であつた。かくてこの一軍は七日午前十時頃には、二宮村の南から、池の内村に通ずる物狂坂を超えて、大草村に出た。大草村から關田村へかゝつた。そして篠木、柏井に入つて、砦を上篠村に築いてそこに宿營し、兩郷二十餘の村落へもそれ〴〵宿舍した。森川權右衛門、村瀬作右衛門など、この地方の一揆の大將は池田を迎へた、

八日の午前十時、宿營地を發した、第一隊、第二隊は大留村から、第三隊は野田村から、第四隊は松河戸村から出發して庄内川を渡つた、志段味村から、諏訪ヶ原の高地をすぎて、平子山の西北から、茶磨ヶ根に出て、印幡、新居の村々の間を経て、矢田川を渡り、熊張の西をすゝんで香流川を渡つた。かくして人馬肅々として、徹宵進軍した、長久手村のこほろぎはさまを過ぎて九日の未明には、藤島の森がほの〴〵と曉の霧の底に浮かび上つてゐるところまで前進した。

藤島の西北に、岩崎城がある、城主丹羽勘助氏次は、徳川方に従軍して、先日来、八幡林で勇猛に戦つてゐる。その弟氏重は、辛つとまだ十六歳で、叔兄に當る長久手城主加藤忠景以下約三百名とゝもに、兄の留守を守つてゐた。

てうど、氏重はその時、疱瘡を患つて、膿血がまだ乾かないで寝てゐた。池田、森の軍勢が、岩崎を悠々と行軍するのを見てはヂツとしてゐるわけには行かぬ、あくまで敵の行軍を支へなけ

ればならぬと決心し、急いで刀を執つて病床から立ち上つた。

◇

氏重の母は、吾が子が、決然として立ち上つたのを見て、背後から鎧を着せかけて『死をもつてこゝを守れ』と激励した、氏重は頷いた、母は吾が子の氏重の、悲壯な立派な態度を見て、喜びかつ泣いた。母子二人にとってはこれが短い生涯の最後の訣別である。

氏重は鎧を着て、指揮をとつた。老幼婦女をせき立て、城下の妙仙寺へ避難せしめた、妙仙寺は、丹羽家代々の菩提寺である、一同妙仙寺へ避難し終るや、氏重は二百九十餘人を集め、門を開いて城外に出で、池田、森の大軍へ鐵砲を打ちかけた。

◇

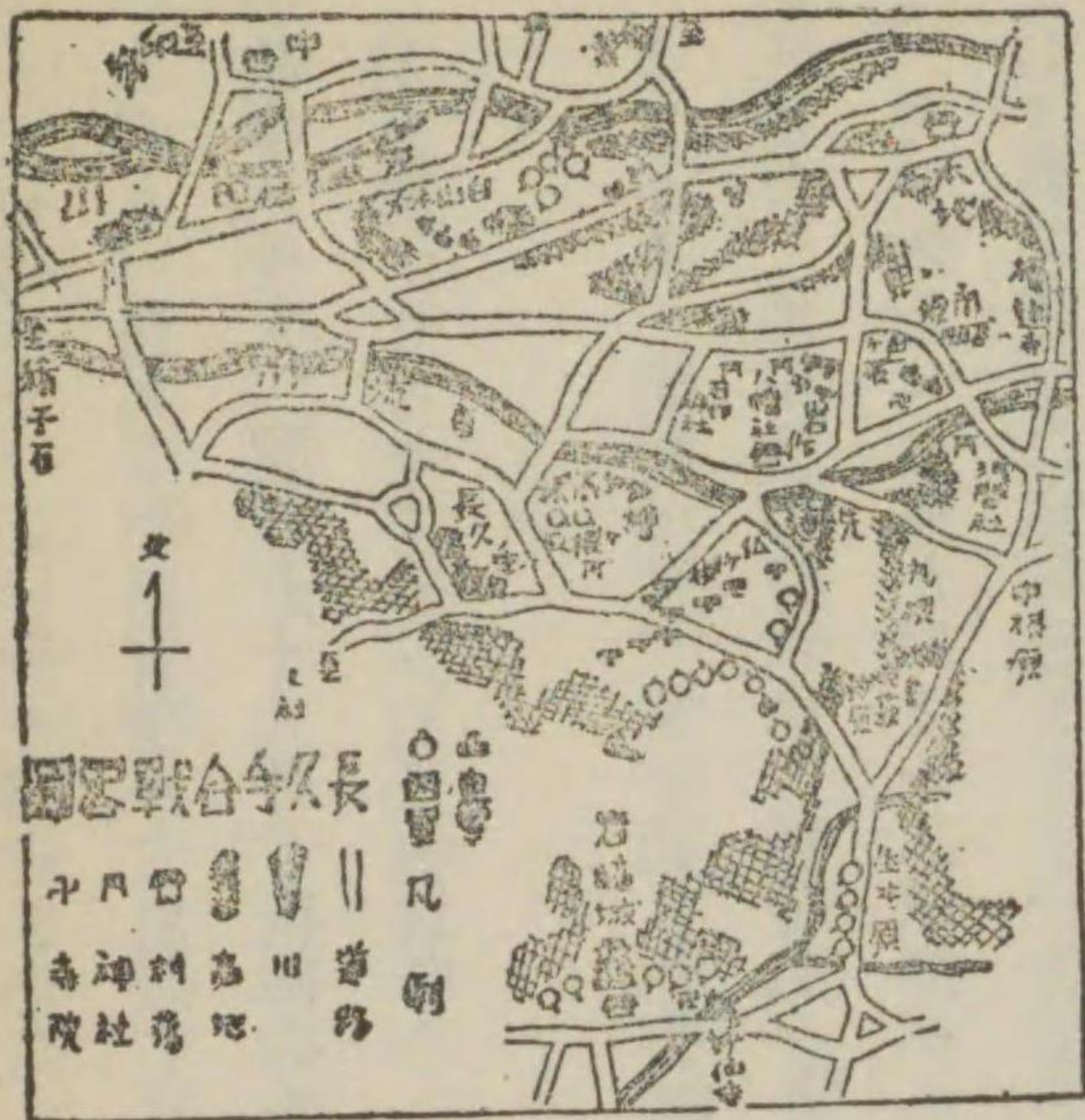
池田軍では、穩便に岡崎まで進軍するつもりであつたが、突如として鐵砲を打ちかけられたので詮方なく、池田の先鋒伊木清兵衛、片桐半右衛門等二千餘騎で、引包んで討取らうとかゝつて來た。岩崎城はほんの小さい丘の上の、五十間許りの平場をかきならして築かれた小城で、城に

もる侍は僅かに十騎に過ぎない、その他は侍に附屬して村内でかり集められた百姓衆が、士卒として籠つてゐるに過ぎない、それが總勢二百九十餘人である。この少軍をもつて、池田、森の兩軍九千名を迎へ撃つて、あくまでその進軍を阻止しようとするのである。池田方にとつては、岩

崎城の潰滅はほんとうに朝メシ前のシゴトに過ぎない。

### 家康の追跡

岩崎城の戦ひは、九日午前四時に始まつて午前六時に終了した。次郎助氏重以下二百三十九人は悉く戦死した、池田勝入方においても四百六十四人の死傷があつた。



(日九月四年二十正天)

圖略戰合手久長

三河後風土記には『侍十騎過ぎず籠りたることなれば、次郎助始め、城兵ことごとく討死す』とあり、長久手村教育會から出版してある『長久手戦話』には、近臣四十一人、射夫三十八人、砲卒六十人、雑兵七十人外、近傍の庶民等強剛のもの三十人、すべて二百三十九人とあり、『丹羽家譜』には尊卑凡三百人とある。

◇  
とにかく、岩崎城は、文字通り池田軍のために『朝メシ前』に片附られてしまった。しかしそのために、池田方の行軍は、數時間をこゝに食ひとめられた、岩崎の村はづれに、香流川が流れて、その附近に生牛が原といふ原野があつた、池田勝入はそこで首實檢の式などをすませ、悠々として勝ち誇つた意氣をもつて、將士とゞもに朝食をとつた。

◇  
家康の小牧の陣營には、七日の午後四時、篠木の百姓二人が、秀吉方の大軍の來り屯ることを告げた。家康は始めこれを信じなかつた、何かこれは敵の策略ではなからうかと考へ、その

まゝ百姓二人を留置してしまつた、やがて日が暮れると、青塚の森武藏の陣營に入れて置いた忍びの男、服部平六といふのがやつて來て、同じ報告をもたらしした、『忍びのもの』は、當時伊賀および江州信樂邊の山間にある一種の軍事探偵を業とするもので、江州信樂のものを甲賀流といひ、他を伊賀流とよんだ。服部平六は、伊賀流の忍びのものである。

◇  
家康は、モハヤ疑ひなしと知るや、即夜、ひそかに諸隊に出發の用意を命じ、さらに間諜や、斥候を篠木、柏井方面に派して、敵の偵察を行はしめた。

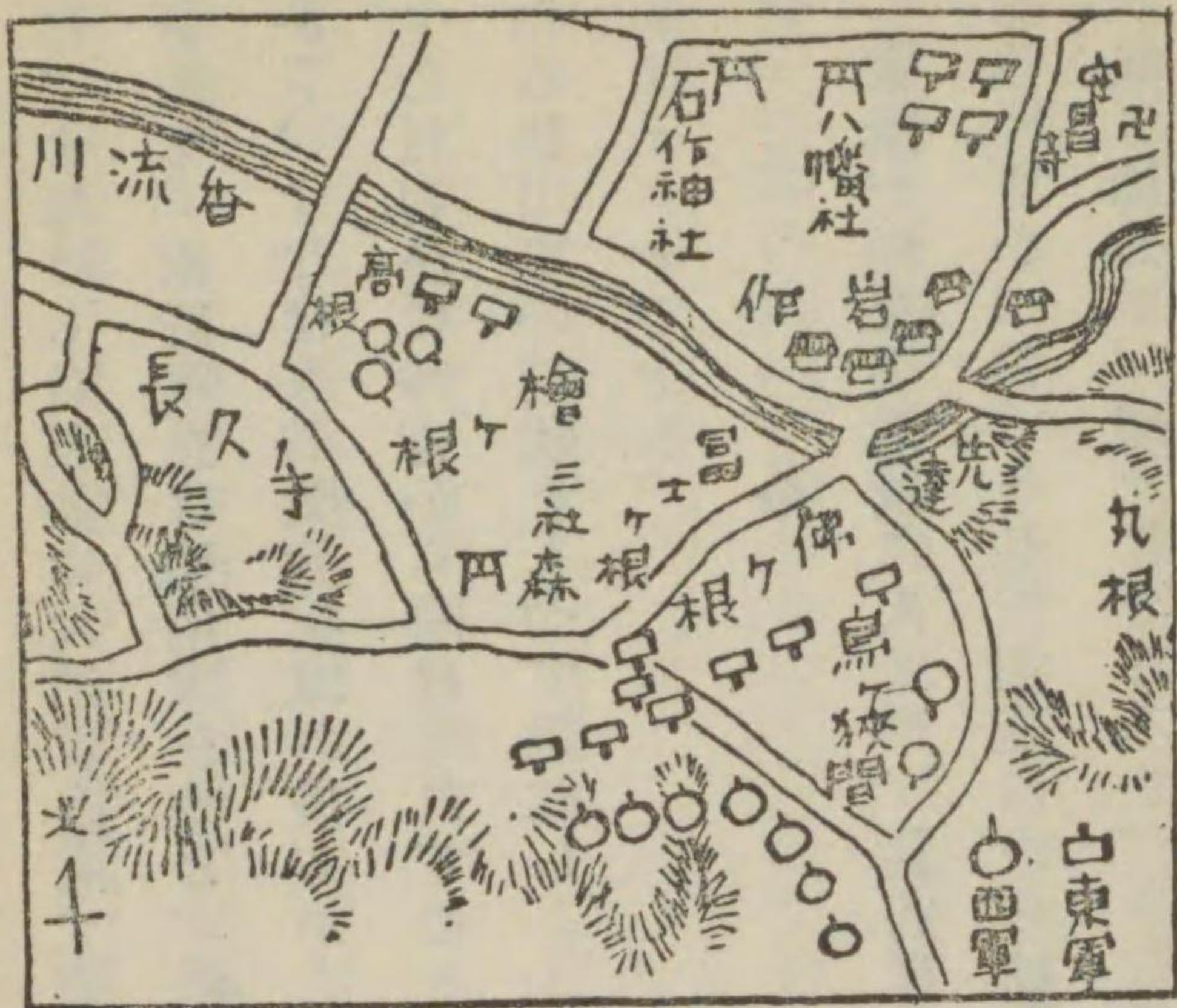
◇  
八日朝、これらの偵察、斥候は續々と報告をもつて歸つて來るし、如意村の土豪石黒善九郎も敵狀報告にやつて來た。それらを綜合して、秀吉軍の目的が、岡崎城攻略にあることを確め、猛然としてこれを途中に打破すべく軍令を發した、すなはち大須賀康高、榊原康政、本多康重、水野忠重、丹羽氏次等四千五百人を先發して、敵を追躡せしめ、家康は自から兵六千三百、織田信

雄は兵三千を率ゐてこれに續くべく部署を決定した。

◇ 水野忠重等の先發軍が、小牧山を出發したのは、八日午後七時、今の陽曆にして五月十七日である。この出發は秀吉方に悟られないように、きはめて祕密のうちに行はれた、岩崎城主丹羽勘介氏次は道案内として先頭に立つた。南外山、勝川を経て、庄内川を徒涉し、川村を過ぎて、午後十時にはひそかに小幡城に入つた。秀吉の本營にても、三河中入り軍の池田方にても、うかつにして、すこしもこれを覺らなかつた。否、知らうともしなかつた。

◇ 家康の本陣は、先發軍の出發に後るゝこと一時間、午後八時、小牧山を發し、市之久田、青山豊場、如意の村々を経て、味鋤の東北方から勝川に入り、龍源寺といふのに休息した『こゝは何といふところか』と家康は尋ねた『勝川と申します』『勝川とはイクサにめでたい、モハヤ明日のイクサは勝利に決まつた』家康はさういつて、こゝで甲冑の武装を整へた、更に庄内川右岸から

牛牧を経て小幡城に入つたのは、夜の十二時頃であつた。



地戦激(間狭ケ鳥)手久長

### 白山林の拂曉戦

◇ 家康の追撃軍が、ソツと小幡城に入つた頃には敵は深夜、徹宵で、三河路をさして、志段味の高原を續々として南進しつゝある、家康方は、さかに斥候を飛ばして、敵情偵察をやつてゐるのに彼等は一向、そんなことには無頓着で、きはめて無雑作に、何の警戒するところもなく行進しつゝあるのだ。



家康の先發軍は、小幡城において、完全な敵情偵察を行った結果を綜合して、攻撃方略を定め、すなはち右翼隊に大須賀康高、岡部長盛等を、左翼隊に榊原康政、本多康重、穴山勝千代等をあて、水野重忠は豫備隊を率ゐ、敵の大軍に正面より打ちかゝるのは得策でないから、敵の後から、すなはち羽柴秀次軍の後方から突撃することに決定した。秀次は當時僅かに十七歳、イクサの見習ひに秀吉から附けられてゐるに過ぎない、いはゞ弱冠未熟の大將を、千軍萬馬を往來したる徳川軍の精銳をもつて撃破しようといふのである、これは大人が赤子の腕をねぢるよりも容易なイクサである。

家康が深夜小幡城に入るや、諸將はこの一般方略を報告して家康の承認を得た、家康は『よからう』といった、そして家康自からは主力を率ゐて、敵の前頭を壓するの決心をした、うしろから突き崩して、崩れたところを、さらに前から突き崩さうといふのである、それでは勝算歴々未だ戦はざるに徳川軍の勝利は明々白々である。

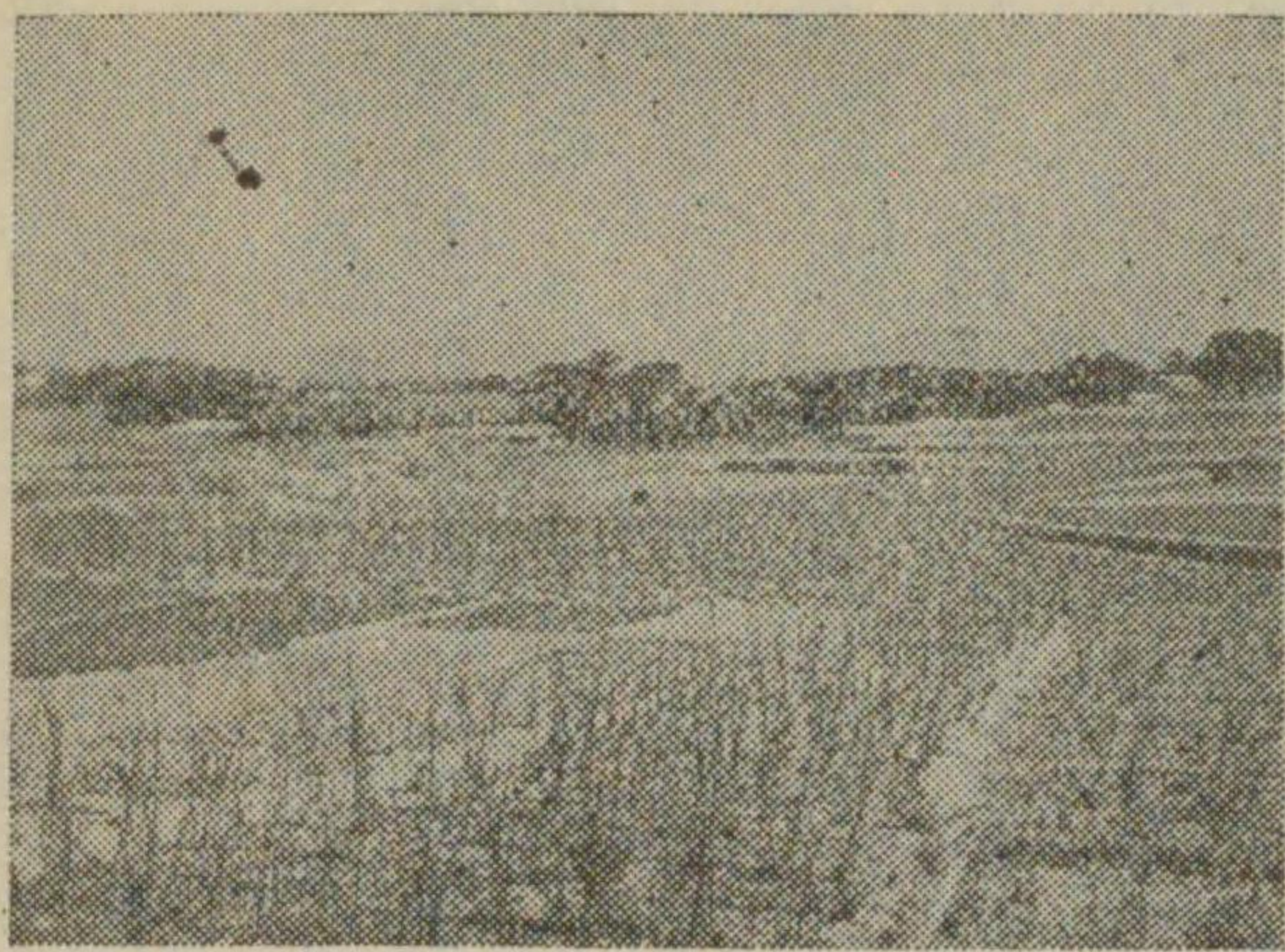
池田等の三河侵入軍は實にウカツ千萬であつた、むしろ大膽無法であつた、徳川家康ほどの名將を相手として戦ふに當り、少しも家康軍の追躡に氣をつけなかつたのは、何といふても手ヌカリであり、不注意である。そして秀吉までが、案外ノンキに、家康を見縊つてゐて、池田軍の行動を彼等の自由に委せきつて、みづからソコに注意しなかつたのは、たしかに大きな失敗であつた。

ソんな危険が、背後から襲ひかゝることを少しも豫期してゐない羽柴秀次（當時はまだ三好好次）は、三河侵入軍の第四隊として、八日の夜、庄内川を渡つて、川村に出た、それから龍泉寺の南方から、印幡を経て、矢田川を渡つた、そして白山林の麓に屯して、朝メシを食べた、先鋒隊が岩崎城に引つかゝつて、時間を潰してゐる間、後部隊はゆる／＼と休息してゐたのである。馬の腹帯をとき、甲冑を緩め、らく／＼と打寛いで前隊の行進開始をまつてゐたのである。

白山林は、小幡の東南約一里の小丘で、丘上に白山宮がある、よつて白山林と名ける、三好秀次軍が、晩春五月の朝靄の中で、爽涼の野氣に浸りながら、夜來の行軍のつかれを息めてゐる間に、徳川方の追躡軍は、午前二時、ひそかに小幡城を出て、大須賀、水野の二隊は猪子石原を経て、秀次の右側に近づいた、榊原隊は、稲葉から、秀次の背後に近づいた、いづれも敵情を探りつゝ、ギリ／＼と秀次軍を挾撃するに、もつとも都合のよい位置と姿勢とを思ふまゝに占めたまま、夜の明けのを待った。

猪子石原から、彼の右側に近づいた右翼の大須賀隊は、案内役の丹羽勘次氏重の一隊とゝもに『時こそ來れ』とばかり、弓、鐵砲を亂射して、曉の靜かな空氣を破つた、秀次の右翼には穂富山城守がゐた、彼は急を秀次の本部に報じ、秀次軍の番頭田中久兵衛吉政等とゝもに、兵を指揮して防戦した。かうして白山林の方面における第一次戦は開始された、秀吉軍の先隊池田方では

岩崎城を血に屠つて勝ち誇りつゝある時、その最後部たる秀次は、徳川勢に打ちかけられてゐるのである。



長久手古戦一場一帯右方ノ山ノ猿投山

### 秀次の敗走

徳川軍の大須賀、丹羽の兩隊が秀次軍の右側を攻撃するや、豫備隊の水野隊も、岡部隊も力を戮せて、猛烈に攻め立てた、左翼の榊原康政も、秀次軍の背後から吶喊して、その輜重を追ひ散らした。

秀次の本隊は部將長谷川秀一、よく防ぎ戦つたけれども徳川軍の猛烈なる包圍攻撃に潰亂して、秀次の本隊は長久手方面へ、その他は岩作方面へ敗走した、徳川勢は秀次の

本部を急追した。

◇ 秀次軍の本部は、追ひ立てられて香流川を渡り、細ヶ根に備へを立て、こゝを先途と防戦したが、ほとんど亂軍に陥つて、やゝもすれば大將秀次の運命すら、しばし九死の底に突き落された。

◇ 秀次は馬を失つて、徒歩となつた、身をもつて遁れるには、きはめて不便である、可兒才藏がそこへ馬上で乗り過ぎようとした、秀次はそれをよびとめて『その馬を貸してくれ』といつた。しかし可兒は『これは雨ふりのカラカサです』といつたまゝさつさと乗りすぎた、可兒は大將秀次を見殺しにして遁げて行つたのである、秀次はきはめてあぶない、そこへ木下勘解由が走りよつて、自分の馬を提供した、秀次は九死に一生を得、その馬によつて危地を脱出したが、哀れむべし木下勘解由は、弟木下周防とともに、大將秀次の指物を地に立て、防戦しつゝ、討死した。

◇ 秀次軍は、第四隊の全軍をあげて、つひに潰走した、徳川勢は遁ぐるを追ふて、追撃また追撃算をみだして、ばら／＼になつて突進する、とうとう九日午前七時である。

◇ この時まで、秀吉方の第三隊堀久太郎は、後方にしきりに銃聲の聞こえるのをきいて、田舎の小一揆がものとの爲に第四隊を攻撃してゐるのではないかと思つた。金萩原に屯して、朝めしを終つた前隊の行軍開始を待ち、前進しようとしてゐる時であつた、試みに斥候を出してみるに驚くべし、徳川軍の追躡戦だといふことが分つた、堀久太郎は、山崎の合戦でも、賤ヶ岳の合戦でも、大に戦功を表はした勇者で、イクサの進退に馴れたクセモノであるから『これは大變だ』と感じた、すぐ、秀次軍を應援すべく、金萩原を立て、長久手へ引き返した。

◇ 堀は急いで、長久手の小丘檜ヶ根にまづその隊伍を二列に整へた。前面には香流川が流れてゐる、その小流を前にして敵の追撃軍が足並を亂して殺到し來るを待つた。果して敵は浮足でやつ

て来た。堀は、敵が十間以内に近づくまでは決して發砲してはならぬことを命じた、馬上の士一人を倒すものには、百石を加増するといふ懸賞が堀から申渡された。堀の軍氣は、焰のごとく燃え上つてゐる。

果して秀次軍はしどろもどろに退却した、敗軍をもとめて秀次の本部はやつと細ヶ根にまで来たが、こゝでも徳川勢に破られた、徳川勢はにぐるを追ふて、堀の待ち構へてゐる檜ヶ根の北麓へ来た、水野重忠、大須賀、榊原、水野、岡部、丹羽の諸隊は一つになつてやつて来た、堀は形勝の地に據り、隊伍を整へ、筒口を揃へて待つてゐる、徳川方の追撃軍は、愕然として逡巡し、躊躇した。それを見すまして堀軍は一齊射撃した、煙は煙を吐き、火は火を吐いて、つるべうちの射撃には、一つのムダ玉もなかつた、二百何十名の徳川勢は、バタ／＼とやられた。

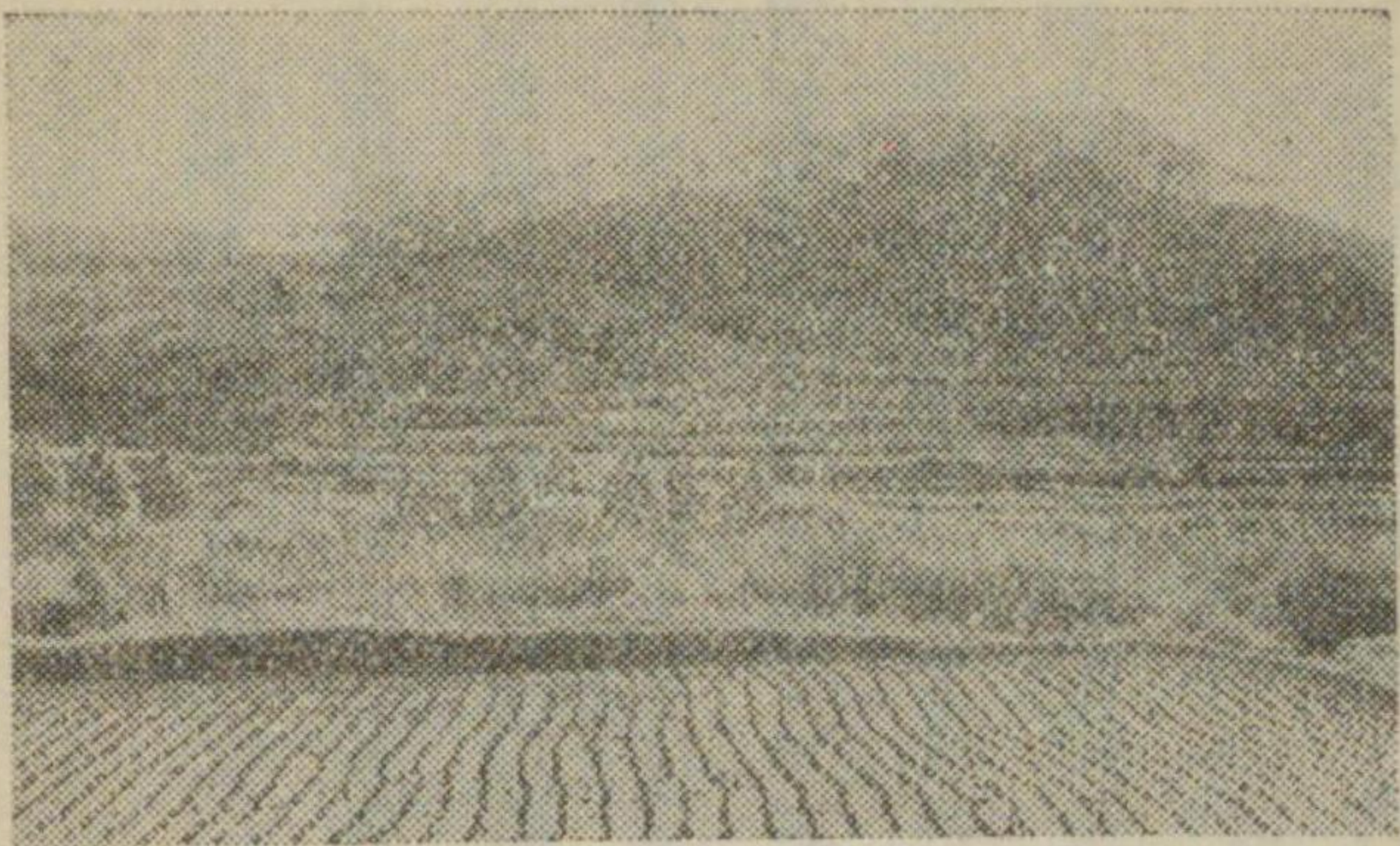
堀秀政は、全軍を勵まして、追撃軍に突貫した、徳川方の大須賀榊原は打ち惱まされ、本多康

重は敵の側面に出でんとしたが、身に七創を被つて撃退された、水野、大須賀兩隊は猪子石方面に潰走し、榊原隊は岩作方面に散亂した。

この第二次役において、堀軍は徳川方の首級五百七十餘を斬つた。

### 家康の出勤

第三隊堀久秀は、檜ヶ根の戦ひにおいて、散々徳川の先發軍を破つた。徳川方は全軍總崩れになつて退却した、堀はその兵を分つて猪子石方面に敵の水野、大須賀隊を追撃し、自から麾下六百を率ゐて岩作方面へ向つて、榊原隊の潰亂するのを追撃した。第四隊秀次大敗ののちをうけて堀はミゴトにこの強敵に



山旗御跡戦合手久長

復讐したのである。

戦争といふものは、實に一勝一敗、すべて主將の戦略と、措置如何にかゝるものである。

秀次は、敗退して、堀の軍隊に合したが、徳川勢の敗走を機として、檜ヶ根、高根山から藤森の山越しで、東春日井郡新居村へ出で樂田へ歸つた、堀秀政も敵を追ふて岩作方面に進んだが、忽ち富ヶ根の小丘上に家康の馬標である金扇がきら／＼と朝日に輝いてゐるのを見た。家康が主力を率ゐて儼然として、まさに吾を攻撃せんとするのを見た。

ササガに堀は、クセモノである。この大敵にかゝつては、味方は必定敗戦と感じた、直ちに兵をまとめて岩作の北方に退却した。

家康は九日午前二時、井伊貞政を先鋒として小幡城を發し、自から本隊を率ゐて、肅々として行軍した、午前四時頃には、本地村の南方權道寺山附近をすぎ、日の出のころには長久手村岩作

の北方、今、色金公園となつてゐる色ヶ根山上に、大石に踞して、靜かに戦機的發展するのを待つてゐた。

そこへ白山山の勝報が傳へられた、やがて檜ヶ根における味方の敗報が達した、勝報と敗報とが、交々、家康の下に致されたが、彼は儼然として、眉一つ動かさうとしない、全軍を色ヶ根山の背後に隠して、しきりに敵情を偵察し、地形を踏査せしめた、彼我の對敵状況を詳にするとともに、直ちに戰略決心を定めた、それはきはめてカンタン、明白なる戰略であつた。

すなはち、家康は敵の堀隊が、いまだその先頭部隊たる池田隊、森隊と合せざるに先つて、その中間を遮斷して、個々にこれを撃破するといふ戰略である。

家康は直ちに、色ヶ根山上の全軍を動かして、潜かに山を下つた。岩作の村を潜行して、香流川を渡つた、河の向ふにある富士ヶ根の高地に上り、金扇を朝風に押し立てた。まさしく堀軍をやり過してその前方に進出したのである、そして完全に堀と池田、森の中間に楔狀突撃の陣地を

布いてしまつた。すなはち家康の部兵をして、その正面なる前山、佛ヶ根の高地線を占領せしめた。

家康は右翼の前山に、みづから手兵三千三百を率ゐて陣し、左翼は佛ヶ根の東北端に、井伊貞政等の前衛の士に三千を與へてこれを守らしめた。織田信雄も、また兵三千をもつて西北方切通附近に、豫備隊として陣地を構へた、時に九日午前八時。

◇

堀秀政は、家康みづから陣容を整へて、儼然として敵を待つてゐるのを見て『こは叶げじ』と觀念して、スバヤク岩作の北方に退却した、家康の麾下小栗忠成、成瀬正成等は、これを追撃して、若干の首級をあげた、しかし堀軍はすでに疲勞もしてゐるし、形勢の容易ならぬを見て、全軍をまとめてソコ／＼に退却したから、全滅の悲運を見ずして、まづ無事なるを得た。

## 長久手の決戦

この時に至つても、まだ三河侵入軍の先頭たる第一隊の池田勝入は、そんなことゝは夢にも知らず、岩崎城攻略の勝利に酔ふて、泰然自若としてゐた。第二隊の森武藏守長可は、生牛原に休憩しつゝあつた。

午前七時、白山山の敗報は、第三隊森のところへ致された、池田へはすぐ森から牒報された。急を聞いて、森隊はまづ背進して長久手へ來た。午前八時過ぎ、前山附近まで來ると、モウ、家康の馬じるしは、富士ヶ根の上に輝いて、彼の將兵は、續々と前進しつゝあつた。

◇

森隊は、とにかく陣地を岐阜嶽に置いて、池田隊の來着するを待つた、池田勝入も急遽引き返へして來た、そして佛ヶ根の東南高地に將兵を配置し、佛ヶ根池と、烏ヶ狭間を隔てゝ家康の軍

に對した。時に午前九時。

◇ 池田は、途中から岩作なる堀秀政に來援を求めたが、堀はこれを拒絶した『それどころか、こちらがあぶない』といふのであつたらう。

池田隊の配置は、右翼を田ノ尻の東南高地に置き、勝入の長男之助、次男輝政の兄弟が四千をもつてそこに屯し、左翼は岐阜ヶ嶽に森長可が兵三千をもつて死守するに決し、勝入自からは二千の兵をもつて豫備隊とし頭狹間に陣した。兩軍、相對して動かす。

◇ 家康は、富士ヶ根山上に、馬標を押し立て、そこに自ら總指揮をとつてゐるが、そこからは右翼の展望は利くけれども、左翼は全く眼界に入つて來ない不自由さがあつた、そこで富士ヶ根を下つて陣地を前山から佛ヶ根に移した。

時に午前十時、兩軍、相對して戰機の熟するを待つた。

◇ 富士ヶ根の小丘上には、家康のために『御旗立山』といふ石標が刻まれてあり、傍らにはさ、やかな富士淺間神社の祠がある、こゝに立つて長久手村の全景を俯瞰するとき、英雄家康の、必勝に燃えつゝあつた當時が偲ばれる。

家康の先鋒井伊萬千代直政は、この時僅かに十八歳、彼の麾下には『井伊の赤備へ』と唱する赤衣をつけた甲州兵一千八百が、若冠萬千代を中心にして、凜々たる威風を示してゐる、それを中心として先鋒四千人は、三列になつて控へてゐる、その勇壯の狀、實に眼に見るごときものがある。

◇ 池田、森からは、徳川勢へ仕かけて行かうとする情がない、徳川勢の打ちかゝつて來るのを待つてゐる、そこで家康は井伊直政の若冠を氣遣つて、内藤四郎左衛門、高木主人の兩人を後見として井伊勢に附添はしめた。かくして午前十時、開戦の口火は、徳川方から切られた。

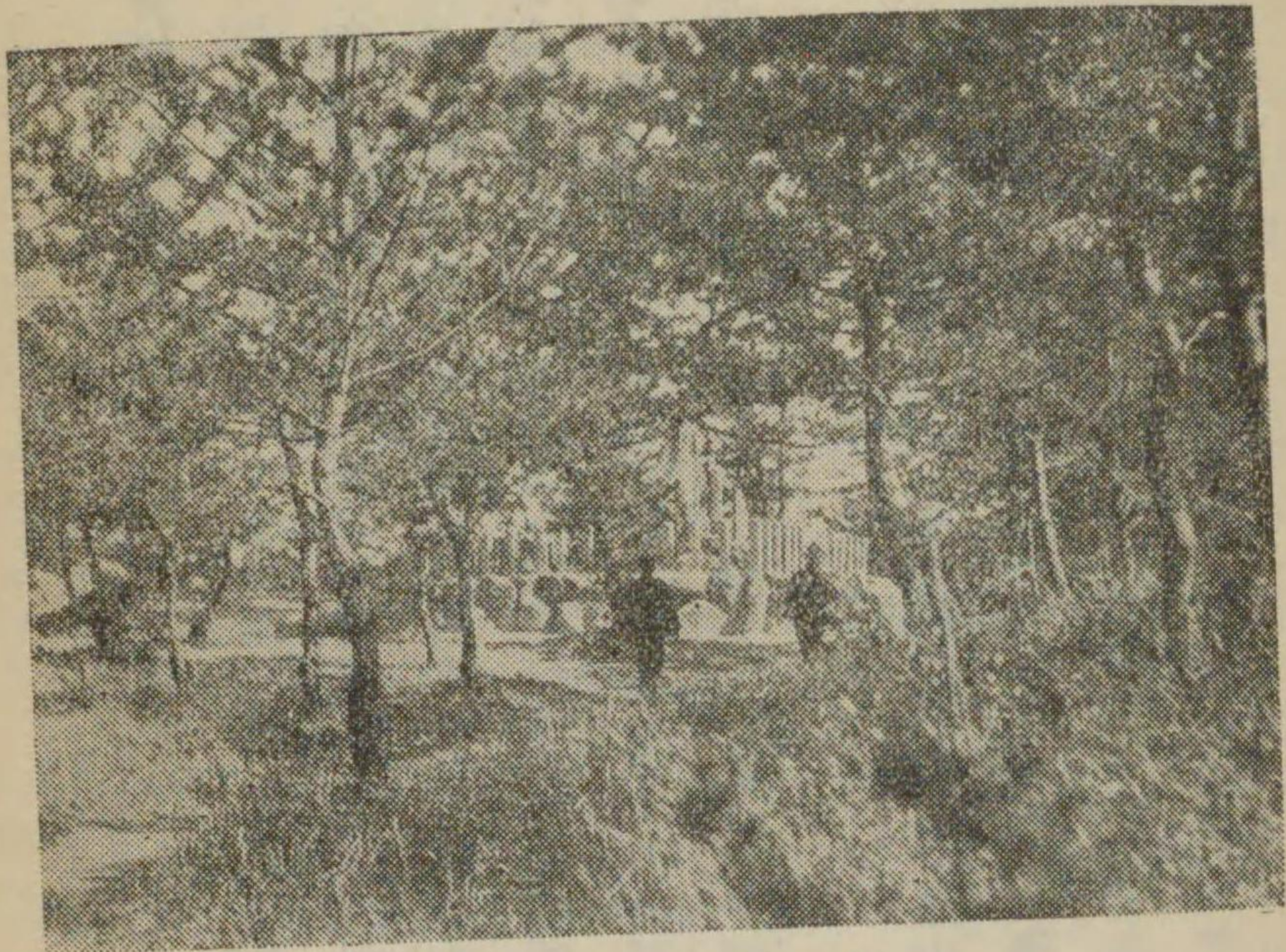
それは實に疾風迅雷の急激さをもつて、第一衝突が行はれたのである。第一線の池田兄弟、森隊は最初の一撃において二、三百百人の將士を倒されたのである。

◇

戦鬪は最初の一撃によつて、池田、森の兩隊を脅かし、混亂せしめた、池田勝入は總豫備隊をもつて、敵の最左側を脅かさんがために、田の尻より迂回して長久手に向つた、しかしその子之助、輝政の二人が早くも苦戦に陥れるを見て、まづ決死の士三十人をして正面の隘路を突貫せしめたが、徳川勢の激しい銃火に撃退された。

家康は隊を二分して、右の部隊をして前面の森長可を攻撃せしめた、森隊もまたこれに應戦した。

田ノ尻方面における右翼と、前山方面の左翼と、兩方面に互つて戦鬪は同時に開始せられ、進



池田勝入公戦死ノ跡

## 夢の跡

この日、徳川勢の急激なる攻撃は實に大河の一時に決するがごとき勢ひであつた、秀吉軍の戦死者二千五百餘人、徳川軍の戦死五百九十餘人といふ結果が、もつともよくそれを證明してゐる。

戦鬪は午前十時に始まつて、正午にはすでに完了し、午後一時追撃戦を終つた。午後二時には、家康は富士ヶ根の切通から香流川を渡り、權道寺山に移り、小山ヶ澤において首



實檢の式をあげた。

◇ 森武藏守長可は、生年二十七歳をもつて、岐阜ヶ嶽の一角において戦死した、その日、彼は討死の覚悟をもつて、白装束をしてゐた。井伊直政の手のものにて柏原與兵衛といふ足輕が、白装束を目標として、側面より放つた鐵砲に中つて、眉間を割られ、馬より落ちたところを、本多八藏なるものに討とられたのである。今も、森子爵家では、長可戦死の箇所墓標を立て、そこには櫻の老木が、勇士の墓を守つてゐる。

◇ 森長可まづ戦死して、森隊は潰亂した。池田勝入は、これを救はんとしたが、すでに時機を失してみづからの隊もまたちり／＼になつた、残兵百五十餘人を左右に従へて、あくまで頭狹間の陣地を固守したが、大勢すべて非であつた勝入みづからは、馬を失ひ、かつ傷ついた、今は、敗走することも出来ないのので、床几に腰をかけて茲に討死と覚悟を定めた、黒糸おどしの鎧に、頭

成の甲を頂き、旗をもつて敵の來るを待つた、永井傳八郎は、槍をもつて突き伏せたが、勝入は太刀の柄に手もかけず、彼のなすがまゝに委せて神妙に首を切られた、勝入は秀吉と同年の四十九歳、秀吉と同年といふことが、彼の生前における一つの自慢でもあり、秀吉に對する親しみ心でもあつた。

◇ 池田紀伊守之助は、父、勝入が討たれたと聞くや、取つて返して敵軍に亂入し、安藤彦兵衛は山上より、之助は山下より、兩々槍をもつて突き合つたが安藤の地勢が有利であつたために突に突落されて首をとられた。之助、享年二十二歳。

◇ 池田の二男輝政は、士卒に助けられて、志段味、水野、篠木、柏井方面を経て樂田に退却したかうして長久手合戦は、悲惨なる最後の幕を閉ぢた。

池田侯爵家では、明治二十四年勝入、之助父子戦死の箇所を買ひうけ、そこに墓石を建て柵を

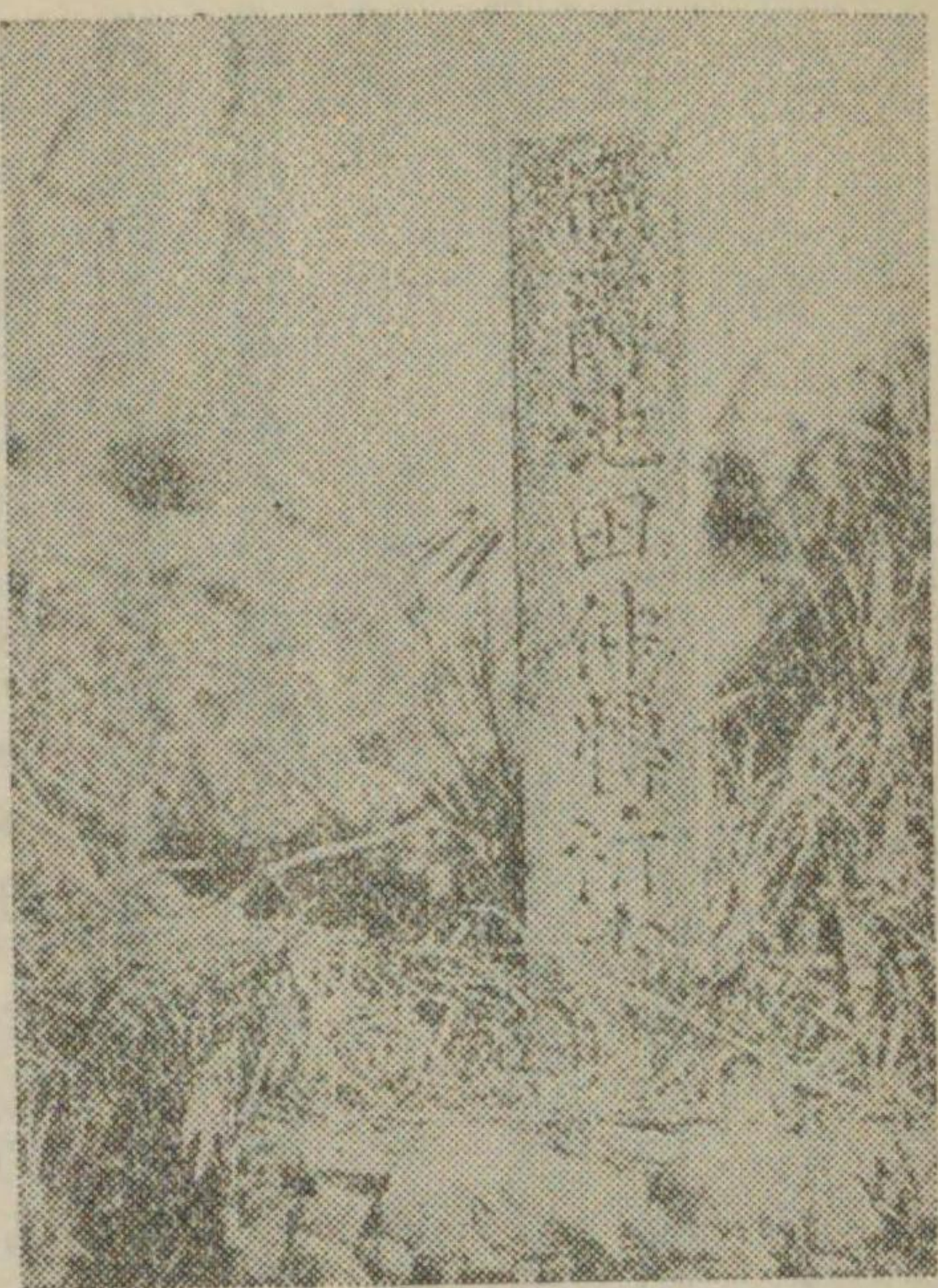
めぐらして、不幸なる祖先の靈を慰めることゝした。  
餘談ですが池田勝入の討死した場所は落島であつたといふので、池田家ではフキを食べないといふことである。



「夏草やつはものどもが夢の跡」これは俳聖芭蕉が、奥州平泉の古戦場でよんだ俳句であるが吾長久手合戦も、とうど晩春初夏の新緑のところに戦はれ、このわたりの水田には、蛙が鳴きそめてゐたかも知れない。佛ヶ根、岐阜ヶ嶽のそのわたりは、夏草が萌えそめてゐたことであらう。春風秋雨實に三百五十年、去年は、岩崎城では、丹羽氏重等の三百五十年の遠諱が営まれ、長湫尙武會でも、勝入父子、森武藏の三百五十年忌が四月九月に営まれてゐる、だから今年は長久手合戦の三百五十一年目になる。



色金山の山上には家康の床几石があり、山麓の安昌寺は丹羽氏重、池田、森などの戦歿武將の



長久手古戦場跡

位牌がまつられてゐる。寺には當時雲山和尙があつて、戦死者の死體を集めて首塚を立てて、陣没者の遺靈をあつく弔つた、安昌寺は丹羽重次追善の爲に建立されたのである。

## 終局終了

長久手の合戦は、徳川方の思ふ存分の勝利

をもつて終つた。

秀吉は、この日の敗報、秀次の第一次敗報を、樂田の本陣で聞いたのは、正午頃であつた、それを聞くや否や、直ちに全軍に出動準備を命じ、二萬の大兵を率ゐて、急遽、戦場にかけてつるべく出發した。午後一時である、しかし矢田川を渡つて、龍泉寺の砦へついた頃には、家康はも

う、小幡城へ入つてしまつた。僅かにまだ退却しつゝある徳川方の殿軍を襲ふて残兵を追ひ散らしたに過ぎない。秀吉は完全に機會を失つたのである。

◇

彼は、直ちに小幡城を攻撃すべく、ゐきり立つてゐたが、もう午後四時を過ぎて、これからのイクサは夜に入る、夜イクサは、兵家のもつとも危険とするところで、戦ひの常道ではない、左右に諫められて、やつと思ひ留まつた『明日は、小幡城に仕かけて、家康を屠らう』さういつて、齒がみをしながら、龍泉寺城に、煩悶の一夜を明かした。

◇

徳川方では、こゝで秀吉の大軍を引受けて戦ふには、きはめて不利であると感じたので、その夜十二時、ひそかに兵を率ゐて小牧山に歸つてしまつた。秀吉方は、間者を放つて家康のすでに小牧山へ歸つたのを聞いて、スツカリ悲觀してしまつた『家康といふ男はモチにもアミにもかゝらぬ大將ぢや』さう秀吉は嘆息して、自分も明くる十日、全軍をまとめ、樂田へ引き揚げた。

◇

しかし秀吉は『今に見ろ、アノ家康も、おれのところへ、衣冠をつけて、丁寧に頭を下げて來るから』といつて、自信に充ちてゐた。長久手敗戦の打撃は、相當大きかつたが、秀吉は決して悲觀しなかつた。そして戦歿した池田勝入の夫人に對しては、哀切なる手紙を送つて、綿々たるかないみのコトバで、夫人を慰めた、秀吉のこの手紙を読んだものは、どんなものでも秀吉の優しい心情に打たれるを得ないほどに哀切を極めたものであつた、彼は、かうした人間味あふるゝ涙をもつて、池田勝入夫人を慰めるとゝもに、自からも慰めた。

◇

京、大阪では、今度の家康と秀吉との對陣をもつて、天下の大事と考へ、京畿の人心は極度に動搖してゐた。それを秀吉はコトモナゲに『こゝ十四五日の間に、酒の酔ひのさめたるがごとく、世間の酔ひをさまして見せる』といふ自信をもつて小牧へ來たのであるが、事實はさう秀吉の信するようには參らなかつた。そこで小牧の對陣は持久戦となり、兩軍は相對して數ヶ月を、

何の異變もなく對立することゝなつた。

◇ 賴山陽は日本外史の中で、徳川家康が天下を握るの自信を得たのは關ヶ原役でもなく、大阪の陣でもない、實に小牧の對陣であるといふ意味をのべてゐる。愛知郡日進村岩崎の古城趾にはそれと同様の意味をもつて『徳川家の天下の定まつたのは、關ヶ原にあらず、大阪にあらず、實にこの岩崎の一戦にあり』といふ墓碑銘が書かれてゐる。まことにその通りである。岩崎城の丹羽氏重の敢然たる抵抗がなければ、長久手における徳川方の大勝は、あんな風に、萬全の勝利を得られなかつたかも知れない。

◇ とにかく、小牧山の秀吉對家康の抗争はウヤマヤに終つた。家康方は局部的の戦争には勝つたが、あくまで戦局を現状維持の程度で食ひとめる外に、積極的に手を出す力がなかつた。秀吉は尾張、伊勢、美濃などをこの間に完全に手中に收めて、家康をして一步も指を染めさせなかつた。

大局においては秀吉が勝ち、部分においては家康が勝つた。

◇ そして、この間に、秀吉は信雄と媾和し、續いて家康とも媾和した。

### 家康秀吉媾和

秀吉が織田信雄と媾和したのは、天正十二年十二月十一日であつた。信雄の居城、伊勢の桑名の西、矢田河原で、秀吉と信雄の會見は行はれた。

武名赫々として、すでに天下に雄飛しつゝある秀吉も、信雄の前に出でゝは、全く鞠躬如として、舊主信長に仕へる恭敬さのかぎりを盡して、信雄をよろこばせた。黄金二十枚、不動國行の刀、および伊勢における戦利品米三萬五千俵を信雄への土産ものに贈つた。

信雄は秀吉と會見のために、桑名城を出で、悠々と馬上ゆたかに矢田河原へ來た、秀吉は河原に床几をかけて待つてゐた。信雄が馬から下りると、秀吉は床几を立つて、十間許りも歩いて來て、信雄を迎へた。秀吉は『殊の外平伏』して、信雄を慰めた『どうして、こんな戦ひになつたのでせうか、今日からは全く昔の通り主君と仰ぎ申すべし』さういつて秀吉は信雄の歡心を迎へた。三河後風土記には『信雄、秀吉和陸の對面あり、秀吉砂上に膝を屈し、平伏し、今日再度天日を拜し、この恩忘るべからずと謝す』と敘述してゐる。少々、大袈裟な書き方であるが、人たらしのうまい秀吉のことである、人情にもろい秀吉である、感激性の強い秀吉である、涙を流して信雄の前に、赤心を露呈して、惻々として信雄を動かしたのは事實であらう。

◇  
家康と秀吉との戦ひには、もと信雄から起つたことで、信雄の依頼によつて、家康が義憤にかられて立つたのに始まる。だから秀吉としてはまづ信雄をロウラクして媾和してしまへば、家康は秀吉と敵對するの口實がなくなる。家康を屈服させるためには、まづ信雄を自家薬籠中のもの

としなければならぬ。秀吉はマンマと信雄と媾和してしまつた。家康に相談しないで、單獨媾和をとり結んでしまつた。家康はポカンとせざるを得ない。

◇  
大勢がかうなつては、家康もアキラめた。その子の於義丸を、養子として秀吉に與へることを承諾した、養子は表面、實は人質である、十二月十二日、於義丸は濱松を出發して二十六日大阪に着いた。秀吉はこれを筒井順慶の子定次の邸に預け、羽柴の姓を與へ、名を秀康と稱せしめ、河内國で一萬石を與へた、かくて天正十二年は暮れた。

◇  
天正十二年の一ケ年は、ほとんど小牧の對陣に費されたといつてもよい。家康は、秀吉ほどの英雄を、一年間に亘つて尾北の一角に引きつけて、その他に手出しをさせる餘裕を與へなかつたこれには秀吉もホト／＼困つたであらうが、家康の堅忍、持久もナミ大抵ではなかつたであらう英雄と英雄の智慧くらべ、力くらべは、他のいかなる場合よりも、もつとも緊張した場面であつ

た。

◇  
家康は、寡兵をもつて、天下の大軍を擁する秀吉に、しつかりと喰ひ下がったのである。スバヤク右手を差して、敵の利腕を殺し、頭突をもつて、敵の胸にヒタと押しつけたまゝ、半歳有餘を喰ひ下がったのである、これにはサスガの秀吉も、どうすることもできなかつた。この小牧の對陣は終生秀吉には拭ふべからざる痛手として、家康に遠慮せざるを得ない弱味を與へた。家康は終生、秀吉の前には、屈從的にアタマを下げるといふことをしないで、敢然として五分、五分の態度をとつた。たゞ秀吉の大局からする『くらゐせめ』に對しては、家康といへどもアタマを下げざるを得ない、しかしそれは外交的な儀禮の上でアタマを下げるのであつて、決して武力的屈服の意味で、秀吉に叩頭したのではなかつた。

◇  
かくして花やかな秀吉の『落日の莊嚴』には、この時、早くも家康といふ偉大な強敵を脚下に

發見することによつて、彼は一抹の悲哀を感じざるを得なかつたのである。

### 關白から太閤へ

秀吉は山崎合戦の後、京都に入るや、前田玄以を所司代として、帝都の治安を保持せしめた。

朝廷はその功を賞して、彼を従五位下左近衛權少將に任じ給ふた。

天正十一年五月には、従四位下に敘せられ、參議に任ぜられた。

天正十二年十一月、家康、信雄との媾和進行中には、すでに従三位權大納言となつた。

天正十三年三月には従二位内大臣に昇進した。當日、彼は參内して銀子千兩、太刀一腰を献上した。

これは秀吉が、朝廷のために、御所の造營その他のために、不斷の努力を賞せられてのことである。

◇  
秀吉は新たに和睦したる織田信雄を推して、權大納言たらしめた。それと同時に朝廷は勅使を大阪に遣はして、秀吉の母を大政所に、秀吉の夫人を北政所に任せしめ給ふた。

秀吉の昇進は、赫々として迅速である。彼は一轉することに、赫灼たる光耀に輝く落日の莊嚴さをもつて、天下にその威勢を揮ふた。

◇  
秀吉は、征夷大將軍になりたい希望があつた。そのためには前將軍足利義昭の養子となつて、その地位を嗣ぎたいとも謀つた。しかし家門の高きを誇る義昭は、微賤の秀吉に、源家傳來の最高地位たる征夷大將軍を許すの意がなかつた。

そこで、當時右大臣だつた菊亭晴季の獻言に従つて、征夷大將軍よりもさらに一段上の攝關家の世襲職であつた關白職を覘つた。秀吉は前關白近衛前久の猶子となり、現關白二條昭實に代つて關白となつた、天正十三年七月十一日である。

その年九月には、豊臣姓を賜はつた。

◇  
秀吉は主人信長と同じく、最初は平氏の姓を冒した。平信長にならつて、平秀吉で満足してゐた。關白となるに際し、近衛の養子となつて藤原姓を唱へた。しかし藤原も、平も彼のためにはかりもので、しつくりしないところがある。かつ當時、それに對して朝廷縉紳の間には、秀吉がみだりに他姓を冒すについて、不平があり、不満があつた。彼はこゝにおいてか、独自の姓を創つてそれを唱へることを、必要とした。これは秀吉らしい、もつとも千萬なやり方である。朝廷に請ふて、自から豊臣を姓とするの允許を得た。源平藤橘いづれもその人の器用と、力量とによつて、朝廷から賜はつたものだ。今、古人に劣らざる器用のある秀吉は、今さら古姓をつぐまでもなく、新たに姓を賜はらんことを請ふも、あへて異存のあるべき筈がない。かくして格式、門葉、舊慣、古例の一切を破つて、彼は豊臣を姓とし、關白に任ぜられた。それが信長歿後僅かに四年の後である。秀吉、時に五十歳、すでに位人臣を極むるの地位を得た。

◇  
秀吉は、すでに、天正十一年十一月から、諸侯に役を課して、大阪城を築いた。その完成したのは十六年であつたが、彼はその工事進行中から、大阪城にあつた。

一面、秀吉はまた、天正十二年に、京都に聚樂第の工を起して、それは十五年に完成した。

大阪城は天下の名城である、結構規模の雄大なる、天下あへておよぶものがない。聚樂第はもとより大阪城の雄大におよぶべくもないが、優雅と典麗とは大阪城にこえ、渠をめぐらし、塀を築いて、さながら城廓のやうであつた。

◇  
秀吉は天正十五年九月、大阪から移つて、聚樂第に住居した。翌十六年四月には天皇の行幸を仰いで、駐輦したまふこと五日におよばせられた。その後、彼は關白職を秀次に譲つて太閤と稱し、居城を伏見に築いてそれに移り住んだ。そして大阪城も聚樂第も、みんな秀次に與へた。戦塵匆忙の間にあつて、彼はまた靜かに茶にしたしみ、歌にふけり、林泉高樓のたのしみを恣まゝにした。

## 九州征伐

秀吉は、信長に仕へてから、關白になるまでには二十八年間を要した。また二十三歳といふ一介の青年にして、彼は信長に仕へた。そして五十歳にして關白となつた。昔の草履取りは、今日すでに位人臣を極めるの地位にまで昇進した。

秀吉は、ナゼ、かくも花々しい出世をしたのであらうか。彼は堅實で、まじめで、抱負は抱負として、もつとも手近な、卑近なところから、徐々として一步、一步を築き上げて行つた實際家であつた。一躍して天下を握らうなど、いふ考へはなかつた。三百石を貰つてゐる時には、それを倍額の六百石に加増して貰ふことを、唯一の希望として、シゴトにはげんだ、夜は更たくるまで、事務をとり、閑談した。朝は未明に床を離れた、遅く起きても四時を過ぎることはなかつた



彼はそれほどの勉強家であつた。

關白になつて以後の秀吉には、おのづから天下を率ゐるの威嚴が備はつた。南征北伐、干戈をのみ事とする外に、天下とゞもに大いに泰平を樂しまうとするの餘裕が湧いて來た。

◇

天正十五年、九州の島津征伐をやつたが、兵を徵すること三十三萬三千におよび、馬は二萬頭におよんだ。これだけの兵糧、糧秣一ヶ年分を兵庫、尼ヶ崎に集積して赤間關にはその内十萬石の糧食を輸送させた。かうした、大がりの規模をもつて、後方兵站のことを處置しておいてから、島津征伐にとりかゝつた。かくして九州親征の途に上つたのは、天正十五年三月一日であつた。

◇

三月二十五日、秀吉は赤間關に着いた、九州に勢威を振つてゐた島津も、秀吉が三十萬の大軍と、一ヶ年の糧食を準備してやつて來ようとは考へなかつた。この壯大な規模に壓倒されて、九

州の諸將は、忽ち寢がへりうつて秀吉に歸伏した、秀吉の勢ひに吞まれたのである。

島津義久は髪を剃つて龍伯と號し、法衣を着て秀吉に和を請ふた。三女龜壽を質として、媾和を締結した、五月八日のことである。秀吉は、最初から、島津ごときに、何の手間日間が要るものかと豪語してゐた、そして事實その通りに終つた。

◇

『彼等は、ひとりころびを致すべく候條、手間も入らず』

ともいつた、秀吉の威風の前では、島津の軍兵などは、ひとりころびして、自分から崩れると信じてゐた。九州の諸城のごときは、秀吉からみれば『總別ヤセ城ども』にすぎなかつた。

『さつまの奴原、武邊にて一戦をいたし、まけ候には、是非におよばず候ところに、合戦をも致さず、先手の備を見て、敗軍候段、中々よわものども、彼、さつまの臆病者には、太刀も、かたなもいるまじく候』

とも豪語した。この秀吉の氣焰にかゝつては、薩摩隼人の精悍も勇猛も、全くだいなしで、メチ

ヤメチャである。太閤のいはゆる位詰にかゝつて、薩摩は手も足も出なかつたのである。

◇

もちろん、秀吉が島津と媾和するには、彼の大阪出發以前から、前將軍足利義昭に手を廻して義昭の左右にある眞木島玄蕃から、島津義久へひそかに手紙を出させて、媾和勧誘の工作を進めさせて置いたのである。かくして一面には媾和工作をすゝめ、一面には三十萬の大軍を動員して一年間の糧食を準備するなど、側面から背面から、あるひは正面から島津を威壓して、ギリ／＼と屈服の餘儀なき状態に押しつめて行つた。これが太閤の戦略であり、太閤の調略である。彼は武力を用ふる前に、あらゆる外交的術策を講じ、さらに敵の内部からこちらへ内應するものをつくり、いはゆる引抜き政策で、ドシ／＼敵を引抜いてゆくの方策をも講じ、最後に至つて、強大なる軍兵を張つて威勢を示すのである、島津はこれには一も二もなく參つてしまつた。

## 小田原攻圍陣

九州征伐を終つてその年の十一月一日から、京都の北野において十日間、いはゆる北野の大茶會を催した。

これは九州征伐の凱旋を、民衆とともに祝ふといふ意味もあつたであらう。さらに翌十六年の初夏には、聚樂第に、行幸を仰いで五日間の盛宴を張つた、皇上とともに、民衆とともに、天下の泰平を祝福するところに秀吉の深い用意がある、しかしそれは、後に述べよう。

◇

小田原の北條征伐は、少しく九州の島津征伐とは、そのおもむきを異にしてゐる。九州は秀吉の外交的調略と、三十萬の大軍とで、恫喝政策によつてアツケなく片付いたが、北條の方は、さうはカンタンに參らなかつた。

北條は早雲以來、關東に蟠居して、武力を恃む家柄であつた。苟くも秀吉にして關東を欲するならば、武力をもつて取るべきであるとして、傲然たるものがあつた。そこで天正十七年十一月秀吉は北條に對して宣戰狀を出した。

◇  
北條軍、近年、公儀を蔑しるにして、上洛すること能はず、ことに關東において、我意に任せ狼藉の條、是非に及ばず、しかる間、去年、御誅罰を加へらるゝところ駿河大納言家康の縁者たるによつて、種々懇望の間、云々と、その宣戰狀の第一條にいつてゐる。つまり家康の姻戚關係があるので、今日まで遠慮して來たといふのである。

かくて諸國に動員を命じ、翌天正十八年三月一日をもつて秀吉は小田原征伐にのり出した、このたびの動員總數は二十二萬である。

◇  
秀吉は三月一日、京都聚樂を出發した。朱の具足をつけ、腰差までも若やかなものにして、齒を染めヒゲをつけた、彼は公卿にして關白であることを示さんがために好んで齒を染め、ヒゲをつけたのである。彼の得意や想ふべし。

◇  
小田原の東南、箱根連山の末端に石垣山がある、太閤秀吉は、そこに工を起して陣を築いた。長圍の計である。

石垣山の城内には、庭園に草花を植ゑたり、畑をつくつて菜草を作り、城下には都鄙の遊女が小屋をかけて、荒くれ武士の心を慰めるに任せた、遊女の來り集るを許し、全國の商人が群をなして押しよせて來た『國々の名産、津々浦々の魚肴、さては高麗、唐土の珍物から、京堺の絹布に至るまで、一として賣買せざるはない』と、榊原康政の手紙の一節にある。

石垣山の築城は、太閤の一夜城といひ傳へられ、とにかく非常に手早く、築城したものである。そこに攻圍の計を定めて、悠々と士卒を息ませた、戰爭のためか、遊山のためか、とにかくノンキな攻圍軍であつた。

◇  
長期にわたる攻圍軍では、味方を退屈させないことが、何よりも士氣を維持する唯一の方法である。そこで部下の將士に對しては、故郷から妻子を招くことを許した。關白秀吉も、また淀君をよびよせた。

小田原の北條方においても、攻圍軍に對して、やはり將士の倦怠をふせぐために長期の籠城覺悟をきめた。將棋、スゴロクを弄ぶもあれば、酒宴を張り、舞踊をなすものもある。爐を構へて悠々苦茗をすゝるもの、詩歌、連歌の興行、笛、太鼓を打ちならして祭禮のさわぎをなすものなど自由に將士のなすがまゝに委せた。

つまり、敵味方双方とも、弓鐵砲のイクサの代りに、馬鹿さわぎ、無禮講、演藝、かくし藝の競演會に、その日、その日を過したのである。

◇  
小田原城中では一年中の糧米の用意をさせた。餘つたものは市に賣つた、そして城中は飢を覺えることなく、籠城の苦痛を知らずに攻圍軍に對抗した。

## 伊達政宗

小田原の陣中に、秀吉が長圍の計をもつて、チリ／＼と敵を責つけてゐる最中に、奥州仙臺の伊達政宗は、はる／＼と陣中見舞ひのために秀吉に伺候した。小田原が落つれば、その次ぎは自分があぶなくなる、今のうちに秀吉の御機嫌をとつて置くに如かずと考へたのであらう。盛夏六月の候、しぶ／＼ながら、恐る恐る、秀吉のところへやつて來た。

秀吉は、政宗が横着千萬にも、今まで伺候しなかつたのを怒り、箱根の底倉温泉にとゞめて、なか／＼會見しようとはしない。

◇  
『お前が今日までやつて來なかつたのは、小田原の形勢を觀望してゐたのであらう。小田原城

の運命も、もう旦夕に迫つたことを知つたので、急にやつて來たのだらう。それはお前が心服してのことではない』

秀吉は使者をもつて、政宗にさう傳へさせた。政宗は恐れた、冷汗をかいた、これでは少數の従者をつれて、わざ／＼恐るべき敵の陣中に、好んで捕虜になるためにやつて來たのも同然である。とにかく徳川家康に縋つて秀吉の怒りを釋くことにつとめ、三日のち辛つと秀吉に謁を許された。

◇

秀吉は甲冑をつけて、床几によりながら、政宗の禮をうけた、政宗が退出せんとするや『わしはお前の遅參を憎む、しかし一旦、かうして謁を許せし以上は、何もいふまい。遠來の饗應に、わが布陣の模様を見せよう、うしろの山にのぼれ』

さういつて、秀吉は政宗をつれて、背後の山頂にのぼつて、陣形を指點しつゝ、説明した。

『お前は、奥州の小戦には馴れてゐるだらうが、大戦の布陣は、まだ見たことがあるまい。後

學のため教へて遣はさう』

この時、秀吉は小姓一人を従へただけである。ことさら政宗に刀を持たせて、千尺の崖の上に立つて、少しもうしろを顧みなかつた。秀吉の眼中には政宗がなかつた。

◇

政宗ほどの豪傑にして、この時一刀の下に秀吉を切り殺さうと思へば、出來ないことではなかつた。後年、政宗はこの時の感想をのべて云はく

『太閤は唯ひとりで、予を誘つて山上に登つた、その時、予はたゞ秀吉を恐るゝ心のみあつて彼を害するの意を抱かなかつた。太閤は大器にして、天威を有する人であらう』と。

◇

『とんどろ／＼、／＼、ととろなる釜も、ととろなる釜も、湯がたぎる、たぎるやたぎる』  
十六七から、二十歳ばかりの若い女房を、數多よび出して、小唄を唄はせ、酌をさせ、踊らせ、興至るや秀吉は金扇數本を投げ出して、さらに舞をまはせた、女房たちの唄がこれである。

日夜、かうした歡樂のあそびを戦前に催してゐるのを、武邊一徹の武士たちは、唯、苦々しく感じた。

ある時、浮田秀家の家臣花房職之が、馬上のまゝで、能樂を催してゐる秀吉の御前を、兜もぬがず、そのまゝ乗り切らうとすると、それを咎めるものがある。

「御前である、馬を下りろ」

花房はそれを聞くと、

「何に、戰場にあることを忘れ、能樂を催して遊ぶやうな淺墓な大將に對して、誰が馬を下りるものか」

パツと唾を吐きかけて行つてしまつた。



秀吉はカンシヤク玉を破裂させた。

『あいつを絞首せよ』

秀家は仕方なく立つた、一町ばかり行くと秀家は呼び戻された。

『絞首は可愛想だ、切腹させよ』

秀家が命を奉じて一、二町ゆくと、秀吉はまたよび戻した。

『今日、天下廣しといへども、予に對してあれほどの大言をするものはない、エライ奴ぢや、命を助けて、加増せよ』

これが秀吉の、カラリとした天真ランマンの性格である。

## 小田原開城

秀吉は小牧の對陣では、家康を小牧山に釘づけにして置いて、その間に美濃、伊勢、尾張をすつかり手中に収めてしまつた。小田原の攻圍陣では、北條を小田原城から一步も出させないで、その間に關東八州をことごとく切り靡けてしまつた、これが秀吉の戰略である。たゞ島津征伐で

は地理上の關係で、その逆をやつただけである。すなはち、北九州の諸城をすつかり略取して、最後に島津を薩摩の一隅に押しつけて降伏させたのである。

◇  
秀吉がその兵を一城に留めて、それを攻略する間にも、彼は廣い全局に目をつけて、他方ではドシ／＼大量生産的に地方征服を稼いでゐるのである。小田原の攻圍陣も、曠日彌久に、たゞ眼前の小田原を攻めてゐるのではない。關八州の諸城をそれ／＼彼の麾下に降伏させて、小田原の北條の手をもぎ、足をもいで、どうすることも出来ない無力のものにしてしまつてゐるのである。これは戦はずして、敵を屈服させる法である。またこれは最大抵抗をさけて、最小抵抗の方面から、敵を叩きつける方法でもある。

◇  
かくして小田原城は、三ヶ月餘の對陣の間にすつかり弱つてしまつた。北條氏直の夫人は家康の娘であつた。そこで氏直は自から家康の陣營に赴いて開城の斡旋を頼んだ、家康は姻戚關係が

あるので、秀吉に氣兼ねするところもあるので、直接、衝に當るをさけて、氏直を瀧川勝雄に送つた。勝雄は直ちに氏直の希望をきいて、これを秀吉にとり次いだ。

秀吉は、快諾した。

『氏直の態度は奇特である。どんなことでも希望に應ずる、汝宜しく取計らへ』  
それが七月六日のことである。翌七日、小田原城は開城された。

◇  
七日、小田原に籠城しつゝあつた諸將士卒、百姓、町人にいたるまで、無慮數萬人が、ぞろ／＼と城をすて、退散した。秀吉は片桐且元、脇坂安治に命じて城を受けとらせ、同時に掠奪、強姦、虐殺などの暴行のないように嚴重に取しませた。

北條氏直は父氏政、叔父氏輝、氏房等とともに城を出でて、城下の醫師豊村安栖の家に移つた。十一日の夜、秀吉は氏政、氏輝に切腹を命じた。

氏輝は從容として自盡し、氏政は、

「猿めが、我を誑つた」

と、罵りやまなかつたが、もとよりどうする事もできないので、氏輝とともに席を並べて割腹した。

氏政兄弟の首は、石田三成をして京都に送らせ、一條戻り橋に梟された。氏直は高野山へ放たれた。

小田原役は、かくして終結した。



秀吉は小田原役を終るや、奥州へ向つた。途中、鎌倉八幡宮に詣でて、頼朝の塑像を撫でた。「徒手にして、天下を取つたものは予と、卿とのみ、卿はもとより名族の出、功をなし易し、我はこれ人奴から起り、その勞は少くない、かつ我は關白にのぼり、卿よりも位は上である。我、まさに大明を征せんとしてゐる如何」と。頼朝の像を前にして、例の氣焰をあげたのである。



途中、野州宇都宮では、佐野天徳寺を召んだ。

『お前は長老だから、信玄、謙信のことを知つてゐるだらう』

と尋ねた。佐野は信玄をほめ、謙信に及ぼうとすると、

『謙信は早く死んだから、名聲を失はずにすんだ。今日まで生きてゐたら、予の草履を取らせただであらう』

秀吉の眼中には頼朝もなく、信玄、謙信もなかつた。それが彼の自信であつた。

## 中村訪問

關白秀吉の抱負は、すでに宇内を呑むの勢ひがあつた。頼朝も彼の前には一顧の價値がなかつた。況んや信玄、謙信においてをやである。



小田原征伐を終はつて、彼は家康を率ゐて、草、茫々たる武藏野を巡視して、家康をそこに封じた。貴公は、よろしく江戸に居を占めて、關八州を治めよと、家康にとつては迷惑千萬であつたらうが、秀吉の命には背くわけには行かなかつた。秀吉も、家康を駿・遠、三の肥沃の地に置くことの厄介千萬なのを悟つて、彼を江戸に敬遠したつもりである、しかし家康は北條の故地をすつかり頂戴した上に、風呂代として十萬石をもらつた。焉んぞ知らん、それが後年の繁華なる江戸城となり、三百年の泰平の基を開かうとは。



秀吉は、宇都宮から小山に行つた。岩槻の城主成田氏長の妹が、關東第一の美人なるよしを聞いていたづら心を起して、それを百々塚の營に召して寵愛し、のち京都へよびよせて女房とした。兄の氏長は、さきに小田原攻圍陣において、碌々として爲すところなきにより、岩槻の所領を没收して、さらに黄金千兩の追徴を命ぜられたが、妹の美貌のために、秀吉を動かし、遂に氏長をして野州烏山二萬石に封ぜした。この女、美人の上に、才氣があつたと見え、一代の英雄秀吉を

手玉にとつて、ミゴト兄を落魄の窮境から救ひ上げた、ソートーなもんである。



秀吉はさらに會津に入り、蒲生氏郷に會津七十萬石を興へた。仙臺の伊達正宗も左右なく、秀吉の幕下に歸伏した。

奥州巡遊から、京都への歸途、清洲に入つた、そして生れ故郷の中村へ立ち寄つた。あの村、この里、森も、川も、野も點々として囁目するところの故郷の山河に接したとき、秀吉の心は、いかに深い、なつかしい感懐に慄へたことであらう。秀吉の中村訪問の際には、吉川廣家の卒、栗棲武格といふのが、お伴の列にあつた。秀吉は武格を顧みていはく

「あそこは中村といつて、予の生れたところである。行つて見ようと思ふが、その方は、予に従つて行くかどうか」

武格は謹んでお伴を請ふた、秀吉は馬上豊かに中村へ歸つて行つた。しかし武格を村はづれに留めて、ひとり村内へ入つて行つた。

彼は權威赫々たる關白秀吉として、中村へ歸つたのではなく、昔の藤吉として村の父老に逢ひたかつたのである。いかめしい従者の列を、村はづれに残して、ひとりで村内へ入つたのはそのためである。

『わしは藤吉である』

さういつて、村内の父老たちを集めた、父老はいづれも恐惶し、俯伏して、誰一人、面をあげるものもない。

『わしが子供の頃にくらべると、家も増えた、村もよくなつた』

秀吉は、さういつて気軽に、機嫌よく、父老たちと酒をのんで、懷舊談をした。こゝにも秀吉の面目が、あり／＼と窺はれる。

かくして三月一日、北條征伐のために、京都を出發した秀吉は、秋風颯々と吹く九月になつて

京都に凱旋した。實に七ヶ月の長い征塵を、山紫水明の京都に、洗ひ落したのであつた。

二十日ごろに、かならず参り候と、若君いただき可申候、そのよさ（その夜）に、そもじをもそばにねさせ申候可候、せんかく（折角）御まち候可候、かしく

てんか

おちや／＼参る

こんな、むつまじい手紙を、關東から淀君へ送つてゐるのである。九月二十日頃には、三つになつた若君鶴松を抱いて頬すりをして可愛がつた筈である。そしておちや／＼の淀君をも、傍に寝させて戦塵を慰さめたものである。

## 南方經略

以上で、荒ごなしに、天下は、秀吉の威令に統一した。天正十年信長の本能寺兇變ありてのち

足かけ九年の天正十八年にして、彼が征戦の事業は、全く一段落を告げた。非常に早かつたともいへるし、また、随分、歳月を要したともいへる。彼は急ぐべき時には急ぎ、ゆつくり構へるときには、ゆつくりした。

◇  
しかし、彼の前途には、まだ大陸経路の壯圖が待つてゐた、朝鮮征伐がそれである。しかし秀吉は朝鮮征伐が目的ではなかつた。道を朝鮮にかりて大明を征服するのが彼の目的であつた。しかし支那大陸を征服するだけが彼の目的ではなかつた。インドを手に入れ、南洋を収め、世界をすつかり歸服せしめることを最終の理想とした。

彼がまだ信長の安土城にあつたころ、中國征伐の命をうけて出發した四十一二歳の當時、すでに大明征略の抱負を信長にのべて、大に信長を感心せしめたことがある。すなはち大陸征略のことは秀吉にとつては一朝一夕のことではない。彼が年來の宿志であつたのである。ほんの氣まぐれのために、この大事を、無謀にも強行したのではないことは、あくまで認めてやらねばならな

い。

◇  
天正十七年、琉球國は島津義久、天龍寺桃庵和尚によつて、明國の塗物、琉球の名産などを進物として、使節を遣はして秀吉に歸伏の意を示した。天正十九年正月にはインドの使節がやつて來て、インド副王ドン・ワルテの國書を秀吉に捧げた、モンタンの刀二口、ピストル二挺、鎧二領、天幕一帳、馬二頭などを獻じた、秀吉はその天幕を庭上に張らせ、金飾の帳帷を立てめぐらし、アラビア馬を御せしめて一覽した。

フィリッピンに對しても、秀吉は歸伏を促した『もし、匍匐膝行を遅延するにおいては、速かに征伐を加ふべきや必せり、悔ゆるなかれ、天正十九年秋季十九日』といふ、頗る權幕の荒い手紙をフィリッピン太守ゴメス・ベレスに送つて、彼を威嚇した、其使者に立つたのが長くフィリッピンに滞在してゐた原田孫七郎であつた。

フィリッピンと同時に、臺灣をも歸伏せしむべく原田孫七郎を使ひせしめた。

◇  
これらの手紙の中には、いづれも秀吉の母が日輪を呑むを夢みて懐胎し、その生れるや『日光室に充ち、室中晝のごとし』といふ日輪托胎説が強調され、相者占筮して『これ徳色四海に輝やき、威光萬方に發するの奇異なり』との自畫自賛の宣傳が臆面もなく試みられてゐる、これは英雄が、人を駕御するの常套手段で、秀吉みづからさうした神祕的な怪奇説を流布して、海外を壓服せしめる手段に用ゐたものである。

◇  
秀吉の祕書山中橋内が、文祿元年五月十八日に書いた書類の中に

『うへさま（秀吉）は、ほんきん（北京）のみやこに御座所をなされ、又、それをたれぞ御すへなされ、につほん（日本）のふなつきにんぼうふ（甯波府）へ、いんきよ所を御きわめなさるべき云々』

とある。すなはち、秀吉は北京の都に、居所を移し、そこにまた誰かを据ゑておいて、さらに日本からの要津たる甯波府に隠居所を造つて、そこに秀吉みづから居らんとする抱負を披瀝したものである。

◇  
『處女のごとき大明を誅伐するは、山の卵を壓するがごとし、晉に大明のみにあらず、況んや天竺、南蠻も、またかくの如かるべし』これは文祿元年六月、秀吉が毛利輝元に送つた書中の一節である。

『山の卵を壓するがごとし』これが支那征略に對する秀吉の氣焰である、彼の眼中、支那もなく、南洋もなく、印度もない、實に意氣世界を呑むの概があるではないか。

## 秀次の死

天正十九年二月、大納言秀長が死んだ。秀長は秀吉の異父弟であつた、溫良で、必らずしも凡

愚でない、秀吉の背後にあつて、彼を内助するには、もつとも信用のおける人物であつたが、五十二歳にして死んだ。秀吉の身邊は淋しかった。

その年、彼の實子鶴松が、八月の暑熱の中に、四歳にして死んだ。これは秀吉にとつて、最大の打撃であり、最大の哀傷事であつた。彼は愁傷し、慟哭して、日夜、悲嘆の中にくらした。近侍、諸侯は見るに堪へずして、髪を切つて喪に服した。秀吉の大陸遠征は、このかなしみを紛らせるための舉でありとするの論者もある位に、鶴松の死を悲しんだ。

◇

その年の十二月には、關白職を秀次に譲つた。大陸遠征のために國政を他に委す必要があつたからである。それより以後、秀吉を太閤とよぶことになつた。太閤とは關白職を退いたものに對する從來からの稱呼で、ひとり秀吉を太閤とよぶわけではない、しかし秀吉の太閤が、あまりに有名で、太閤は秀吉の創始、獨唱したかの觀がある。

秀次は、かの長久手合戦の際には十七歳で、散々徳川方に打ち負かされた、その時、秀吉は非

常に憤つて、五ヶ條の厳しい誨告を與へたことがある『お次ぎの信勝は病身だし、お前に秀吉の代りをもさせたいと考へてゐるのに、その方の覺悟は何といふさまだ、これは秀吉の名字を残すべからずといふ天道のはからひかと思ふ、是非に及ばぬことゝさとり、くやみも致すまい』といふ意味の愚痴をのべて秀次を責めた。秀次は秀吉の實姉が、三好法師に嫁いで生んだ長男である秀吉にとつては、血縁のつながりの親しい甥である、それを養子にして、彼のあとを嗣がせようと考へてゐたのである。

◇

とにかく、秀吉には實子がなかつた、晩年に生れた鶴松が死んでからは、一層、寂しかった。秀次はそのために、秀吉から叱られながらも愛された。彼は、はじめ江州八幡で二十萬石を與へられ、後尾張と伊勢の大封をうけ、天正十九年、いよく關白になつた、時に漸く二十四歳であつた。

しかし秀次は、輕薄才子であつた、とうてい、秀吉のアトをうけて、その大任をつぐに足るの

人物ではなかつた、だから秀吉は、呉々もそれを心配し、かの五ヶ條の誨告においても、豊家を一代にして滅ぼさんとするのは天意の然らしむる所で、また如何ともすることができないと慨いてゐるのである。秀吉はしかく覺悟してゐるから、あへて後悔はしない、もし今後、自分のこの諭告について、神妙に分別して、省みるところなくんば、神かけて他人の手をかりず、みづから手討ちにすべしともいつてゐるのである。

◇

秀次は必ずしも馬鹿ではない。むしろ人間は利口の方であつた。多少、書物も讀めば、理窟もいふ、彼は東征に従つたとき、足利學校や、金澤文庫をさぐつて、珍書を求め、もち歸つて繙讀するほどの讀書子でもあつた。だから全く、とりどころのない男ではなかつた。しかし、太閤があまりえらすぎたのである、そして太閤のアトをつぐには、人物が少々劣つてゐたのである。そのため後年、文祿四年七月、秀吉は彼を廢して高野に放ち、かつ切腹せしめた。

◇

秀次が切腹を命ぜられた日、彼は高野山の青巖寺で碁を圍んでゐた『この碁はわしの勝ちや、みな見よ』といつて泰然として、使者から自裁の命を聞いた。それから『一二通遺書を書きたいが、許してくれるかどうか』を聞いた、使者は『夜になつてもよろしい、ゆるゆると處置されたい』と答へると、秀次は三通の遺書をかいて、身邊の始末をし、沐浴して身を潔め、刀を小姓等に分ち與へて悠々と切腹した。秀次の死は彼がひそかに秀吉に叛いて、天下の將士を招いた陰謀がバクロしたからである。二十八年の春秋は、夢のごとくにして終つた、秀吉の身邊はますます落寞の感を加へざるを得ない。

## 朝鮮征伐

太閤の大陸遠征、すなはち世間に有名な朝鮮征伐は、文祿元年三月一日、いよく、決行された。太閤の出師は、九州征伐も三月一日だつたし、小田原征伐も三月一日だつた、そして朝鮮征伐も

三月一日だった、三月一日出征といふプログラムのためには、前年から、ずつとその準備をつづけてゐたことは勿論である。

◇  
朝鮮征伐は、結局、太閤にとつては失敗だった、失敗ではないまでも、何の得るところもなくて終つた。それは太閤みづから朝鮮海峡を渡つて、大陸に乗り出して行かなかつたために、遠征軍が捗々しく進捗しなかつたからである。太閤自身は、朝鮮へ押し渡るつもりはあつたが、之を諫止するものがあり、それに日本國內の情勢が、その留守中に、どんな變事を惹き起さないにも限らない心配があり、それこれの事情に制せられて、みづから思ひ切つて遠征軍を大陸において指揮することができなかつたためである。

◇  
しかし、朝鮮海峡は渡らなかつたけれども、九州の北海岸、名護屋に築城して、そこに遠征軍の本營を定め、そこでみづから遠征軍の指揮をとつた。名護屋築城は、前年から加藤清正が命を

うけて、そのシゴトに當つた、清正の築城は名護屋、熊本、名古屋と經驗に富んでゐるわけである。とにかく太閤は名護屋にあつて指揮をとつた。最初のうちは、それでよかつたが、遠征軍が次第に朝鮮の内地深く進んでゆくにつれて、後方連絡が思ふようには行かず、結局二階から目ぐすりといふ結果になつたのは、やむを得ない。

◇  
當時、大陸遠征については、秀吉の左右にも自重論者と、積極論者とがあつた、浮田秀家のごときは、瀬戸内海の家權を握つて海外の形勢に明らかだつたので、積極的な外征論者であり、その庇護の下にあつた小西行長や、太閤の氣に入りの加藤清正などの武人は、もちろん外征論者だつた、五奉行の一人淺野長政のごときは、用心ぶかい自重論者で、徳川家康のごときも、最初から打ち明けて相談に與かつてゐないので、それも用意ぶかく沈黙を守つてゐたが、ハラの中では自分は箱根の天嶮を守つて、江戸にゐることが、日本の動搖をふせぐ唯一の方法だと信じ、ひそかにそれをもつて自分の任務と考へてゐたらしい。

しかし、當時の人々の海外に對ある視野は可なり開けてゐて、今日、考へるほどにも狭いものではなかつた。徳川氏の鎖國時代の考へ方で、太閤時代の海外に關する認識程度を想像してはならない。

當時の上戸黨は、チンク、ブドウ酒、ミリンチウ、ロウケなどゝ稱する洋酒を好んで飲んだものであり、下戸黨はカステーラ、ポウル、カルメセル、アルヘイ糖、コンペイ糖などゝいふハイカラな菓子に隨喜したものである、その他の風俗では、カツパ（合羽）や、メリヤス、コハゼ、などが流行し、面白半分に南蠻帽子を冠り、コンダツ（念珠）やクルス（十字）を着けた美人が耶蘇教寺院に通ふてゐた時代である、時計、風琴、眼鏡、蟲眼鏡、南蠻鎧など、それらの新奇な流行品を通じて、異國情調に關する關心の深められてゐた時代である。そして日本語をローマ字に綴つたり、日本人にしてキリスト名を假稱して得意になつたりした時代である。安土にはセミナリーと稱する大學があり、天草にも宣教師の學校があつた、さうした時代における日本人は決

して、徳川の鎖國時代におけるように、海外に對して無知識ではなかつた。

かゝる時代に、一世に卓越したる英雄豊太閤が、朝鮮、大明を征服し、南蠻、フィリッピン、インドを經略せんとするの野望を抱くのは、むしろ當然のことかも知れない。況んやこの時代における日本國內の富力は、急激に發展して黄金はありあまるほど豊富であつた。金があつて、武力があつて、世界の形勢が分つてゐるのだから、大陸征略の壯圖の企てられたのは無理のないことなのだ。

## 軍用金問題

腹が減つてはイクサができぬ、戦争につきものゝ兵糧である、兵糧には金が必要、金がなくてはイクサができぬ、ところが秀吉は思ひの外の分限者であつた、金はありあまるほど貯へてゐた、



権力のあるところには、自然に金も集まるものと見え、すこぶる裕福であつた。太閤は生れつきのハデすきである、むしろ金使ひの荒い人間であるが、使ふだけの金は、いつのまにかちやんと用意してゐた。天正十六年には、有名な『金くばり』をやつた、はじめて鶴松が生れたうれしさ、金庫を開いて、金をくばつた、誕生のもちをくばる代りに、金を配つたところに、秀吉の面目がある。

◇

内大臣織田信雄と徳川家康には黄金二千兩と銀一萬兩づつ、羽柴秀長に黄金三千兩、銀二萬兩、秀次と秀家には各黄金千兩、銀一萬兩、毛利輝元、上杉景勝には各黄金千兩、銀一萬兩づつ、前田利家に銀一萬兩、その外に金銀二十萬七千兩を中將二人、少將五人、侍從十三人に分けてやり、母の大政所に金三千兩と銀一萬兩を、妻君の北の政所に金一萬兩を、徳川家康の妻君と浮田康家の妻君には金五千兩づつ、丹波少將秀勝には金千兩を與へた、この分配金總額は實に三十六萬五千兩におよんだ。

◇

金鑛採掘の方法が開けて、當時は日本全國いたるところの金山が眼をつけられた。武田信玄などは盛んに所領内の鑛山を掘つた。秀吉の富は、さうした鑛山起業熱の波にのつて續々と掘り出される金銀を、府庫に藏ひこんでゐたのである。天正十九年、いよいよ朝鮮征伐の發令をすると同時に、その十二月には、新たに『花降金と稱して、花紋を抑したる金貨と、石州銀と稱へる銀貨とを鑄造して軍用に供した、太閤の側には長束正家といふ大藏大臣があつて、甘く財政方面のことを切り廻した。』

◇

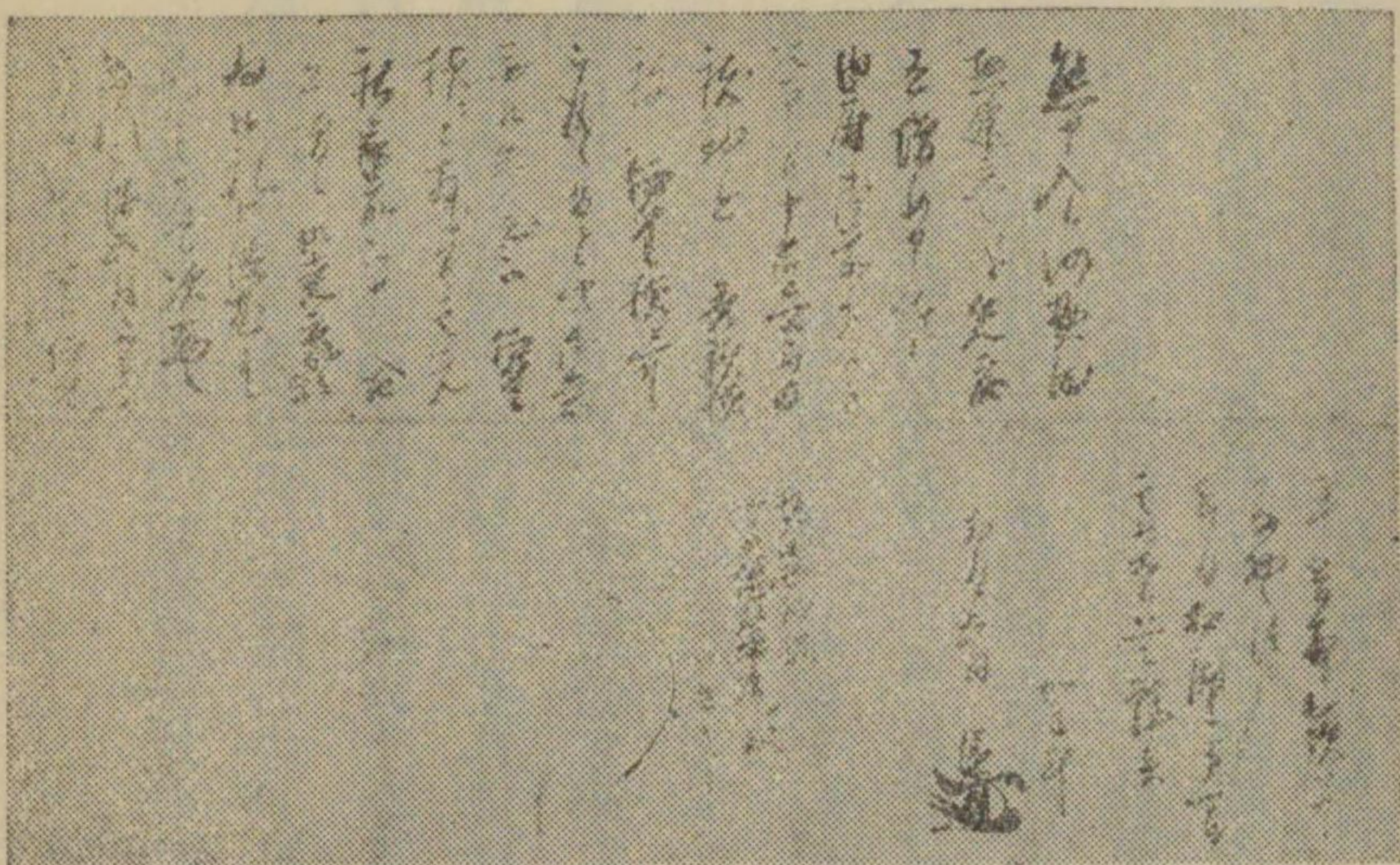
こんなに金銀が豊富な上に、臺所を預かる大藏大臣に、ソロバン高い長束正家がついてゐるのであるから、鬼に金棒である、朝鮮征伐にも、大明征伐にも、幾十萬の大軍を動かすにも、軍用金に不足を告げる心配はなかつた、だから天正十九年より九州の諸大名に命じて、北九州の海岸名護屋に大城を築かせた。清正がこれを宰領して工事を進めた、文祿元年には上方から、名護屋

に至る百何十里の間に、道路をつくり、橋を架けさせた、そして一里ごとに飛脚を置いて、急信の用に供へた、さらに朝鮮の地圖を諸大名に與へて、出師の準備をさせた。

大陸遠征の本營にあてた名護屋城は、急ごしらへの普請ではあつたが、其規模は大阪城に劣らぬ華麗、宏壯な建築であつた、神屋宗堪の日記にしろすところによると

『柱は、金を延べてつゝみ、敷居も鴨居も同然たり、壁は金を長サ六尺ほど、廣さ五寸ほどづゝに延べて、がんきにしとむ、縁の口の四枚のこし障子あり、骨と腰板は金にして、赤きもんしや(紋紗)をもつて張り、疊の表はしようぐ、ひへりには金欄、中こみには越前綿なり、三尺の縁は竹つゝらにてかけり、同じくかまち皮むぎの木なり、上に圓坐三つあり』  
太閤の成金ぶり、豪奢ぶりが、躍如として目に見るようだ。

一番陣は、小西行長等一萬八千七百人、二番は加藤清正等二萬二千八百人、三番黒田長政等一



加藤清正書状

萬一千人、四番島津義弘等一萬四千人、五番福島正則等二萬五千人、六番小早川隆景等一萬五千七百人、七番毛利輝元三萬人、八番浮田秀家一萬人、九番羽柴秀勝等八千六百人、その他二萬四百人これに海軍三千九百八十人、名護屋の本營に駐屯するものを合せて二十八萬一千八百四十人、三百年後日露戦役に吾が國が滿洲に送つた兵數に比べてさして劣らない大兵を、三百年前に大陸に動かさうとしたのである、こゝに太閤の太閤らしい豪勢さがあるではないか。

### 太閤の教書

太閤の朝鮮征伐は、始めは脱兎のごとく、終りは處女のごとくの觀がある。先鋒小西行長は文祿元年四月十三日釜山に上陸して、東萊に出で、黒田長政は十四日朝鮮の某沿岸に上陸して金海府にすゝみ、加藤清正の一隊は十七日熊川に上陸して、二十一日には慶州を占領し、これらの三軍は三道から進んで四月二十九日には忠州に落ち合つた。そして五月二日には早くも加藤清正は首都京城を占領した、次で行長も來た。上陸以來、僅かに二十日の短時日であつた。

◇

朝鮮王李公は五月一日、京城をのがれて北に走つた。吾が遠征軍の諸將は京城に會して軍議を凝した。名護屋の本營にあつた秀吉は大によるこび、關白秀次に教書を送つて、出征準備を命じた。それは五月十八日の教書として有名なものである。その教書にはこんな意味が書かれてゐる。殿下陣用意（秀次出陣のこと）油斷あるべからず、來年正二月頃進發すべし、高麗の都は二日すでに落去した、されば屹度、御渡海なされ、このたびは大明國までも残らず仰付けられ、大唐の關白職お渡しなさるべく候、云々。

秀次を朝鮮へやつて、大唐の關白職にするといふ意氣を表明したものである。そして秀次には三萬人を率ゐて、明年兵庫から出船すべく命じ、その出征準備の支度金として五萬石を貸してやり、立派な武具をととのへしめ、京都の御城米には手をつけずして、三十萬石を出師の用意に秀次に與へ、不足は太閤自身の倉庫米を、入用に從つて使用すべきことを命じてゐるのである。太閤の兵站準備がいかに豊富であつたかゞ分るであらう。

◇

殊に、この五月十八日の太閤の教書で、見のがしてはならない重要な點がある。それはすでに朝鮮の國都を占領して、大明國征服の成功もすでに眼前に見えてゐる時のことであるから、太閤は、その時の心境、抱負を、率直にのべてゐることである。すなはち

一、高麗の御留守居として、官部中務卿法印（繼潤）を召しよせらるべく候、用意して相まつべき旨、仰せ出ださるゝこと

一、大唐の都（北京）へ叡慮うつし申すべく候、その用意あるべく候、明後年行幸たるべく候

しかれば都まわりの國十ヶ國進上すべく候、その内にて諸公家衆、いづれも知行仰せつけらるべく候、下の衆十倍たるべく候、その上の衆は仁體によるべきこと

一、大唐關白、右仰せらるゝごとく、秀次へ譲らせられ候、しからば都の廻り百ヶ國御渡しなさるべく候、日本關白は大和中納言（羽柴秀俊）備前宰相（宇喜多秀家）兩人のうち、覺悟次第にて仰せ出さるゝこと

◇  
太閤秀吉、本氣になつて、こんな大きな夢を見てゐたのである。秀次を大唐の關白となし、天子様を支那の北京へ行幸を願ひ、北京周圍の十ヶ國を、皇室の御用として差し上げ、貧乏の公家衆以下に、いづれも十倍の知行を與へることを夢みてゐたのである。そしてこれが、マンザラの白晝夢でなくして當時の大陸遠征の規模と實力とから見て、決して實行不可能ではなかつた。秀吉にとつては、自信に充ちた抱負なのであつた。

◇  
だから、秀次には來年、高麗へ出陣すべくあらかじめ準備を命じ、明後年には皇室の北京行幸の用意をするやう、秀次に命じたのである。そして名護屋、高麗、所々の兵糧は『澤山に之あり候間、用意に及ばず候、路次中の覺悟ばかり仕らるべき事』ともいつてゐるのである。つまり大陸出征中の兵糧は心配しなくともよいから、名護屋へ到着までの道中の準備さへしておけばよいといふ意味である。

◇  
太閤秀吉は、すでに成功に酔ふて、すでに意氣四百餘州を壓するものがある。

## 媾和使來往

石田三成は、この時まだ名護屋の本營にあつたが、太閤に進言していはく。

「殿下、速かに渡航したまへ、今や萬障を排して、親征したまふべき時である」と。